

鬼人のヒーローアカデミア

黝 証呂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説の妖怪と奉られる日本三大妖怪といえは

酒呑童子、玉藻前、大嶽丸の3つが挙げられる。

この物語はその一角：酒呑童子の末裔と呼ばれる家柄の娘が、雄英高校でヒーローを目指す物語である。

目次

1.	酒吞童子 of 末裔と入学試験	1
2.	鬼と体力テスト	12
3.	鬼の対人戦闘訓練	28
4.	鬼は傍観する	43
USJ編		
5.	鬼は会敵する	53
6.	鬼は奮闘する	65
7.	鬼を垣間見る	76
8.	鬼は成長を望む	89
修行編		
9.	少年少女の強化合宿（前編）	102
10.	少年少女の強化合宿（中編）	114
11.	少年少女の強化合宿（後編）	130
雄英体育祭編		
12.	鬼と体育祭	145
13.	鬼と騎馬戦（前編）	161
14.	鬼と騎馬戦（後半）	174
15.	少年少女の一戦目	187
16.	鬼を通して、少年は何を観る	199
17.	ライバル達は想いを抱く	211
18.	少年は敗北を知り、少年は成長を知る	223
19.	少年少女の実力差	236

1. 酒呑童子の末裔と入学試験

事の始まりは一つのニュース。

中国にて発光する赤子の誕生というSFじみたニュースが世界中に流れたその日を境に世界は一変した。

世界総人口の約八割が何らかの特異体質……個性”を発現するようになった。その異質が、解明もされずに常識となった現代……個性を使った犯罪件数は急増し、それらの犯罪者は”敵”^{サイラン}と呼ばれた。そしてそれに対抗するように生まれた職業があつた。それ即ち”ヒーロー”。

プロ野球選手やアイドルに代わり、それは多くの者が目指す夢の職業となつていた。

そしてココにも、それを目指す3人の少年少女がいた。

彼らは俗に言う幼馴染で、共に遊び同じ釜の飯を食つた仲である。

そのうちの1人にツノの生えた少女がいた。

その少女は涙ぐみ、溢れる涙を両手で拭い続けている。

見れば2人の少年も涙を見せていた。

緑色をしたボサボサ髪の少年は滝のように涙を流し、もう1人のツンツンした髪の少年も、堪えつつも涙をボロボロと流している。

「うち…やっぱ、いややアーーッ！」

「グスッ……エグッ………」

「……………ッ……………」

涙の訳は”別れ”である。

少女は家庭の事情で引越し、生まれ育つた故郷から離れなければならないのだ。

無論、物心つく時から共に育つた幼馴染達とも。

「こりゃ困つたの〜」

「よっちゃん。また遊びに来たらいいじゃない。ね?」

「離れとうなあい〜っ!」

緑髪の子の母親と思われる女性がそう宥めるが、よっちゃんと呼ばれた少女は泣き止まない。

よつちゃんの母親も呆れ顔でお手上げのようだ。

そんな中、ツンツン髪の子の母親が笑みを浮かべたまましましやがんで目線を合わせる。

「ねえ夜々よよちゃん？ 勝己も出久君も…そしてよつちゃんも将来ヒーローになるのよね？」

「ツ……………うん……………」

「ヒーローは泣いていいのかしら？ オールマイトはこんな時泣く？」

「……………ううん」

少女は泣きながら首を振る。

「ならほら…ちゃんと前向いて！ 大きくなったらまた会えるわよ。みんな同じところ目指してるんだから」

両手でまた両目を擦り、真っ赤になった目で少女は前を向いた。そして幼馴染の少年2人に拳を差し出す。その拳は固く握られていたが、小指だけがピンツと伸びきっていた。

「いづく…グスツ…かつちゃん…：約束」

「う、うん……………グズツ…」

「……………ん」

少女の小指に、少年2人は指を絡ませた。

長いようで短く感じるこの時に3人は約束した。

必ずヒーローになると

1

1

1

時間が経つこと約十年。

少女だった夜々は成長し、ちゃんとした個性を身につける。

個性にはいくつかの部類に分けられるが、夜々は自分の意思で発動させる”発動型”と生まれた時から個性が発動している”異形型”が合わさった”複合型”だった。

高校受験を考える歳になる。

そんなある日の夜…夜々は家族と夕食をとっていた。リビングのテーブルを囲むように夜々と父、そして夜々よりも小柄な少女がもう1人いた。

夜々は家族揃っての夕食を早々と終わらせると、食器類を即座に片付けて自室へ向かう。それから一分も掛からずにリビングに戻ると、少女はテーブルに一冊のパンフレットを叩きつける。

「うち、ここに受験する!!?」

まだ食事中的の父親は箸を止めて呆気にとられ、かけていたメガネがずり落ちる。

それに対して小柄な少女は視線も向けず、箸の動きも止めない。

「……………雄英高校…本気なんだね?」

国立雄英高等学校。

名だたるヒーロー達を輩出し、偉大なヒーローには雄英卒業が絶対条件と言われるほどヒーローになるための登竜門として認知されている。それほどにヒーロー科が有名な名門校である。

倍率300はくだらない狭き門だが、父親は否定せずに意思を確認する。

夜々は「当たり前だ」と言わんばかりに頷く。

「…………クフウ…」と馳走さん。さて、俺も反対せえへんよ。可愛い愛娘の将来は、可愛い愛娘自身で決めることじゃ。こうなる事は十年前からわかつつたしのう?」

続けて食事を終えた少女はそう言って、面白そうに夜々を見る。

そしてこの少女…身長は130cm程だが、話の流れからすると夜々の母親らしい。外見を見れば誰もが妹と勘違いするだろうが…………

「夜々……………気張れよ?」

そう静かに鼓舞する姿には威厳のあり、この様子を見たならば先程の勘違いを前言撤回するだろう。

鼓舞された夜々は自室に戻り、受験の対策を練るのだった。

1

1

――

そのやり取りがあつたのは半年以上前のこと。
多くの学生がその登竜門を潜り、夜々自身も今、その門を潜つて一歩踏み出した。

文字通り彼女は受難を乗り越えるべく踏み出したのだ。
それから試験の説明会場へと足を運んだ夜々は席に着く。
そしてしばらくすると……………

『今日は俺のライブによるこそー!!』

エヴィバデイハイ!!』

「……………」

ボイスヒーローのプレゼントマイクがそう叫ぶ。が、何千人ものリ
スナーがいるにも関わらず返ってくるのは静寂のみ。

(あの人が説明してくれるんか? 随分と騒がしい人だな)

実にノリの悪い観客だと普通は思うだろう。だがこれは普通の反
応である。

決してプレゼントマイクに人気が無いわけではない。

『こいつは中々シヴィー!!?!!? んじゃ、実技試験の概要をサクツ
とプレゼンするぜ!!? アーユーレデイ!!?』
「……………」

プレゼントマイクは静寂の中でもテンションを変えずにリスナー
…もとい、受験生達に向けて説明を始める。

雄英高校のヒーロー科入学希望の者達は、筆記試験とは別に実技試
験なるものがある。

その試験内容は制限時間内に市街地を模した試験会場で、ロボット
の仮想敵を行動不能にするというものだった。

救助、殲滅、護衛…………ヒーローとしてどのジャンルの仕事をするに
しても、最低限の戦闘力は必須である。故に多くの敵を行動不能にす
れば良いのだが、夜々は説明中に配られた資料を見て首を傾げる。

「ポイントになる仮想敵は1ポイント、2ポイント、3ポイントの3種
…………この4体目の記載はなんなん?」

千を超える受験生の中で手を挙げ質問するのは度胸がいるが、重要

な点だという事もあり声をかけようとする。

しかし夜々より早く手を挙げ質問する人物がいた。

広い説明会場の少し離れた所で叫んでいるが、それでも周囲に届く声で内容は十分に聞き取れた。夜々と同じ疑問を唱えているようだ。

雄英高校がどうのこうの、失態がどうとも言っている。

「ついでにその君！ そう縮れ毛の君だ!!? さつきからボソボソと気が散るじゃないか！ 物見遊山ならば立ち去りたまえ!!?」

更に同じ受験者への注意。

彼は随分と肝が座っているのだなと夜々は思ったが、即座に別の事に気が向いてしまう。

(「ーーツ!?? 出久やん!!?」)

同じヒーローを目指す者としてここを受けるとは思っていたが、再会がこのような形だと内心複雑な気分には駆られる。

対してプレゼントマイクは4体目の記載について説明を始めた為、夜々は切り替えて話に集中する。

「どうやらそれはスーパーマ○オでいうドツ○ン。0ポイントのお邪魔ギミックとの事。」

『最後にリスナーへ我が校の”校訓”をプレゼントしよう。かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った！ 「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と!! "Plus Ultra"!!?!!? それでは皆、良い受難を!!?』

それを最後に受験生はいくつかに割り振られ、夜々は自分が割り振られた試験会場へ向かう。

「出久はどんな個性なんやろなく……おつといかん。集中せんと……」

夜々は額に生えたツノを避けるように、前髪を両手でかき上げた。

そしてツノの根元を押し上げるように額に手を当て、これから起こる試験内容を再確認して集中しようとする。

『ハイ、スタートー!』

着いた試験会場の入り口前で独り言を零していると、それに続いてまたプレゼントマイクの声がスピーカー越しに響いた。

それを聞いて皆が呆気にとられる。無論、夜々もその1人だ。プレゼントマイクの言葉で一瞬頭が真っ白になる。

『どうしたあ!!?? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ! 走れ走れえ! 賽は投げられているぞ!!??』

「エエツ!!??」

「は!!?? マジかよ!!??」

複数に割り振られたとしても目の前にいる受験生は大勢。それが波となつて試験会場へ雪崩れ込む。

「嘘やろ!!??」

遅れて夜々も焦つて試験会場に入っていく。

しかし大きいとはいえ会場の入り口は1つ…いくつかに割り振られてもかなりの人数だ。その人数が雪崩れ込めば流石に人混みができ、夜々は完全に出遅れてしまう。

むしろ出遅れずに済んだのは、序盤で動いた者か空中を移動できる受験者のみだろう。

現に前の方を見れば、両手を爆破させてその衝撃で飛ぶ男子受験者が見えた。

「あんな事うちにはできんし、ひとまず外れんと」

会場に入つても人混みで身動きが取りづらい。故に人混みの流れを横断するように端へ…そこでようやく、夜々は会場の様子を理解する。

「市街地を横してるんやな」

横断してたどり着いた端にはアパートとそれを囲う塀がある。それによじ登り、夜々は更にアパートの上に飛び乗る。

「先頭はもうドンパチやってるなあ……」

少し呑気にそう言うが、先頭での戦いは眼を見張る物だった。激しい爆発と共に弾けるエネミー…よく見ればたったの一人であるの戦闘を繰り返している。

周囲にいる敵を一掃し、近くで戦っている受験者は獲物を横取りされてしまっている。

ならば離れて戦うべきだが、戦闘が激化するあまり引き寄せられる

のか仮想敵がそこへ集まりつつある。

ならばどうする？

「早急にコツコツと稼ぐしかないやない」

人混みからなるべく離れ、夜々は文句も言わずに小さな点を稼いで回った。

「

」

「

殴る。蹴る。投げつける。

夜々の戦い方はいたってシンプル。それでいて十分な力だった。

仮想敵は備え付けられたゴム弾や模造刀で攻撃してくるが、まるで歯が立たない。

彼女の個性は”鬼人^{きじん}”。

能力は典型的な身体能力の向上……だがそれは”異形型”の個性としての話。鬼人にはそれに加えて”発動型”の別の能力もあるが、それを使う程の場面ではなかった。

市街地を模している限り、周囲の被害は抑えるべきと判断した結果だ。

だがそれが夜々にとつてはもどかしくもあつた。

(今ので12ポイント……少ない気がする。もつと稼がんと)

本気を出せないまま落ちるなんて許せない。

焦りに焦る彼女だったが、一際大きな轟音に足を止めて振り返る。

「……なんやあれ……デカすぎや」

今までどこにその姿を隠していたのか、見ればそこには0ポイントの巨大なエネミーがいた。

距離はあるが遠くもない。倒せなくもないが、ポイントが欲しいなら無視して逃げるのが吉。だがそれで良いのだろうか？

「……ツッ=？」

0ポイントは歩きたびに地鳴りを起こし、足元には亀裂が走る。それによって住居は倒壊する。それによって退路を阻まれた受験者も中にはいた。

それを見た瞬間、彼女は自分の親指を啜える。

「しゃあなしやな！」ガリッ

彼女の憧れるヒーロー像に、サイラン敵に背を向ける姿はない。今まさに襲われそうになっている者がいるなら尚更のこと……

「何やってんだアンタ！ こっち来るアレが見えないのか!?」

危険を危惧して声をかけてくれる受験者もいたが、彼女にしてみれば見えていないのはそっちの受験者の方だった。

彼女は右手の親指の腹……その皮膚を歯で噛み破る。

その傷口に口を当てながら顔を上に傾ける。右手を日本酒などの酒瓶に見立てて、一気飲みするようにも見えるその姿……だが口内に流れるのは酒ではなく自分の血液……それもかなりの量だった。

「プハア……」

やがて親指から口を離すとツノは白く発光し、彼女の顔は煌々と火照り酔っているようだった。そして今度は人差し指をポイント仮想敵に向ける。

「……………十升モード」

酔ったその口調は非常に柔らかい口調だった。しかしその指先から放たれたものは、そんな優しいものではなかった。

「……ゴオオオオオオ!!? ……」

「何ッ!??ウオオオオオ!!?」

ジェット機のエンジンの横で耳を澄ませたような轟音と共に、赤い極太のレーザーが指先から放たれる。

心配していた受験者は風圧で飛ばされないように踏ん張る。

矛先が向いていなくとも余波でそうなる始末。そのレーザーの矛先が向けられた巨大な仮想敵はというと、レーザーを受け止めた上半分が大きく抉れて風穴が空いていた。

「ヨイシヨ」クイッ

向けた指先を曲げると、レーザーの軌道が大きく曲がりUターン……そしてそれは夜々の元へ帰って来た。

「ンッ！」ボツ!!?

右手で受け止めるとレーザーは段々と霧散していった。

「……………」

「ふう、久方ぶりやなあ」

0ポイント
仮想敵を撃ち抜いたレーザーをそのまま何処かに落とすわけにはいかない。だから自身の所へ戻して物理的に後始末をした。周りの被害を抑える為だけにやった行為だが、それを間近で見た受験者は呆気にとられている。

「……怪我させてもうた？ スマンなあ……」

「え、いや……………別に」

「チイッ!!？ 遅れたッ!!？」

そこへ新たな受験者がやってくる。両手を爆破させて飛んできたのは、目立って暴れていたあの受験者だった。

夜々の背後から来たところ、アピール目的か何かであるの巨大な0ポイントを狙っていたのだろう。

「……………アンタ…もしかして……………」

「……………あ？」

『終了オオオオ!!？!!？』

夜々はその爆破個性の受験者の姿が、幼き頃に別れた幼馴染の面影と重なった。

だがそれを確認するよりも早く、試験終了の合図が響き渡った。

↓

↓

↓

この実技試験は仮想敵を撃破する事でポイントが加算されていくシステムだと、そう受験者には説明されている。

しかしその試験にはもう一つ、ポイントを獲得する方法があった。

それは”救助活動ポイント”。

皆がポイントを稼ごうとする中、誰かを助ける行動を起こした場合は審査制でポイントが加算されるのだ。

そしてその審査も終えた後で、審査員である雄英の教員達は試験の様子をモニターで見ていた。

そのモニターの映像に映るのは受験者達ではなく、その中で受かつ

た一握りの合格者達。

彼らはその少年少女達を改めて審査していった。最終確認というやつだろう。

「YEAH!!? さっきの受験者リスナーといい、今年は大漁だな!」

「うん。まさか0ポイントが二体も壊されるなんてね」

司会役だったプレゼントマイクが口を開けば、小動物:それも鼠の姿をした者がそう返した。ちなみにこの鼠はこの高校の校長である。

「撃破ポイント12、救助活動ポイント60の総合3位!!? イレイザー! お前は思うよ!!?」

プレゼントマイクは自分の同期であるヒーロー、イレイザーヘッドに話を振る。

振られた本人は迷惑そうな表情を浮かべるが視線を戻し、モニターに映った少女の評価をする。

「撃破ポイントが少ないのは:まあ、撃破ポイントのみで総合一位になった爆豪ばくごう 勝己かつぎの影響と考えれば及第点以上。それでも少ない事実は変わらないが、救助活動ポイントもあつて問題なく合格だろ」

「YEAH!!? ベタ褒めじゃねえか!!?」

「五月蠅いぞマイク」

「でも珍しいわね。貴方が受験者を褒めるなんて」

18禁ヒーローのミッドナイトが今度は話を振る。

「今回の総合1位や8位と比べれば、凹凸のない受験者だと思っただけだ。マイクの不意打ちスタートには出遅れたが、そこからの動きはまだ荒いが中坊だった奴の判断にしては合理的。獲物が少ないと判断し即行動:最後の0ポイントを見た時も自身のポイントが少ないにも関わらず、足元の受験者を見てすぐに攻撃に入ったってのも大きい」

「やつぱりベタ褒めじゃねえか!!?」

「8位の子、緑谷みどりや 出久いずくも撃破ポイントは稼いでいない。それでも助けるために仮想敵を破壊したわ。でも確かに、彼女と比べると動き出しが遅かったわね」

「何はともあれ、彼女も合格で問題ないね。それじゃ次の合格者の映

像を……」

鼠の姿をした校長：根津校長は最終決定の意を込めて、1人の少女の受験票に”合格”の判を押す。

その受験票には”酒井^{さかい}夜々^{よよ}”という名前と、ツノの生えた少女の証明写真があつた。

2. 鬼と体力テスト

雄英高校入学当日

夜々は肩掛けバッグの中身を確認してから玄関で靴を履く。

「……………スウー……………行つてきます！」

意気込んでそう家の中に返すが、返事は返つてこない。

雄英高校が遠い事もあつて一人暮らしを始めたのだから、別におかしな事ではない。

玄関の鍵を閉めて走り出せば履き慣れたスニーカーが足音を鳴らし、カバンに付いてる昔貰ったストラップは物理運動に振り回される。

ちなみにストラップは”二頭身オールマイトフィギュア”。幼馴染の緑谷 出久に貰ったもので、十年も経つたため大分色褪せている。

「あの様子なら、かつちゃんは合格したんやろな。出久はどうやろ……………泣き虫やつたし心配やわ〜」

そんな独り言を零しながらバスターミナルから出るバスに乗り込む。

そのまま揺られる事20分…彼女は雄英高校前のバス停で降り、いずれは母校となる高校へ足を踏み入れた。

そして試験合格を伝える封筒に同封された資料を頼りに、自分のクラスへと辿り着いた。

「もうかつちゃん居るかな。試験会場ではすぐ帰つてもうたし……………絶対うちやと気付いてへんわ」

異形型で大きな身体の学生への配慮か、やけに大きな扉を潜つて入室する。すると……………

「机に足を掛けるな!!? 歴代の先輩方や机の製作者に申し訳ないと思わないのか!!?」

「思う訳ねえだろうが! どこ中だこの脇役が!?!」

あからさまに態度の悪い男子生徒と、それを注意する眼鏡の男子生徒が目に入る。前者は机に足を掛けて吠え、後者は真面目なのか怯ま

ずに注意する。

「……………ないわー」

そして前者の態度の悪い生徒は、例の幼馴染。爆豪ばくごう 勝己かつぎだった。夜々の「ないわー」という声が入ったのか、爆豪は机から足を下ろし彼女の前までやってくる。

「テメエ、0ポイントの奴か。アレをぶっ飛ばしたくらいで調子のんじゃないぞ？ 俺はオールライトも越えるヒーローになる。テメエ如きには負けねえからな？」

入学式当日で彼なりにテンションが上がってるのか、野心的な笑みを浮かべて夜々を睨みつける。宣戦布告だろうか。

それに対して夜々は冷やかな視線を返す。

それとほぼ同時に、教室のドアが開いて生徒がまた入ってくる。

その生徒にも夜々は見覚えがあった。緑色のボサボサ髪にソバカス…もう一人の幼馴染である緑谷みどりや 出久いずくだった。

それを見た夜々はターゲットを変えて緑谷の方へ飛びつく。

「出久ー！ 聞いてくれや〜！」

「へッ!? わ、え、あ、なななな何ッ!?？」

女慣れしてないのか、夜々に抱きつかれた緑谷は動転する。

顔は真っ赤に染まり視点が定まらない。

「知り合いかよデク。いや、んなことよりデクてめエ！ クソナードがどうやって入学しやがッゲエ!!？」スパアン…

「…うちの事なんて、そんな事かい…………」

「……………」パクパク

緑谷は爆豪に恐怖に近い苦手意識を持っているのか、爆豪の頭の上から平手打ちを落とした夜々を見て魚のように口を開閉する。

「君は一体……………ん？ ちよつと待ってソレ…間違いない！」二頭身オールライトフィギュア”のキーホルダーだ8年前に製造停止になって今じゃ凄いいレア物だよ僕以外で持つてる人初めて見たこの二頭身特有のフォルムでありながらオールライトの細かい特徴をよく捉えてる素晴らしい作品なんだ僕も持っててね、今は一つ…昔は二つ持ってただけど友達に上げちゃったんだ！ うわ〜懐かしいなあ

「……!!?」ブツブツ

彼はオタク気質なのか、先程の動揺が嘘のようにブツブツと語り始めた。だが夜々は引かずに緑谷の顔を両手で掴み、無理矢理自分の方向へと顔を向けさせる。

「昔二つ持ってたんや。それ一体、誰にあげたん?」

再び赤面し目が泳ぐ緑谷だが……

「え、ええ……それは……その、だから友達に……」

「その友達って?」

「え……ええー……? もしかしてよつちゃん?」

「ああ? ……ああ……あああ!!?」

ここまでできてようやく彼女が誰か気付いたようで、赤面から驚愕の表情に変わる。

そして爆豪も緑谷の言葉で分かったのか、夜々を二度見三度見。更には足先から頭のとっぺんまで視線を何度も往復させる。

「やっと気付いてくれはった! かつちゃんは気付かないどころか、興味なさげにそんな事やって……酷いと思わへん?」

「んな! ……わかるかボケエ!!?」

爆豪は怒気を弱めずにそう応対する。

無理もない。彼らの頭の中にある夜々の姿は12年前で止まっている。その姿は4頭身以下で顔もまだふつくらしていた頃だ。

成長した今の姿との共通点は、額に生えたツノのみだ。

「デメエもつとふつくらしてただろ!!? んな状態からこんな変わって気付けるわけあるか?」

「デブみたいに言わんといで。んでその言い方は、遠回しに綺麗なた言うてん?」

「んなわけあるかア!!?」ボンツ!!?

爆豪の個性はやはり”爆破”なのか、両手から手が隠れるサイズの爆発が起きる。

「そならかつちゃんは……うちをブスやと思っってはるん?」

「グツ……!!?」

夜々はあざとく口元に手をやり、目尻に涙を浮かべる。

それを見て爆豪は押し黙り、心なしか白目を向いている気がする。返す言葉に困っているのだろう。

ちなみに夜々は完全に爆豪の反応を楽しんでいる。

「……………いっぺん死ねええええ!!?」

(ええー………ツツ!!?)

誰がとは言わないが、爆豪の答えにクラスメイトの誰かが心の中でそう叫んだ。

「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここは…ヒーロー科だぞ?」

いつからそこにいたのか、寝袋に入って床に横たわる青年がゼリー飲料を口にしてそう言った。

「……………担任?」

夜々は首を傾げるが、周りのクラスメイトが自分達を除いて座っているため、慌てて自分の席へ着く。

「はい……………静かになるのに十秒かかりました。時間は有限。君達は合理性に欠くね」

寝袋の中から出てきた男は立ち上がり、緑谷以上にボサボサの髪を掻き分ける。

「俺は担任の相澤消太だ……………よろしくね。そしてこれ着てグラウンドに出ろ」

合理性を最初に解くだけの事はあり、自己紹介からの展開も早く早急に生徒たちは指示を受けることになった。

「し、質問宜しいでしょうか!」

「却下」

真っ直ぐに伸びた綺麗な拳手だが、相澤と名乗った担任は即座にそれを切り捨てる。

その時に夜々は、今しがた挙手した彼が試験説明会場で質問をした受験生と同一人物だと気がついた。

(……………あの人委員長ほいなあ)

1

1

「個性把握テスト??？」

「なんやて工藤?」

グラウンドに出ると、担任の相澤にそう告げられた。

それに対しては意を唱える生徒が多数いた。

「入学式は? ガイダンスは??？」

「ヒーローにそんな悠長な事している時間はない。雄英は自由な校風が売り文句。教師側もまた然りだ。取り敢えず見せた方が早い。確か入試1位だったのは……爆豪か、ちよつと来い」

呼び出された爆豪が前に出ると、片手で持てるサイズのボールが手渡される。

「今からやるのは体力テストと同じ内容。ただし……個性解禁のな」

「解禁しちゃうん?」

中学時代の体力テストを思い出し、夜々はふとそう口に出す。

「ああ、解禁しちゃう。爆豪、中学のソフトボール投げ、何mだった」

「:67m」

「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい。早よ」

最後に目を鋭く光らせて「思い切りな」と付け足す。

そう促された爆豪は腕を回しながら地面に書かれた円の中に入り、大きく振りかぶった。

「死ねえ!!?!!?」Booom!!!

「さつきうち言われたわあゝ」

(この人よく喋るな………)

爆破の勢いでボールを飛ばすその姿に圧倒される者が半数、爆豪のセリフに呆気にとられる者が1割、動じない者が1割、夜々の言葉に苦笑いする者が3割。

そんな状況下でも相澤はブレずに話を進める。

「まず、自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

そう言う相澤の手に握られた端末から電子音が鳴り、その画面をこちらに見せてくる。

そこには「705.2m」と表記されており、それが爆豪 勝己のハンドボールの記録なのだろう。

「何だこれ!!? すげー面白そう!!?」

「705mってマジかよ」

「個性思いつきり使えるんだ! さすがヒーロー科!!?」

「…………面白そう…か」ボソツ

生徒が騒ぐ中だが、相澤の呟きが耳に入り生徒は口を閉じる。

「ヒーローになるための三年間、そんな腹積もりで過ごす気であるのかい?」

その言葉には凄みがあり、生徒達は冷や汗をかいた。

そして相澤は少しためてから口を開いた。

「よし…………ならトータル成績最下位は見込みなしと判断。除籍処分しよう」

「はあああー…ツ!!?」

まさかの除籍処分。

自由が売り文句で教員も自由とはいえ、入学式当日に除籍を言い渡されると誰が思おう。

倍率300の狭き門を潜ったばかりでこんな危機に直面すれば、声を大にして叫ぶ者ももちろんいた。

「除籍しちゃうん?」

「除籍しちゃう。生徒の如何は先生の自由だ。これが雄英のヒーロー科だ」

そう言い切った相澤。

生徒達はその断言に焦りを感じ始めた。が、夜々はそれが不思議そうに口を開いた。

「どないした工藤?」

「どうした…ってお前、除籍だぞ! 最下位は除籍!!? 慌てんのは当たり前…」

「慌ててどうなるん?」

また不思議そうに首を傾げてそう告げる夜々に、周囲の視線が彼女に集まる。

「相澤はんも雄英の教師ならプロヒーローやろ？」

「酒井、相澤先生と呼べ」

「最下位は見込みなしと判断ゆうとったけど、プロヒーローなら最下位で見込みありなら前言撤回くらいするやろ…それこそ自由が売り文句なんやし……………」

相澤先生の言葉は流し、夜々は話し続ける。

「せやから工藤、全員がヒーローに相応しい結果取ればええやない。

”ぶるすうるとら”や」

「お、おお！ それもそうだな！ 漢らしくていいぜ!!?その考え方

!!?……………あと俺、工藤じゃなくて切島な？」

きりしま 切島 鋭児郎

「工藤…うちに漢らしいゆうのは酷うない？」

「スマン!!? あと切島な？」

そんなこんなで、体力テストが始まった。

1

1

1

【第一種目：50m走】

二人一組ずつ出席番号順に走るわけだが、夜々は軽くストレッチをして、前のペアが位置についたところで親指を啜える。

そして実技試験の時のように、グイッと顔を上げて指先から血を飲む。

「…何やってんだ？」

「こういう個性なんよ……………ん…十升モード」

出席番号の関係でペアになった男子生徒…佐藤 力道の疑問を一蹴し、夜々は準備を終える。すると丁度よく、2人の番になる。

「あれがよっちゃん個性…」

「酒井さん…ツノが光って……………」

後ろから見ていた緑谷がそう言うと、出席番号が最後の女子生徒…

やおよろず 八百万 百が無意識に眩く。

そして間も無くスタートの合図が切られ、夜々は姿勢をこれでもかと言うほどに低くして走る。

「……3秒37」

「ああー、委員長はんに勝てへんかった」

(……委員長?)

【第二種目：握力測定】

「ンツ！」

「酒井、502kg」

細い腕から叩き出された記録に場はどよめく。

「マジかよ！ 障子に続きゴリラかよ……ってイダダダダツ!!?」

「……あ、ゴメン瀬呂君。手が滑って……」

(緑谷：目が笑ってないぜ?)

【第三種目：立ち幅跳び】

「：見たか？ 酒井が着地した瞬間：あの双丘がプルんギャアア!!

？」ボゴオン!!?」

「峰田アアアアアア!!?」

爆破の推進力を使ってスタートダツシユをする爆豪だが、50m走待ちで彼の後ろに並んでいた峰田^{みねた}実^{みのる}が爆風に巻き込まれて宙を舞う。

「：俺の後ろに立ってんじやねえ。殺すぞ」

(爆豪さん。意図的に掌を峰田さんに向けていた気が……)

【第四種目：反復横跳び】

「ンツ、ンツ、ンツ」

「……………」

「なんだよおーおーおーおー!!? オイラまだ何も言ってないだろおーおーおー!!?」

「酒井、記録は……どうした?」

「……個性切れやな。また血い飲めば問題ありまへん」

待機時間もキープしていたからか、彼女の十升じゅっしょうモードとやらが切れる。そして夜々はまた親指の腹を齧る。

「プハア……………」

「……………」

「だからオイラ何も言つてねえだろおおおーーツ!!?」

【第五種目：上体起こし】

(緑谷のやつ…試験の動画では0ポイントを殴り飛ばしたが、自身の腕も耐え切れず破壊させていた。今回のテストではまだ一度も個性らしいものを使っていない…やはり制御できてないのか……………)

相澤は記録用紙に目を落とす。

(……………にしては頑張ってるな)

「ンツ、ンツ」

「……………」

「フンフンフンフン!!?」

「オワツ!!?緑谷! 急にどうし、ちよ、待つ」

夜々に見惚れていた男子生徒…上鳴かみなり 電気は、自身でんきが足を抑えていた緑谷のペースが急に上がつてよそ見をする余裕がなくなっていた。

(……………頑張つてはいるが、この程度の記録ばかりじゃ、どの道除籍か)

【第六種目：長座体前屈】

「…ンンツ……………」

「……………」

「だからなんで緑谷と爆豪はオイラを睨むんだよおおおーーツ!!?」

【第七種目：ボール投げ】

「ンツ! ……からの……………ほな!」ゴオオ……………

投げたボールを後押しするように、レーザーが続いていく。

「酒井、768.9m」

「…………チツ」

記録が負けている事を気にしてるのか、爆豪が舌打ちをする。と
いっても全体的に見れば、勝ったり負けたりで気にするほどではない
と思う。

「次、出久やん。ウチは終わったけど、出久はまだ残してる競技もある
しな……………気張りや」

「う、うん」

ここまでで飛び出た記録の無い緑谷は焦っていた。
円に入ってボールを手に取ると、緑谷は深く深呼吸をする。

（ここまで目立った記録が出せてない。まだ完全にコントロールは出
来てない。握力測定の際に尊い犠牲瀬呂くんのアイア協カンクローのおかげで少
しだけワン・フォー・オールが使えた気がする。またあの感覚で投げ
るか？ でもその程度の記録で除籍を逃れられるのか？）

「…………よし」

彼の個性の名は「ワン・フォー・オール」。言ったところで誰も信じ
ないと思うが、何を隠そうNo.1ヒーローのオールマイトの個性な
のだ。

緑谷は本来無個性の少年だった。しかしヒーローの見込みありと、
オールマイトの後継者に選ばれ、個性を受け取った。

しかしそれはまだ借り物の力…使いこなせず100%の力で打っ
て強力な一撃の代わりに、パンチを打った腕を破壊する事しか出来な
かった。

そんな個性だが、意を決して緑谷は大きく振りかぶり…そして投げ
た。100%の力で……………しかし。

「……………緑谷、48m」

しかし記録は48メートル。

「なっ！ ……今確かに使おうって…」

「個性を消した。つくづくあの入試は…合理性に欠くよ。お前のよう
な奴も入学できてしまう」

個性が不発に終わったようだった。その原因は担任である相澤に

あるようだ。

「消した…ツ!!?あのゴーグル…:…:そうか! 見るだけで人の個性を抹消する個性! 抹消ヒーロー、イレイザーヘッド!!」

緑谷はヒーローオタクである。イレイザーヘッドとはマイナーなヒーローの名前だったが、オタク故に正体を見破った。

そしてイレイザーヘッドこと相澤は、緑谷に近寄り指導と思われる会話をする。

「何か指導を受けていた様だな…:…」

「ハッ! 除籍宣告だろ!」

「うう…:…:心配だよ」

「心配してる? …:…:僕は全然!」

「うちは心配やわ…:何もできへんけど」

測定を終えていた生徒達が緑谷を見てそんな事を言う中、ずっと余裕の表情だった夜々が冷や汗をかく。

十升モードはまだ切れておらず、全てではなかったが強化された聴覚が嫌なワードを拾ったからだ。

お前の力ではヒーローになれない

「えっと、夜々ちゃんだよね。夜々ちゃんも心配?」

話しかけて来たのは、麗日^{うるらか} お茶子^{おちゃこ}と言う名の女子生徒。触れた物を無重力状態にする個性で、ボール投げでは”∞”^{無限}という規格外な結果を残した少女だ。

「…:…:お茶子はん、そりゃ心配よ。うち幼馴染なんやけど、昔から泣き虫で気が弱くてな? それでも前向きで努力家できつといざという時は機転を利かせるんやと思う…:…:ありや?」

ここでまた夜々は、体力テスト前のように不思議そうに首を傾げた。

「…:…:なら安心とちやう?」

「いっけええええー!…:…:ツ!!?…:ツ!!?」

緑谷は個性を使ってボールを投げた。

記録は710mを超え、握り拳を作って相澤に宣言する。

「ま…:…:まだ、動けます!!?」

「コイツ……………」

緑谷は個性がコントロール出来たわけではない。ただ、腕で使つて腕が壊れるなら、指先に……………それも人差し指一本に絞つて個性をフルで使つたのだ。

結果、人差し指を骨折して酷い色に変色しているが、彼はちゃんと結果を出した。

それを見て相澤は薄く笑みを浮かべた。

【最終種目：持久走】

「ふうーハラハラしたわあ」

「御機嫌よう酒井さん」

「…えつと……………お嬢？」

「やおよろず八百万 もも百ですわ」

なんとなく雰囲気ですう呼んだら、八百万は自分の名前を述べてくれる。

「酒井 夜々。よろしゅう…それ個性なん？」

何故そんな質問をするのかと言うと、夜々の隣を走る八百万はバイクに乗っているからである。

「体内の脂質を変化させて物体を生成する個性ですわ。設計をよく把握する必要がありますが……………」

「……………便利そうな個性やなあ〜」

「このペースで息を切らさない酒井さんも、十分凄いと思いますわ」

「あんがとお〜」

「……………話は変わりますが、先程の緑谷さんの個性は諸刃の剣なのでしょうか？」

だいぶ後ろの方を走る緑谷に目を向けてから、視線を八百屋に戻す。

「……………？ わかりまへん」

「俺の前を走ってんじやねえー！ツ！！？」

「あ、かっちゃん来よつた」

ー

――
――

これで体力テストは終わり、結果発表が始まる。

「その前に、最初に言った除籍は嘘ね」

「……は、はああああー……ッ!!?」

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽!!?……というか、よく最後まで信じた奴がいたな。酒井の言ったこと聞いて、大体のやつは気付いたと思っただが……」

「あんなの嘘に決まってるじゃない。……すぐに分かりましたわ」

「……自由だからやめたんやないの?」

相澤に続き、八百万が呆れたように言った。

しかし夜々の言葉で、クラスメイトの半数はゴクリと生唾を飲んだ。その可能性も捨てきれず、この先もいきなり“除籍”というワードとぶつからないとも限らないからだ。

それから結果発表は始まり、夜々は二位という順位に位置付いた。一位は八百万。最下位は緑谷だった。

それを見た緑谷本人は、夜々の言葉もあつてかきたくもない汗が噴き出す。

――
――

結果発表を終えた後、帰りのホームルームをするべく教室に戻って軽い話をして解散の流れになった。

指を負傷した緑谷は帰りの支度もせず保健室へ行き、夜々は自分の荷物だけ纏めて保健室に足を運んだ。

「出久ー、おるかの?」

引き戸を開けると、そこには緑谷とリカバリーガールというヒーローネームを持った老女がいた。

彼女は治癒の個性を持っていて、保険の教師としてここにいるのだろう。そして緑谷の指はすでに処置を終えたのか治りきっていた。

「あ、よっちゃん」

「なんだい。怪我人じゃないのかい……………これかい！」バツ

夜々を一目見て怪我人じゃないと判断すると、リカバリーガールは緑谷の方に小指を立てた右手を向ける。

そのジェスチャーが意味するのは“恋人”である。

「な、ちよ、ちちち違いますよツ!!？」

「まあいい。ハリボーお食べ！」

会釈して夜々は、リカバリーガールから貰ったハリボーを食べる。

「それで、何か用？」

「怪我の様子が気になっただけや。大丈夫そうやな」

「う、うん」

「鬼女、居るか？」ガラッ

そこへまた生徒がやって来る。それは爆豪だった。

終始穏やかな表情ではなかった爆豪だが、今は多少額にシワが寄っているが比較的無表情に近かった。

「なんやかっちゃん。出久が心配なつて来たん？」

「んなわけねえだろ殺すぞ。忘れもんだ」

「お、あんがとお。こうして三人集まるんのも久方ぶりやなあ」

「うん。よっちゃんも朝見た時は見違えたよ！」

「そやろか？ どうや？ 綺麗なつた？」

「え、や、えつとお……………」

「かっちゃんどう思う？」

「殺す」

「……………二人とも変わつてもうたなあ」

（よっちゃんが一番変わったよ）

「にしても二人共雄英、よく受かったなあ」

「ハッ！ 余裕だろこんなの!!？」

夜々の言葉に野心的笑みでそう返す爆豪は、両手で小爆発を起こす。

それを見て夜々は「そういうえば」と一言挟んで、昔の話を持ち出す。「うちら三人、ヒーローになろう約束しよつたよな。そうすればまた会えるからくて。もしかしてうちに会うために頑張ってくれたん？」

「んなわけねえだろ!!? 忘れたわ! そんな思い出!!?」

あざとく問う夜々に爆豪が鼻で笑いながら返答する。

するとつまんなように:それでいて悪戯っぽくまた聞いた。

「ならあの約束も忘れてしもうたん?」

「あの……」

「……………約束う?」

そこで少し間を開けて夜々は首を振る。

「いや、なんでもないわ。気にせんというて」

「……………」

そう言い残して、夜々は一人で先に帰り始めた。

保健室に残された二人は、なんともいえない空気を味わう。

(……………忘れるわけないじゃないか)

(……………忘れるわけねえだろ)

顔が赤いのは動転したせいか、それとも爆破の熱のせいか……

その真偽はしばらく先まで分からないだろう。

「……………青春だねえ」

そしてリカバリーガールはこの後、無性にコーヒーか青汁が飲みた

くなつたらしい。

――

――

――

「うちおいきくなつたらヒーローになるんや!」

「ぼくも! オールマイトみたいなヒーローになる! それでよつ

ちちゃんを守つてあげるね!」

「いづくじゃ無理だな! オレが守つてやるよ! ずっとな!」

2人の少年は「ぼくが!」「オレが!」と言い争う。

それを見ていた少女は悪戯っぽい笑みを浮かべ、口を開いた。

「じゃあNo.1ヒーローになった方のお嫁さんにしてや。すえなが

くよろしゅうおねがいます」

どこでそんな言葉を覚えたのか、少女はそんな事を言つて少年2人の初々しい反応を楽しむつもりだった。しかし……

「……………わかった！ やくそくだ!!?」

しかし少年は真っ直ぐに…少し照れながらもそう言い切ったのだ。純粋な好意を2人から直接受けた少女は顔を真っ赤にしてうずくまる。

「そ…それはズルいんよお」

「どうしたのよっちゃん!!?」

「だれだ！ だれが泣かした!!?」

当時はまだ幼い少女だった彼女は、高校生になった今でもたまたま思い出し、今も帰り道で1人頬を染めている。

そしてそれを誤魔化すように彼女はケラケラと笑うのだった。

3. 鬼の対人戦闘訓練

入学式と言う名の個性把握テストがあった翌日。意外な事に、そこでは普通の授業が行われていた。

英語の担当の先生がプレゼントマイクで、終始テンションが高かったのはあるが、授業内容は驚くほどに普通だった。

そしてその授業も普通のまま終わりを迎えた。

「ふう…やつと終えはった」

「お疲れ様だ。酒井君！」

隣の席に座る真面目な生徒…飯田いいだ 天哉てんやが立ち上がって話かけてくる。

彼の個性は”エンジン”で、車やバイクと同じマフラーが脹脛にある。夜々は話を聞きつつも、ついそつちに目がいつてしまう。

「時に酒井君！ この後緑谷君と麗日君と食べる予定なんだが、良かったら一緒にどうだい？」

「うちも夜々ちゃんと話したい！」

飯田の後ろの席に座っている麗日は、そう言って話に入ってくる。どうやらこの二人に緑谷を加えた三人がいつものメンバーらしい。

高校生活二日目でありながらイツメンができるのは、少し早い気もするが。

「あら〜嬉しいお誘いやわ〜」

嬉しそうに両手を合わせる夜々を連れ、最後に緑谷を迎え入れて食堂へ向かった。

雄英高校の食堂を経営するのは、クックヒーロー ランチラッシュ。ここを入学した者は皆 彼の料理を食べたいのだろう。既に食堂は混みつつあった。

彼女ら四人が昼食を手にして席に付けたのは、この混み具合を考慮して広く作られた食事スペースのおかげだろう。

「夜々ちゃん、デク君と幼馴染なんやる？」

「そや〜。引越して離れ離れなあてしもうたけど、しばらくの間は手紙でやり取りしてたわ。一緒にヒーロー目指すんや〜って手紙の

やり取りで互いに励ましあったりな。急にパタリと途絶えてもうたけどな?」

「うっ…」

始まった雑談の中で痛いところを突かれたのか、緑谷は苦い顔をする。

「あ、あの時は自分が無個性だと思ってたからで…それが凄くシヨツクだったから……………」

「そういう時こそ相談して欲しかったわあ〜」

「そうだぞ緑谷君! 友達なのだから今後は是非、俺たちも頼つてくれ!!?」

「う、うん。ありがとう」

「でも今は個性あるんやな。使いこなせてへんけど……………誰かさんに貰いでもしたん?」

「ブツ!!? ご、ゴボツ…そ、そそそんなわけないじゃないか!!?」

「冗談や冗談。落ち着きい、水飲みい」

あまりに咳き込む力が強かったからか、少し罪悪感を感じながら水を差し出す。

「…で、なんで使いこなせてへんの?」

「と、突然変異みたいな……………そうゆう…アレです…」

「ふーん。でも良くそんなんで雄英受かったなあ」

「それはオー…師匠が鍛えてくれたのもあるんだけど、半分はかつちゃんののおかげかな」

「爆豪君が?」

緑谷が口にした事の中に意外な言葉があり、麗日は疑問文で返す。

「まあ……………色々あってね」

「あのかつちゃんか? うちが見る限り、今のかつちゃんはそんな人には見えへんけどなあ」

意外そうに目を丸めながらも、食事の手を止めない夜々。あとの二人も黙り、緑谷の話に耳を傾ける。

「今も当たりが強いやん。アレが二人の間では平常運転なん? うちには出久を心底妬んでるように見えるんやけど? うちが居ない間、

二人はずつとあんな感じだったん?」

「……………違うよ…少なくとも、中学2年のころは…」

「ふーん。まあ大丈夫やろ」

端切れが途端に悪くなった緑谷の話を、夜々はそう両断して食事を続けた。

「夜々ちゃん、サバサバしとるなー」

「それより早よ食べえ。午後の授業間に合わへんで?」

「午後の授業…それもそうだな!」

その会話を最後にした四人は箸を進める。

ー

ー

ー

午前はいったって普通の授業だったが午後は一味違う。

その授業とはずばり”ヒーロー基礎学”!

更にその担当はNo. 1ヒーロー、オールマイト!!?」

教室内には生徒しかいないが、楽しみに思うのは皆同じようだ。現に先生が居ないにも関わらず、自主的に席について前を向いている。

そしてついにその先生が教室に来る。

「わーたーしーがーッ!!? 普通にドアから来た!!?!!?」

ヒーロー活動時に現場に現れた彼は人々を安心させるために、毎回「私が来た!!?」と胸を張り宣言している。いわばお約束だ。

今のはそのパロディギャグのようなものだろう。

No. 1ヒーローの登場で、教室の中は一気に盛り上がりを見せてる。

「スゲエ!!? 本当にオールマイトだ!!?」

「銀時代のコスチュームだ……………」

「画風が違いすぎて鳥肌が……………」

「画風ならうちの爺さんも負けてへんよ」

皆が思い思いに興奮してる最中だが、いつまでも騒がしているわけにはいかずオールマイトは話し始める。

「ヒーロー基礎学!!? ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行

う科目だ。あ、単位多いから気をつけて。早速だが今日はコレ……………
戦闘訓練!!?!!?」

そういつて何処から出したのか、オールマイトは一枚のパネルを出して見せる。そのパネルには「BATTLE」と書かれている。

「そしてそいつに伴って……………こちらッ!!?」ポチッ

これまたいつ手にしたのか、オールマイトは何かのボタンを押す。すると何の変哲も無い壁に隙間が生まれ、隠れていた収納スペースが姿を現わす。

「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿って作られた…戦闘服ッ!!?」

「うおおおおおーッ!!?!!?」

またも教室は歓声に包まれた。ヒーローを目指す者として皆が目を輝かせる。

それは自分の為に作られた、自分だけの戦闘服^{コスチューム}。それが今、ようやく自分の手元に来るのだから無理もない。

「着替えたら順次、グラウンド^{ベータ}βに集合だ!!?」

「はい!!?!!?」

オールマイトの言葉に全員が頷き返し、各々がコスチュームを持って更衣室へ向かった。

無論、夜々も自分のコスチュームを手に更衣室へと向かい、早急に着替え始める。

「ケロ、夜々ちゃんのコスチューム素敵ね」

「ありがとうお蛙吹はん」

「梅雨ちゃんと呼んで」

「梅雨はん」

着替えている時に話しかけて来たのは、蛙の個性を持った蛙吹^{あすい}梅雨^{つゆ}。彼女のコスチュームは個性に合わせ、蛙を彷彿とさせる緑色に黒のラインがはいったデザインをしていた。

それに対して夜々は……………

(……………発育の暴力)

一言で言えば“クノイチ”。

そのコスチュームは時代劇などで目にするクノイチの姿に似ていた。

動きやすさを重視し、自分の攻撃の余波で破けないよう通気性を良くした物だ。その要望に応えようとすれば、露出度が増えてしまうのも疑問ではない。

「ほな行こか」

着替え終えた夜々は蛙吹と共にグラウンドβへ向かう。

そして到着すると、案の定 男子生徒の視線が夜々に集まる。それだけで済まして目をそらす者もいるが、釘付けの者も何名かいた。

「……………」

「……出久、かっちゃん。前歩かれると歩きづらいわあ」

（一緒に歩くななんて、やっぱり仲良いんちやう?）

「ごめんよっちゃん、気にしないで?」

（クツ……オイラの居るところからじゃ、爆豪が邪魔で見えねえ）

（セコムだ……）

「よし！ 全員集まったね?!? さあ有精卵共、戦闘訓練の時間だ!!? そしてその内容は “屋内の対人戦闘” さ！」

オールマイトが言うに、凶悪敵との出現率は屋内が高いとのこと。

それらを想定して “ヒーロー組” と “ヴィラン組” に分かれた2対2の屋内戦が、今回の授業の演習内容だった。

そしてこの屋内戦を行うにあたっての設定は、「核兵器を所有したヴィランとの屋内での接触」といったところだ。

ヒーローと敵の2組に別れたのだから、もちろん勝敗が存在する。ルールは以下の通り……

制限時間内に核兵器を確保、もしくは敵を全員を確保する事ができればヒーロー組の勝利。

制限時間内まで核兵器を防衛する、もしくはヒーローを全員を確保することができればヴィラン組の勝利だ。

場所は高校の敷地内にある訓練用のビルで行い、チーム決めとどちらの組に属するかは公平にくじ引きで決める事になった。

”D” やな」

「……………ああ?」

「…! なんやー、かつちゃんと同じやないか。一緒に敵ライラン頑張ろな
!」

「おい待て! なんで敵ライランって決め付けた!?」

「だってかつちゃん、敵ライラン顔やん?」

「殺すツ!!?」Booom!!!

夜々に煽られ、沸点を軽く越した爆豪は両手を爆破させる。しかし
恐れず、むしろ楽しそうに夜々は逃げ回る。

しかしそれも長くは続かず、オールマイトが最初の組み合わせをク
ジで決める。

「よし!!? 最初はAチームがヒーロー! Dチームが敵だ!!?それ
以外の皆はモニター室へ! Aチームはビルの前、Dチームはビル内
の定位置へ向かってくれ!!?」

「クックック! マジで敵ライランなーてもうたやん!!?」

「五月蠅え!!? さっさと行くぞ!!?」

「その前にAチーム誰なん?」

モニター室へ皆が向かう為、残された者が必然的にAチームかD
チームと言う事になる。

そして夜々と爆豪を除いてその場に残ったのは、緑谷と麗日だっ
た。

「デク……………!!?」

「……………かつちゃん」

親の仇を見るような目つきで緑色を睨む爆豪と、引き気味だがそれ
を見つめ返す緑谷……………

爆豪はそのまま目を向けたまま、ビルの中へと消えた。

ー

ー

ー

そして戦闘訓練は始まった。

始まるや否や爆豪は飛び出し、守るべき核兵器（ハリボテ）のある
場所には夜々が一人取り残されていた。

「……………」

そこで一人、夜々は訓練スタート前の会話を思い出していた。

『…おい、デクは個性があるんだな?』

『……………? 昨日のテスト見てはったならわかるやろ』

『……………クソナードが…!!?』

訓練が始まる直前の会話がそれだ。そして始まると即座に飛び出していった。

爆豪が緑谷に対してやけに敵視しているのは夜々でなくともわかる。

「うちが居ない間もかつちゃんは居たやん…なんで知らんの?」ガリツ

誰も居ないにもかかわらず、彼女は誰かに質問をした。そして答えも待たずに自身の親指を啜える。

「……………プハア……………十升モード」

ここで防衛戦をするつもりなのか、戦闘準備はそれだけにして部屋の壁に背をつけた。部屋の真ん中には核兵器があり、そのまま夜々はひたすら待った。

同時刻のビル一階。

ヒーロー組は窓から潜入し、クリアリングを徹底して進んでいた。

「かつちゃんが敵なら、まず僕を殴りに来ると思う。その時、麗日さんは先に行つて」

「でも…デク君一人で大丈夫?」

「二人で足を止めるのは愚策だ。それに…それができないと僕らは勝てない!」

「誰が誰に勝つだつてツ!?」 Boom!!

曲がり角から飛び出してきたのはもちろん爆豪だった。直接攻撃を食らわせる事は出来なかったが、爆破の余熱が顔半分を焼く。

「デクこら避けてんじゃねえよ」

「やっぱり……………行つて麗日さ…」

「余所見たあ余裕だな! デエクツ!!?」

爆豪の右腕がまた攻撃に出るが、緑谷はそれを受け止めてから背負

い投げのように爆豪を地面に叩きつけた。

「うう……………ああ!!?」 ドツ!!?

「ガハツ……………!!?」

爆豪の最初の攻撃は高確率で右手の大振り。

ヒーローオタクである緑谷は、凄いと思ったヒーローの分析は全てノートに綴っている。その情報の中に爆豪の癖は記されていた。

今の投げも、その知識で先読みできたおかげだろう。

「行って!!?」

「ツ！ うん!!?」

麗日は背を向け上を目指した。

そして場面は上階、夜々の待つ部屋に戻る。

「……………」

夜々は変わらず待っていた。

広い部屋に4本の支柱。それ以外は何もなく、部屋のど真ん中にターゲットの核…それを見つめる夜々は変わらず、壁に背をつけて待機している。

（かっちゃんの出久を狙うやろな。昨日の今日で全ては知らんけど、優勢なのはかっちゃんやろ……………せやのに）

それを素直に喜べない自分がいた。勝ち負け以前に気になる事があるからだ。

（確かに昔から、出久とかっちゃんが仲よかったわけやない。うちを挟んで二人が居たからなあ……………仲良くして欲しいもんやわ）

「……………デク君あった！ 核！」

『場所は!?!?』

「5階の真ん中フロア！」

夜々からは見えない死角の影に麗日はいた。身を乗り出して状況を確認するとまた潜め、無線を使ってパートナーの緑谷に情報を伝達させる。

（……………堪忍してな）

「え…………?」

夜々から見えないという事は、麗日からも見えていないという事。

身を乗り出し続けていれば話は違うが、身を潜めて連絡するうちに夜々は背後に忍び寄っていた。

背後といっても、麗日が背にして身を潜めている壁の反対側だ。

「ー　　ボゴオン!!?　　ー　　」

「ツ!!?」

そしてその壁を、夜々は素手で殴り碎いて攻撃する。

その拳が麗日に届く事は無いが、咄嗟に避けようとする彼女に瓦礫が倒れ込む。

「危なツ!」

「うちを前にして密談やて?　それは甘いとちやいます」

ニタアと笑みを浮かべた夜々は、瓦礫から這い上がるうとする彼女に人差し指を向ける。

「加減はするでんな…」きほう「鬼砲」

「ちよっ!!?」

そう言つて指先から放たれたレーザーは、麗日を飲み込む…かのように見えた。

「自分も浮かせられるんやね」

「負担の大きい超必です!」

自らを無重力状態にしてレーザーを躲し、夜々の上を飛び越える麗日。いいタイミングで解除して、そのまま核兵器目掛けて飛びつこうとする。

「甘いで……………」

「な…………グツ!!?」

避けたはずのレーザーは支柱の一本を軸にするように曲がり、気が付けば麗日を真横から襲ってきていた。それはそのまま麗日を飲み込み、着地点はズレて硬い床の上に投げ出される。

「クウツ……………」

「さつきも言うたけど、加減はしたで」

夜々の言う通り加減はしたらしく、コスチュームに傷こそできるが破けてすらいない。しかしダメージが無いわけではなく、怯んでいるうちに追い討ちをかける。

” 鬼火”

「本物のクノイチ!!?」

「忍術やない…妖術や」

夜々の周囲に浮遊する火の玉が現れ、次々と麗日を襲い始めた。

初めのうちは避けれていたが、次第に数が増えて追い込まれてしまう。最終的に麗日は支柱を背に、鬼火に囲まれていた。

「うう……………」

「これで確保した事ではならんのかなあ…えつとどこにしまったか……………あ、”確保テープ”あつた！」

鬼火に囲まれて麗日が動けなくなったのを確認して、悠々と確保テープを取り出す。

確保テープとはこの訓練で使われる協力的な拘束アイテムで、これを相手に巻き付ける事で捕らえた証明になる。

「ほな堪忍して……………なんや? 諦めとらんのか?」

余裕の表情では無いにしろ、麗日の目は諦めていなかった。

それと同時に麗日の持つ無線から、夜々にも聞こえる声量で緑谷の声が聞こえた。

『麗日さん行くぞ!!?』

「出久……………何するつもりやヒーロー!!?」

核兵器を背にして身構える夜々は、冷静に状況を整理する。

今 麗日は支柱を背に”鬼火”の檻に囲まれていて、個性を発動させる対象となる物はその中不在。今麗日が触れる物といえば、訓練開始時に渡された無線、建物の見取り図、確保テープ…それから麗日自身くらいだ。

「はい!!?」ピタッ

「……………?」

一か八か確保テープでも投げられるのかと思っただが、麗日は背にしていた支柱に抱きついた。

だが支柱はビルの一部であり、ビルはもちろん地上にちゃんとした基盤を築いて建てられている。地上からビルを切り離さなければ、ビルを無重力状態にしたとて意味はない。

もつとも、砕いて大きな瓦礫片にすれば話は別だが。

「……………つてまさか!!?」

「……… ボゴオオ!!? ……」

「しまッ……………!!?」

突如として二人のいる階層の床が崩壊した。まるで下から高火力な攻撃を受けたかのように。

足場を崩された夜々は下へと落ちて行くが、麗日は自身と今しがた折れた支柱を無重力状態にしているのか浮遊している。

「夜々ちゃん! ごめんね即興必殺! ……彗星ホームラン!!?」

「ホームランやないやないかいッ!!?」

更に支柱をバットののように振るい、床だった瓦礫片が夜々に降り注ぐ。そして麗日はそのうちに、核兵器へ向かって飛び出した。

（鬼砲撃つか? 否、本気ならまだしも、あの程度の威力や止めれへん……………なら）

ポンツという音と共に、夜々の右手から鬼火が現れてそれが麗日へと直進する。

「悪足掻きや、間に合つてや!!?」

「」

「」

「」

「ヒーローチーム、WIIIIIIIN^{ウイ}!!?!!?」

結局、麗日はあのままへばりつくように核兵器という設定のハリボテに抱きつき、ルール上ヒーローチームの勝利で終わった。

最後の床の崩落の為に打った攻撃は、緑谷の腕を犠牲にした超パワーで間違いなかった。それが原因で緑谷は保健室に搬送され、それ以外の皆がモニター室に集まり講評の時間になった。

「まあつっても…今戦のベストは酒井少女だけだな!!?」

「そりや嬉しゆうなあ」

オールマイトの言葉に驚愕する者の中で、蛙吹がその疑問を声にする。

「勝ったお茶子ちゃんか緑谷ちゃんじゃないの?」

「何故だろうなあ……？ わかる人ツ!!？」

「ハイ、オールマイイト先生」

生徒に考えさせようと言ったオールマイイトの言葉に、八百万が手を挙げて答える。

「それはおそらく爆豪さんが戦闘を見る限り私怨丸出しの独断、そして屋内での大規模攻撃という愚策。緑谷さんも同様の理由。麗日さんは最後の攻撃が乱暴すぎたこと。ハリボテを核として扱っていたら、あんな危険な行為出来ません。ゆえの消去法でしょうか？ ですがそれは酒井さんにも言える話だと思うのですが、何故彼女がベストなんでしょう？」

八百万は疑問視しながらも自分の思った事を言う。

彼女の言う夜々の乱暴な攻撃とは、最後の鬼火の事だろう。何を隠そう、あの攻撃は麗日に当たるところか核を想定したハリボテに当たったのだ。

「八百万少女はそう言っているぞ、酒井少女!？」

「…最後のはただの悪足掻きや。あのまま当てるの自体は間に合うけど、当てても核を取られてしまう。せやから核にうちは当てたんや」
「……………つまりワザと当てたと?」

「それはダメだぞ酒井君！ いくら負けそうだからとは言って、それを投げ出していい理由にはならない!!？」

夜々の答えにまた疑問を浮かべる八百万と、それは間違いだと意を唱える飯田……………それを前に夜々もまた、「何がおかしい?」と言いたげに首をかしげる。

「せやて……………うち敵チームやで？ それもアジトに核兵器を保有するようなヴィランや…そんな二人でできる事やろか。うちは多分組織ぐるみやと思うんよ、今回の敵チーム…うちらが下っ端かなんかで二人で守ってる……………せやたら捨て駒かもしれへんやん？ だったら”負けるくらいなら道連れする”って考える思うんよ。最後のはその意思表示の悪足掻きや」

「成る程！ 設定をより深く理解しての行動…流石だ酒井君!!？」

「なるほど…そういう事なのですな？ オールマイイト先生」

(思ってたより言われたツ!!?)

「ま、まあそれでも指摘する点はあった訳だが……まあ正解だよ。くう………」

想定以上の回答だったのか、オールマイトは震えながら脂汗を滲ませる。

その後、場所を変えて訓練は続いた。

とどろきしやうと轟 焦凍と言う名のクラスメイトが、開始と同時にビルごと凍

らせて圧勝するというレベルの違いを見せつけたりしたが、緑谷のよ
うな負傷者は現れずに授業は無事終了した。

ただずつと見下していた相手：緑谷 出久に敗北した爆豪の顔は、
授業が終了しようと晴れることはなかった。

↓

↓

↓

放課後、リカバリーガールの元で処置を終えた緑谷は教室に戻つた。しかしその腕は完治しておらず、分厚いギプスが巻かれている。だが一戦目で派手にやった彼を見て、教室の中にいた生徒達は皆集まってくる。

それを掻き分けて夜々が出てきて、緑谷に尋ねる。

「またやりおつて。相澤はんにも制御できるって言われ………ん？」

治ってへんやん」

「あ、いやこれ、僕の体力不足で完治できなくて………それよりかっ
ちゃんは？」

「………みんな止めたんやけど、さつき帰つてもうた」

暗い表情で言うと、緑谷はドアに折れてない方の手を掛ける。

「追うん？」

「うん！ よつちゃんも来て！ 話したい事があるんだ!!？」

「お、なんや。告白かいな」

振り向きざまに言うと、夜々は茶化すようにニヤニヤと笑う。しかし緑谷は一切笑わず、「大事な話なんだ」とだけ言って飛び出した。

「青春だーっ！」

「夜々ちゃん！ 戻ったらどうなったか教えてね！」

「……………嫌や」

夜々は緑谷を追って走り出した。

「なんか本当に、大事な話みたいやから……………」

そう言い残して。

ー

ー

ー

「かつちゃん!!?」

爆豪はまだ校門を出ておらず、敷地内を一人歩いていた。

緑谷の声に足を止めるが、その表情は相変わらず暗く重い。

「ああ?」

唸るような返答…緑谷は一度考えたが、覚悟を決めて口を開いた。

「これだけは君に……………言わないといけないと思って」

そこで夜々も到着し、緑谷は続きを話し始めた。

「人に貰った個性なんだ」

それは母親にも言っていない秘密。

「誰からかは絶対に言えない！ 言えない…でもコミックみたいな話
しだけど本当で…！ おまけにまだろくに扱えもしなくて……………全
然モノに出来てない状態の”借り物”で……………」

だから…使わず君に勝とうとした！ けど結局勝てなくてソレに
頼った！ 僕は……………まだまだで……………!!? だから……………」

いつかちゃんと自分のモノにして

”僕の力”で君を超えるよ

「……………」

緑谷は「騙したわけではない」と伝えたかっただけなのだが、気が
つけばそう口走っていた。

それを聴き終え、爆豪は足の向きを変えてフラツと近寄る。

「……………んだそりゃ。借り物? これ以上コケにしてどうするつもりだ
……………なあ!!? だからなんだ!!? 今日…俺はテメエに負けた!!
? ……そんだけだろが……………そんだけ……………」

氷の奴見て敵わねえんじやって思っちゃまった!!? ポニーテールの奴の言う事に納得しちゃった!!?」

「ポニーテ……………うちか?」

「違えエ!!? クソが!!? クツソ!!? なあ!!? テメエもだ…デク!!?」

爆豪は憤怒の形相に涙を浮かべ、宣言するように吠えた。

「ここからだ!!? 俺は!!? ここから…!!? いいか!!? 俺はここで一番になってやる!!? 俺に勝つなんて二度とねえからな!!? クソが!!?」

そこまで言つて、爆豪はまた背を向けて帰路につく。

そのタイミングでオールマイトが飛んで来たが、自尊心の高い彼のアフターケアをしようとしたらしい。

一人ですでに立ち直っているため、完全に無駄骨だった。

「……………テメエもだ酒井。テメエにも負けねえからな」

「上等……………あと昔みたいにな」よっちゃん”て呼んでくれへんの?」

最後に夜々にも宣戦布告し、それ以上は何も言わずに彼は歩き去つた。

4. 鬼は傍観する

「教師オールマイトについてどう思ってます?」

「え? そりや……………えと……………」

「最高峰の教育機関に自分は在籍しているという事実を殊更意識させられますね。威厳や風格はもちろんですが他に……………」

No. 1ヒーローが教室を務めるというのは、世間的に見ても大きなネタである。その為か雄英の校門にはマスコミといった人種が集まり、登校した生徒達に手当たり次第マイクを向けていた。

(委員長はん真面目やわく、今の内にコツソリ門潜ろ)

ー

ー

ー

「昨日の戦闘訓練お疲れ。Vと成績見せて貰った」

担任の相澤が入室すれば、生徒は一斉に黙って前を向く。彼が担任になって三日目となれば、生徒達も時間を合理的に使うよう努力する。といっても、今はまだホームルーム開始時ピッタリに一斉に黙る程度のものだが。

ホームルームが始まれば、相澤が昨日の戦闘訓練について話し始める。

「爆豪。おまえもうガキみてえなマネするな。能力あるんだから。酒井も上手く動いたつもりだろうが、爆豪をセーブさせる努力はしろ。

二人組みの意味がねえ」

「……………わかってる」

「了解やわ、相澤はん」

「先生と呼べ……………で、緑谷はまた腕ブツ壊して一件落着か。」個性”の制御……………いつまでも”できないから仕方ない”じゃ通させねえぞ。俺は同じ事を言うのは嫌いだ。それさえクリアすればやれる事は多い。焦れよ緑谷」

「はいっー」

(同じ事言うの嫌いなら、そのうち相澤はんって呼んでも注意せんへ

んようなるんかな……………)

「さてH Rの本題だ。急で悪いが今日は君らに…」

ホームルーム

また臨時テストか？ と皆が身構えるが、本題は思ったものとは違った。

「学級委員長を決めてもらう」

「「学校っぱいの来たー！！？」」

静寂を通していた生徒達はやる気を出し、我こそはと前のめりになりつつ挙手をする。

普通科では雑務のような扱いだ、ヒーロー科では集団を導くというトップヒーローの素地を鍛えられる役でもある。

だが普通科同様に、雑務として認識して面倒に思う輩もいる。

(うちはパス。そういう役やないし)

そして飯田の発案により、多数決で決めることになった。

日が浅く信頼も何もない中で票を集めた者こそ、真にふさわしい人間という事になるらしい。

結果…緑谷が3票、八百万が2票獲得して委員長と副委員長は二人に任される事となった。

しかし夜々はそれとは別の所を見ていた。

そこには「酒井」の二文字と「一」という漢数字。「正」という漢字の二画目が、酒井の文字の隣に書いてあった。

(……………誰がうちに入れたんやろ)

そしてそう考える彼女の隣にも、同じような疑問を持つ者がいた。

(一体誰が……………いや、なんとなく誰かは分かるが……………)

飯田は横目で夜々を盗み見る。その視線に気付いたのか顔を向け、夜々は笑顔で手をヒラヒラと振っていた。

ー

ー

ー

「いざ委員長やるとなると、務まるか不安だよ」

「ツトマル」

「そう思う限り無理やない？」

昨日も一緒に食べた四人で食堂に足を運んだ夜々達は、昼食を取りながらそんな話をする。

麗日は不安に思う緑谷にそう言うが、夜々はバツサリと逆の事を言った。

そして飯田はというと、「大丈夫さ」と自信を持って言い放った。

「緑谷くんのごとぞという時に働く胆力や判断力は、”多”を牽引するに値する。だから君に投票したんだ」

「委員長はんが投票したんやね。そんな委員長はんには投票したんやけども」

「やはり俺に入れたのは君か。何故俺に？」

「……………委員長はんやから？」

今日は蕎麦を昼食に選んだのか、蕎麦の先を口に啜えながら首を傾げてそう答える。

「答えになっていない！　そして何故疑問文なんだ!?!？」

夜々は首の角度を戻すと、一呼吸置いて「ちゆるん」と一気に蕎麦を吸い上げた。

そして咀嚼して飲み込むと、飯田の疑問に答え始める。

「答えになるやん。うちは飯田はんが最初から委員長つぽいと思っはったんや。だから勝手やけど委員長呼ばせてもろた」

「ぽい……………」

「性格的な意味で個性の強い皆の中で手を挙げ意見する。かつちゃん相手でも怯まず注意を飛ばす。入試の時でさえ、千超える受験者の中で手を挙げはった。さらには委員長決める時も投票が適してる言うて、小さな結束やけど既にクラスを纏めてたやん？　先導する事に恐れへんアンタやから、うちは投票したんや」

「わあ…夜々ちゃんって思ったより考えてるんだね」

「なんや！　そな無礼なこと言うのはこのお餅か！」

箸を置いて麗日の両頬を軽く抓る夜々は悪戯つぽく笑う。それに対して自分に投票した理由を聞いた飯田は嬉しかったのか、ジーン…と打ち震えていた。

「でも残念やったな。副委員長は八百万はんで、結局なれんかったし

「……………やりたかつたんやろ?」

「“やりたい”と相応しいか否かは別の話。僕は僕の正しいと思う判断をしたまでだ」

「……………僕?」

「ッ!」

飯田の一人称が変わった事に気付いた緑谷がそう呟くと、飯田はハッと表情を固める。

「ちよつと思つてたけど飯田くんて…坊っちゃん!?!?」

「……………そう言われるのが嫌で一人称を変えてたんだが…ああ、俺の家は代々ヒーロー一家なんだ。俺はその次男だよ」

「ええ……凄……ツ!!?」

「ターボヒーロー インゲニウムは知ってるかい?」

「もちろんだよ!!?東京の事務所に65人もの相棒^{サイドキック}を雇つてる大人気ヒーローじゃないか!!?まさか…!」

「詳しい……………それが俺の兄さ!!?」

緑谷のオタクらしい詳しくに引きつつも、飯田はメガネを指で押し上げながらあからさまに…そして誇らしげにそう言った。

「規律を重んじ人を導く愛すべきヒーロー!!?俺はそんな兄に憧れヒーローを志した」

「あ、そういえばよつちゃんも……………」

緑谷に話を振られた夜々は、少しウンザリした表情を浮かべる。

「…せや。うちも代々ではないけどオカンがヒーローやで」

「何ッ! そうなのか!!?」

「委員長はんみたく立派なもんやないで?」

「そんな事ないよ!!?」

そう謙虚に言つて話を終わらせようとする夜々だが、ここでもオタクスイッチが入つたのか緑谷が否定する。

「ヒーローランキング39位、鬼嫁ヒーロー 酒姫!!? 少しマニアックだから名前は知らないかもしれないけど地元では愛されてるヒーローで、実力は本物の……………」

「出久待つて、怖いわ」

そこで待ったを掛けたのは夜々本人だった。

「よっちゃんはあまり好きやないの?」

「……確かにオカンの実力は本物やけど、尊敬はできんわ。個性の関係とはいえ、パトロールの仕方は梯子酒はしござけやし……それに雄英が遠いから今うち一人暮らしなんやけど……」

本当は邪魔やから追い出したんやで?

実の親を本当に憎んでいる口調で、夜々は吐き捨てる。

「え、追い出……」

「本当の事や……うちが邪魔やったんや。証拠に引越したその日に忘れ物したから実家に戻ったんやけど……親二人は何してたと思う?」

冗談ではなく本当の事なんだと理解し、三人は表情を暗くさせる。子供を貶すような嫌なワードが頭をよぎった。

「まさか……」

「そのまさかや……あのロリババア……」

既に全裸やったんやで?

「……はっ」

「え……」

「なッ……!!?」

理解するまでの時間にズレはあったが三人は赤面する。

「うちが居たせいでできなかったにしろ、娘が出て数分で合体しようとするか普通!? それおかしい言うたら、お詫びの代わりに弟か妹を……モガッ」

「わーわー!!? わーわー!!?!!?」

「夜々ちゃんソレ、食堂でする話やない!!?」

「それ以前に未成年が口にしていい話ではないぞ酒井君!!?」

隣に座ってた麗日が両手で口を抑え、テーブルを挟んだ向かいに座る男子二人は慌てふためく。

「……思春期やなあ」

そして夜々はそれを見て楽しんでいた。

「あと純粹に酒好きやかならなあ：朝の一杯は鬼殺し、一日の締めも鬼殺し、弁当のお供に鬼殺し、ウガイに使うのも鬼殺しで、消毒液の代わりにバーボンやで？」

「消毒だけハードボイルドッ?」

そんな楽しい時間は、唐突に終わりを迎える。

『ウウー……!!?!!?』

『セキュリテイ3』が突破されました。生徒の皆さんは屋外へと避難してください』

警報に続き、そんな事を放送で知らされる。

「セキュリテイ3……?」

「校舎内で誰か侵入してきたって事だよ!!? 君達も早くッ!!?」

先輩と思われる人が夜々の疑問に答え、人の波が出口へと一斉に動き出す。その波に飲み込まれて出久は流され、飯田は窓際まで押され、麗日もその近くまで流されていた。そして夜々は……

「……アカン、お茶子はんの”個性”で逃げれへん」

「あぁー……! ゴメン夜々ちゃん!!?」

麗日の”個性”である無重力の発動条件は、指5本で触れる事……厳密に言えば、指の腹に付いている肉球が5つ触れる事で発動する。

夜々は麗日に口を押さえられた時に、それに触れられてしまったよ
うだ。

人混みが波打つその上を、夜々はスカートを押さえながら浮遊していた。

「……あ、ちよつと楽しい」

「言ってる場合じゃないだろ、よつちゃん!!?」

今解除すれば落下し、着地する床は人混みで見えない。誰かしら怪我するだろうと考えているその頃、窓際で動けなくなった飯田のみが事の真相に気付いた。

「アレは……今朝の報道陣じゃないか!!?」

雄英高校の校門は関係者以外が近付くとシャッターが下される仕

組みになっている。それを掻い潜って敷地内に入る…それも校門前に居た報道陣全員が入ってくるのは不可能だろう。

だがそれが出来ているのだから今こうなっているのだろう。最も可能性としては、セキュリティゲートである校門の不具合だと思うが。

(この状況に気付いているのは……僕だけか!?)

窓に押し付けられながら周囲を見渡すが、相変わらず生徒達は皆混乱状態だ。そう判断する飯田は、流されて離れ離れになった友人を比較的に近い場所で見つける。

「大丈夫、飯田くん！」

「麗日君……ッ!!? 俺を浮かせ!!?’」

咄嗟に思いついたやり方で、飯田は場を収束させようと行動に出た。

麗日の伸ばした手の五指が飯田の手に触れ、人波から外れて空中に出る。

「委員長はん、迎えに来てくれたん?’」

「すまない酒井君！ 君は後だッ!!?’」

無重力状態になり浮遊したまま、学生服のズボンの裾を捲る。すると脹脛から生えたバイクを彷彿させるラフラーが、突如として空気を吐き出し推進力で飯田を押し運ぶ。

無重力ゆえに複雑に回転しながら、飯田は皆が逃げようと押し迫る出入り口の真上の壁に激突した。

そこに突き出た何かの配管に手をかけて声を張り上げた。

「だいじょーぶッ!!?’」

喧騒を切り裂くように飯田の声は響き渡った。

それに続きマスコミの存在を知らせた事で、辺りにいた学生達は落ち着きを取り戻した。

「…非常口のマークやんけ」

一人高い所で食堂を見下ろす夜々は、出入り口の上にへばり付いた飯田を見て感想を零す。

やがて生徒達は教室に戻るように放送で指示が出され、人混みが薄

くなってきたところで夜々はやっと床に足を付ける。

「ゴメン夜々ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫やでお茶子はん。むしろ」おしくらまんじゅう”されるより
だいぶマシやったわ」

然程気にしていない様子で四人も教室に戻った。

その後、緑谷が委員長の座を辞退して飯田を推薦し、彼が1-Aの
委員長を務める事になった。

(やっぱり委員長やん)

ホームルームが終わったのを確認し、夜々は席を立って帰路につ
く。

が、自分のスマホにメールが来てる事に気づき踵返した。

向かう先は職員室だが、辿り着く前に目的の人物の後ろ姿を見つけ
た。

「相澤はくん！」

「ん……………酒井、お前いい加減にしろよ？」

少しマジな口調で注意をされたが、夜々は毛ほども気にせず話し
始めた。

「多分昼の事がもうニュースになったんやろうね、それ見たオカンが
伝言やってメールが」

「伝言……………あの人から？」

ポツリと呟いてから苦悶の表情を浮かべて、トーンを低くしてそう
いった。

「オカンと知り合いなん？」

「一応な。で、内容は？」

またスマホを起動してメールを開き、夜々は相澤に内容を口頭で伝
える。

「えー、”災い来たりて、気張れ”……………やって」

「……………」

たったそれだけの文に呆れたのかと思ったが、相澤はその言葉を聞
いて考え込み始める。

「……………こりや、近いうちに何かあんな」

「なんでそんなん分かるん？」

「お前が気にする事じゃねえよ」

「ええー、なんや気になる〜。相澤はんオカンとどうゆう関係なん？」

「相澤先生と呼べ。んでもって帰れ」

「ええやんええやん。聞かせてや〜」

「こつちは仕事残ってんだよ。これ以上の会話は合理性に欠ける」

ー

ー

ー

「……………ふう〜」

『YEAH!!? どうした溜め息なんかついて！ そんなんじゃ幸せ

はどんどん逃げてつちまうぜ!?!?』

「五月蠅いぞマイク」

職員室で自分のデスクに腰を下ろすと、昔から縁のあるプレゼント
マイクが個性を使った声量で話しかけてくる。

「で、どうしたんだ？」

「どうも何も、校長が昼の騒動の後言ってただろ」

ふとマイクは昼の騒動を思い出す。

今朝から校門に集まっていたマスクミ達は、昼になると侵入者を阻
む校門のゲートを破壊して敷地内に入ってきた。

いくら情報に飢えるマスクミだからといって、器物破損までするだ
ろうか……………

「マスクミは陽動だ。邪な者が入り込んだか……………宣戦布告か……………校
長もそう言っていただろ。で、そんな時に不吉な伝言を耳にしてな」
「ワッツ？」

「災い来たりて、気張れ……………このセリフはお前も聞いた事あんだろ
？」

「……………酒姫か」

豹変と言うほどではないが、マイクは態度を変えて呟いた。

相澤とマイクは先程も言った通り昔から縁のある人物である。そ
んな二人が新米だった頃に世話になった事のあるヒーロー……………そ

れが現プロヒーローの鬼嫁ヒーロー”酒姫”、酒井 夜々の母親であつた。

「あの人の”勘”は当たるからな。それも踏まえ、今度のヒーロー基礎学は担当する教師を増員し、三人程で行う事になるだろう」

「オレちゃんはいる?」

「要らん」

「それはそうと話は変わるがイレイザー」

「なんだ?」

「酒井ガール……………父親の遺伝子どこやった?」

「……………確かにな」

相澤は苦手とするかつての先輩……………そんな人に似過ぎている夜々を、相澤は同じく苦手意識を抱いていた。

U S J 編

5. 鬼は会敵する

日本で見られる和風な方の城。その城にある畳張りの大広間の真ん中に少女はいた。

一畳からはみ出る事なく、正座して誰かを待っている。

彼女から見て右に壁は無く、代わりに襖でその面は埋められていた。後ろも同様。そして左は吹き抜けになっていて、手入れの行き届いた見事な中庭が一望できる。

しかし、少女はただ前を向いてジツと待っていた。

正面には一段高くなった所に六畳程の空間と、座布団と肘掛けとお膳がある。しかしお膳の上には空の盃しか無く、そこには誰も座っていない。

それでも少女は誰かが来るのはジツと待っていた。

ー

ー

ー

「……………」

まだ生活感も少ない部屋の布団の上で、夜々はひとりでに目を覚ました。

人は眠れば夢を見る事がある。鬼の血が流れていようがそれは同じ。

ただ彼女は昔から、時折今見た夢を見る。

聞けば彼女の母と祖父も、そしてそのまた前の代も同じ夢を見た事があるとの事。

鬼人の個性を継ぐ者のみが見る事から「先祖の記憶」だとか色々と推測されているが、実際は何を意味するのかは誰も知らない。

ー ー ジリリリリ ー ー

その夢は何かを暗示しているわけは無い。

ただ彼女は、この夢を見た日だけ目覚ましは鳴るより早く目が覚め

る。

その夢を見ることは珍しい事では無く、何の疑問も持たずに夜々は朝食の準備を始めた。

「

――

――

時間は飛んで午後。

昼食を済ませた生徒達は教室に戻り、自分の席に座って担任が話し始めるのを待つ。

合理主義者こと相澤の生徒になって早数日：生徒たちは彼が入室すると同時に”黙って前を向く”という動作は機敏に行なっていた。(調教されとるなあ、うちら)

「今日のヒーロー基礎学だが：俺とオールマイト、そしてもう一人の3人体制で見ることになった」

「3人に：なったん？」

「ハイ、何するんですか？」

夜々が疑問を呟くが、誰かが気付く前に瀬呂が別の疑問を相澤にぶつける。

「今回やるのは、災害水難なんでもござれ”人命救助訓練”だ」

相澤は「RESCUE」と書かれたパネルをこちらに見せて言う。「れすきゅー……………」

その文字を見て、夜々はふと自分の個性との相性を考える。

戦闘向きではあるが、人命救助に向いてるかと言われればわからない。自分が活躍する場面といえ、その怪力でレスキュー隊と同じ動きをするくらいだ。

”自分だからできる救助”というものが夜々には無いのだ。

だからこそ今回の授業に対して、夜々はやる気に溢れていた。

「相澤はん。授業はどこでやるん？」

「訓練場所はここから少し離れている。各自コスチュームに着替えてバスで移動だ。それと酒井、同じ事を何度も言わすな」

言い終えた相澤は、ウンザリした様子で夜々に忠告して退室した。

その表情から、呼び名の訂正は諦め半分なのが伺える。

「……………もう一押しやな」

「酒井…お前は何と戦っているんだ？」

夜々が零した確信に対し、クラスメイトの佐藤がボソリと疑問を口にした。

ー

ー

ー

「こういう作りだったかッ!!？」

バスに乗り込むや否や飯田は叫んでいた。

理由はバスにスムーズに乗れるよう、委員長としてクラスメイトを纏めようとしたからである。

出席番号順に2人ずつ……………しかし雄英のバスの作りの後部は普通の二人掛けの席だったのだが、飯田たちが座っている中部から前部は左右に座席があつて向かい合うタイプだったのだ。

これでは出席番号など関係なく、飯田の指揮は空回りという結果で終わったのだ。

「意味ないね!」

「ぐおおおお!!？」

「カッカッカッ!」

そこに芦戸の追撃で意気消沈になる飯田。その隣では夜々が笑いながら背中をさすっている。

「ところで緑谷ちゃん。私、思った事は口に出しちゃうの」

「えっ……………う、うん。蛙吹さん？」

「梅雨ちゃんと呼んで？」

女子との会話に慣れていない彼は、不慣れながらも返事をする。だが「ちゃん」呼びはまだハードルが高そうだ。

そして蛙吹は宣言した通り、思った事を口に出した。

「あなたの個性オールマイイトに似てるわね？」

「えっ!!？そ、そうかな……………どこにでもある様な個性な気も……………」

あからさまに挙動不審になる緑谷だが、誰もそれを怪しまない。

というよりは、皆が「似ていない」と思っていた。

「そうだけ梅雨ちゃん。オールマイトは怪我なんかしねえ。緑谷のとは似て非なるものだけ？」

「掛け声は同じやけど、それは単純に出久がファンなだけやしな」

切島と夜々の言葉に頷く者が数人。オールマイトの後継者という疑問は、そもそも持たれてすらいなかった。

「でも増強系の個性つてのは良いな。鍛えればやれる事が増えるだろ？ 俺の”硬化”なんて対人戦は強いけど地味だからな……」

「せやろか？ 確かに迫力あるんやけど、それを食らっても倒れない防御力つてのはエグいプレッシャーやで？ 工藤の個性やって、鍛えりやそうなるやろ」

「俺の名前は切島な？」

切島の個性に対してフォローを入れるが、まず切島は夜々を見て自分の顔を指差して言った。

「それはさておきプロつてさ、やっぱ人気商売だろ？ そう思うと地味なのは致命傷なのかもな」

宙に伸ばした切島の腕がゴツゴツと僅かに変形。その腕が個性によって硬化されているのが目で見えてわかる。

「僕のネビルレーザーは威力も見た目もプロ並み」

「お腹壊すのは致命傷だけどね」

切島の言葉に反応した青山だったが、芦戸の何気無い一言が彼を傷つける。

「派手さと強さつてなんなら、やっぱ爆豪と轟だよな!!？」

話題は緑谷の個性から個性の派手さへと変わる。その話題の的は、今呼ばれた2人に絞られる。

「屋内対人訓練の時なあ…轟はん一瞬でビル凍らせて、見ててびびったわあ」

「本当だよね！ 私本気だったのに一瞬でやられて恥ずかしかったよ」

「それは恥ずかしいんだ……」

夜々の素直な感想に、轟ペアの対戦相手だった葉隠がそう言った。

葉隠は生まれた時から四六時中透明になる個性を持った少女だ。透明になるのは身体だけなので、コスチュームだけ浮いてるのが現在の見た目である。

ちなみに、彼女は本気で戦うために屋内対人訓練では全裸で挑んでいた。

それを知るペアだった尾白は1人眩いた。

「アレでは凍結しか観れへんかったな…轟はん炎は使わへんの？」

「……………ああ。こっちは使わねえ」

夜々に指摘され、轟は一瞬睨んでから興味なさそうにそう返した。

反応からして何か訳があるとその場にいた者は察した。

「そーいや酒井も派手だったよな。あのレーザー」

そして話題の矛先は夜々へ移る。

「ですが酒井さんのあのレーザーは、見た目より威力が低めなのでしょうか」

「屋内訓練の時に麗日が食らった時は、見ててヤベエと思ったけど、確かにピンピンしてたな」

「オイラもコスチュームくらいは破けると思ったんだけどな」

「麗日さんは大丈夫でしたの？」

「うん！　なんか強い熱風に当てられた感じ。グワアーツて！」

食らった本人がそう言うのと、周囲のクラスメイトが「威力はないのか」と勘違いする。

「んなわけねえだろ。少なくとも丸顔が原型とどめるほどチャチな技じゃねえ。あの技で入試試験の0カスは一撃でのされた」

するとずつと黙っていた爆豪が代わって代弁した。

頬杖ついて外に顔を向けているが、その目は鋭くこちらを見ていた。

「0カス…ってあのお邪魔ギミック!?　マジかよ!!?」

「せやけど、結局は威力あるだけやで?　鍛えても加減か殺せるよう

になるだけ。攻撃の他に拘束や移動手段に使える轟はんやかっちゃんの方が羨ましいわ。矛であり盾になる工藤の個性もウチは好きやで?」

「そんなもんかあ…つーかビビった。爆豪ずつと黙ってたと思つたら急に喋んのな」

「せやなく。ウチの事になると喋り始めるなんて、ウチに対する愛を感じるわあ〜」

「ツザケンな!!? んなわけねえだろ!!?」

夜々以上に鬼らしい表情で睨む爆轟だが、夜々の揶揄いは止まらない。

「そんな顔せんといてや〜…………ハッ！もしかしてウチのこと嫌いになったん?」

「うるせえつってんだよ!!? マジで殺すぞゴラア!!?」

(…嫌いとは言わないんだな)

バス内にいる誰がとは言わないが、誰かが心の中でそう呟いた。

ー

ー

ー

一同を乗せたバスはやがて、訓練場所と相澤が称していた場所に入った。そして中に入ってみると…

「「「USJかよ!!?」」」

見た感じ広く「災害水難なんでも御座れ」と言うだけあって、火災ゾーンや土砂ゾーンといった具合にエリアわけされていた。

まさに災害のテーマパーク。それを見た生徒がそんな感想を抱いても仕方ない。

それが原因かは知らないが…………

「ようこそ。色んな災害の演習を可能にした、僕が作った施設。嘘の災害や事故ルーム——略して『USJ』へ!!?」

「「「本当にUSJだった!!?」」」

生徒にそうツツコミをさせた施設の立案者、スペースヒーロー 13号は紳士のような立ち振る舞いで生徒たちの前に立つ。

宇宙服のようなヒーロースーツに身を包んだ彼だが、各地の災害現場で活躍するれっきとしたヒーローである。

「13号。オールマイトは? ……ここで落ち合う筈だろ」

「それなんですが……」

13号に相澤が歩み寄ると、2人は小声で会話を始める。
盗み聞きしようも夜々はコツソリと近づく。

「もう良い、始めるぞ………何してる酒井」

「あ、お話終わってもうた？」

姿勢を下げて近付いたところで振り返った相澤…冷たい口調でそう言うのと、夜々は苦笑いを浮かべる。

「…例の子ですね」

「ああ」

「え？　なんかウチ、噂になってるん？」

「……………戻れ」

「……………はい」

スケジュール帳で軽く頭を叩かれた夜々は大人しく下がる。

「では、始める前に御小言を1つ2つ………3つ………4つ………」

増えていく小言に生徒は戸惑うが、そんなことはつゆ知らずで話し始める。

「ご存知かと思いますが、僕の個性は“ブラックホール”です。全てをチリにする事ができ、災害現場では瓦礫などをチリにして人命救助を行っております。それで多くの人を救っていますが、同時に人を簡単に殺せる個性です」

その言葉の重みに、生徒たちの何人かはピクリと肩を揺らす。自分の個性で人が殺せる自覚があるのだろう。

「今の世の中は個性の使用を規制する事で成り立っている様に見えるかもしれませんが、一歩間違えれば安易に命を奪える事を忘れてはいけません。相澤先生の体力テストで己の“可能性”を………オールマイト先生の実戦演習ではその可能性を含め、人へ向ける危険性を………そしてこの授業では各々の個性をどう人命救助に生かすのかを学んでいきましょう。君達の個性が他者を傷付けるだけのものではない…その事を学んで帰ってください」

話を終えた13号は優雅に一礼し、生徒たちは歓声をあげる。中には「ブラボー！」と賞賛する生徒もいる。

(……1つ2つ3つ4つ……どこからどこまでが?)

最も、夜々はそんな事を考えていたが……

そして……そんな中でソレは起きた。

「全員、一塊になつて動くな!!?」

最初に気付いたのは相澤だった。

身体を反転させて施設の中へと走り出し、マフラーのように何重にも首に巻いた布に手を掛ける。

「13号!!?」

「はい!!?」

次に気付いたのは13号だった。瞬時に状況を判断し、生徒達を守るように立ちほだかる。

問題は何に対して立ちほだかっているかだが、相手は相澤の進行方向にいた。

そこにあるのは黒いモヤと、そこから現れる集団だ。

「なんだあれ? もう始まつてるパターン?」

入試試験を思い出し疑うが、答えはNOだった。

「動くな!!? アレは敵だ!!?」

「……………え」

「な、なんでヒーローの学校にヴィランが来るんだよおお!!」

「先生! 侵入者用のセンサーは!!?」

「ありますが……反応しない以上、妨害されているのでしよう」

「そう言う個性持ちがいんのか。場所、タイミング:馬鹿だがアホじゃねえぞあいつら」

「13号、お前は生徒を避難させろ! 上鳴は学校へ連絡を試みろ!」

見た者の個性を一時的に封じる個性を持つ相澤は、ゴーグルを付けてその視線を隠す。

いつのまにか個性は消され、捕縛布と体術で無力化する。それが彼の戦い方だが、一対多には向いていない。それを知る緑谷が不安を口にするが、本人は毛ほども気にした様子は見せない。

代わりに返ってきたのは……………

「安心しろ、なにも死に行くわけじゃねえ。それに一芸じゃヒー

ローはやつていけねえ」

頼りになる力強い答えだった。

個性を使って攻撃しようとした敵は、^{サイラン}発動しなかった自分の個性に戸惑う。その隙に相澤の捕縛布が身体に巻き付き、引けば地面に顔面から叩きつけられた。

その戦い方に見惚れてるわけにもいかず、生徒たちは13号の指示に従い避難を開始する。

「させませんよ……」

しかし黒い霧の敵が^{サイラン}突如として出現し退路を阻む。

「初めまして。我々は敵^{サイラン}連合と名乗っています。僭越ながら本日は英雄高校に入らせていただきました目的は………平和の象徴オールマイトを亡き者にするために参りました」

No. 1ヒーロー オールマイトを殺すと宣言され、辺りには緊張感が走る。

「ワープして来よった……いつが敵の^{サイラン}出入り口やな」

「ここにオールマイトがいるという情報でしたが、なにか事情が変わったのでしょうか……まあ構いません。私の目的は……」

「オラア!!? 死ぬエ!!?!!?」

「おおおおー!!?」

「かつちゃん!!? 工藤!!?」

相手が言い終わるより早く、爆豪と切島が攻撃に転じた。

しかしその攻撃に確かな手応えは無く、比喩とかではない霧の身体を持つているようだ。

「怖い怖い。生徒とはいえヒーローの卵である事には変わりありませんので………散らして殺します」

「2人とも下がちなさい!!?」

標的を爆豪と切島に絞った霧の敵に、^{サイラン}2人は戦闘態勢に入り飛びかかる。しかしそれを咎めるように13号が叫ぶ。

彼の個性……ブラックホールなら霧のような身体でも吸い込めるかもしれない。生徒2人を犠牲にすればの話だが………

2人は果敢にも戦おうとしていたが結果、それが13号の射線に

入っていたのだ。

爆豪と切島は霧の中に飲み込まれそうになる。

それを追うように夜々が飛び出す。そのツノは僅かに光を帯びていた。

”鬼圧”」

「ツ!!?」

「うおっ!!?」

———ズンツ! ———

すでに十升モードに入っていた夜々が2人を掴むと、夜々は宙で一瞬停止してから真下へ落下した。それに吊られて爆豪と切島もその場に伏せるような態勢になる。

「13号はん!!?」

「ツ、わかりました!」

13号はブラックホールを発生させ、霧の敵を捉えようとする。捉えるのが無理だとしても、引き寄せている間に生徒たちは避難することが出来るからだ。

先ほどまで障害物だった2人は、夜々が片手に1人ずつ抱えて射線の下で蹲っている。

「待ツ! 先生、夜々ちゃんたちが!」

それでも完全に射線から外れたわけではない。

だが麗日が口にした心配はよそに、ブラックホールは敵のみを吸い込んでいた。

厳密には違うのだが、ブラックホールによって吸い寄せられているのは敵だけだ。

「あれを見ろ! 酒井くんの足が!」

飯田が指差す彼女の足は、つま先が地面にめり込みストッパーとなっていた。

加えて、夜々が使った”鬼圧”と言う技。ザックリ説明すると、対象の体重を重くする妖術だ。

それを自分に使って飛ばされにくくしたのだ。

そしてそれに瞬時に気づき判断した13号も流石プロとしか言い

ようがない。

「今のうちに行きなさい!!?」そして応援を!!?」

「くっ………いやはや…流石としか言いようがありませんね。しかし………」

しかしプロヒーローとはいえ、彼は救助を主な仕事とする者……
敵と戦うことはあっても、命を奪いかねないその個性を人に使うのにはやや抵抗があった。

「グアアツ!!?」

霧の敵の個性はおそらく”ワープホール”だろう。

13号が出したブラックホール…そのすぐ前にワープホールを作り、その通じる先を13号の背後に作った。

結果、ワープホールを通して、13号は自らの個性で自分の背中をチリに変えてしまった。すぐに個性を解除したが、強力なゆえに一瞬で大ダメージを受けた。

「先生!!?」

「行きなさい!!?」

「自分の命より生徒を優先するとは教師の鏡ですね。ですが………させません」

USJの出入り口に再び陣取る霧の敵は、自分の身体と思われる霧を拡散させる。

「全員下がりや! そのモヤモヤに入ると飛ばされるで!!?」

「心配してる場合ですか?」

周りに注意しながら下がろうとした夜々は、急な浮遊感に襲われる。

足元にワープホールが出現したからだ。

「チツ………」

「テメツ!!?」

夜々は爆豪と切島を突き飛ばし、ワープホールの中へと一人で沈み出す。

「よっちゃん!!?」

咄嗟に伸ばした手も虚しく、緑谷の手は空を掻き、夜々を飲み込む

だワープホールは消え失せた。

「デメエ!!? 酒井をどこ飛ばしやがったア!!?」

「さてどこでしょう。運が良ければ会えるでしょう………そんなヘマ、私はしませんが」

ピンポイントで夜々を狙ったのとは違い、比にならない勢いで霧が拡散される。

それから逃れられた生徒もいたが、何人かはその霧に飲み込まれていった。

「ウワツ!!?」

「キヤツ…」

「ヤオモモ……ウツ!!?」

冷静さを欠いたのか、爆豪は敵に突っ込み攻撃を仕掛けるが、例外なく彼も霧に飲み込まれていった。

「クソガアアアアアアア!!?」

「危ない危ない。今度こそ、散らして殺します」

その場に残った生徒の数は、半数を切っていた。

6. 鬼は奮闘する

浮遊感の先にあったのは、地面と激突した時の衝撃だった。

背中から地面に落ちた夜々は小さく唸りゆっくり身体を起こすと、ワープホールを落ちた先では周囲が赤く燃え盛っていた。今来たばかりの夜々だが、熱のせいで早くも汗をかく。

「ここは…火災エリア？」

正式名は火災ゾーンである。

そして燃え盛る炎のほかに、夜々は多くの人影を確認した。それは彼女を取り囲むように並んでおり、落ちてきた夜々を見て歓喜の声をあげた。

「お。獲物とーちゃーくー！」

「ギャハハハ!!? 運のねえ奴！」

「中々可愛いじゃねえか。次が来るまでマワそうぜ？」

下劣にもそんな言葉を口にするチンピラたち。全員もれなく敵だらう。サイラン

「一番乗り〜」

「あ、ズリイぞー！」

「ギャハハハ!!?」

異形系の個性と思われる大男が、夜々にダイブするように飛び掛かってくる。

ー ー ー ズンツ ー ー ー

大の字の態勢のまま夜々に覆い被さると、重く鈍い音が聞こえた。早くも1人始末してしまったと思ったのか、周りの敵は下劣に笑いながらも少しつまらなそうな態度を取る。

「はええよバカ！」

「ちよつと退け。まだ生きてるかも知れね」

「……………」

その声に応えるように大男が動き出す。そして……………

「ドワアアア!!?」

「グヘツ!!?」

「……ツ!!?」

その男は吹き飛び、三人の敵を巻き込んで仰向けに倒れた。その目は白目を剥き、腹部には拳大の陥没した凹みがあった。

「おい! どうした……ハッ!!?」

気づいた時には眼前に拳があつた。

減速することなく振り抜かれ、敵はまた1人宙を舞う。

「うち今日の授業……楽しみやつたんやけど?」

イラついた様子で夜々が言う。ツノは依然として淡く光り、眉間にはシワを寄せる。

「デメエ!!?…ウゴオ……オ……オウ……」

激情した別の敵が襲い掛かるが、振り上げられた夜々の蹴りによって一瞬だけ身体が宙に浮く。間も無く着地すると敵は青ざめ、股間を抑えて蹲った。

「お、お前……なんてことを……」

「敵 相手に手加減はせえへんよ……なんで内股なん?」

「見てるだけでも痛えんだよ!!?」

夜々は足を下ろし、まだ攻撃してないのに何故…と、首をかしげる。だがそれも束の間、夜々は開き直り臨戦態勢に入る。

「まあ有効打ならなんでもええ」

「」

「」

「」

「なんだ……コレ……」

同じく火災ゾーン。遅れて飛ばされた男子生徒、尾白 猿夫は、飛ばされた先で異様な光景を目の当たりにする。

本来なら自分を待ち受けていたのであろう敵たち……だが彼らは皆、腰を折つて前のめりに倒れていた。額と膝を地面に付け、ケツは天に向け突き出ている…そして両手は股間に添えられていた。

「おろ? ……えつと……あー」

「酒井さん……コレは一体……?」

先に飛ばされた夜々がそこに姿を現わす。

少しだけ息を切らしながら歩み寄り、尾白の名前を思い出そうと頭を回転させる。しかしそれも諦め、尾白の疑問を察してそちらを先に答える。

「うちがやった。この辺の輩は制圧したで」

「制圧……なにで？」

「金的で」

「金的で………」

引き気味で復唱する尾白に、夜々は軽くパシツと額を叩く。

「惚けとる場合かー！ 情報交換しようや。うちが飛ばされた後どうなったん？」

「え？ えっと、他のみんなも飛ばされたと思う。多分散り散りに……」

「どのくらい？」

「クラスの大半は飛ばされたんじゃないかな？」

「んー、そかあ」

どこの訛りかわからないが、そんな口調で生返事して唸るように考え込む。

「こいつら……何が目的なんだろう」

「オールマイト殺す言うとったな。あ、でもここに伏せてるのはチンピラばかりやったで？」

思い出したように言つて、夜々は自分のツノを指差す。

「途中で十升モード切れてもうたけど、素で十分やった」

「オールマイトを殺す手段は、おそらく他にあるんだろうね。とても想像できないけど……他に何か聞きたいことはあるか？」

尾白がそう言うと、夜々は苦笑いを浮かべる。

「…大変申し訳ないんやけど………お名前のほう……」

「………尾白だよ。尾白 猿夫。個性は見ての通り尻尾」

「尻尾！」

「酒井さん、離してくれるかな」

「ちゃんと手入してるん？ あんまモコモコせえへん」

「酒井さん、ちゃんとしてくれ」

「ちゃんとしとるよお！ ただ物事考えるのに癒しが欲しくなつて

「……お詫びに呼び捨てでうちのこと呼んでええよ」

元々呼び捨てだろうがなんだろうが気にしなくせに、彼女は意味不明の等価交換(?)を勝手に成立させた。

「はあ……君はみんなが心配じゃないのか?」

「心配はしとるよ。ただ大丈夫そうやから」

「……………根拠は?」

「まずココ、火災エリア…ここにいたのは炎操作、発火、耐熱性のある異形系。このエリアで有利に戦える…少なくとも炎を物ともしない個性持ちやつた」

腰を折って気絶している敵を指差してから、その手を辺り一帯に泳がす。

「せやのに蛙の梅雨はんと氷使う轟はんは一緒に飛ばされへんかった。つまり相手はうちら生徒の個性までは把握しとらん。敵からしたら子供でも戦闘の意思ある未知の個性が20人。更に敵のほとんどが連携のとれないチンピラ集団…方が一があっても、すぐにはみんなやられへんやろ」

「……………本当にちやんと考えてたんだ」

「なんなんやお茶子はんといひ! こんにやろめ!」

尻尾を撫で回す夜々に、尾白は苦笑いを浮かべて止めるよう促す。

「反応薄いなあ…性感帯だったりせえへんの?」

「でも君の言う通りだな。俺らは出口目指そう」

「無視かい…まあ、誰か一人でも出れば応援呼べるしなあ。どこにいるかわからないみんな探すより、プロヒーローを呼ぶ方がええやろ。あとは一人で多数相手に踏ん張ってる相澤はんが気になるなあ」
二人は火災ゾーンを離れ、USJの出入り口を目指して歩き始めた。

尾白が前を歩き、夜々がその後ろをついて行く形だ。もつとも、尾白の尻尾に興味向き、抱きやすいから後ろにいるだけ。それ以外の理由は無い。

1

1

場所は代わってUSJのセントラル広場。

ここでは生徒たちに敵が向かわないようにと戦う相澤…イレイザーヘッドの姿があった………あったのだ。

「個性を消せる…素敵だけなんてことはないね。圧倒的な力の前では、つまりただの無個性なもの」

そう呟くのは、顔を鷲掴みする手の形をしたマスクをつけた男。

その前には脳味噌と歯を剥き出しにした黒い大男がおり、その大男の手はイレイザーヘッドの頭を無造作に掴んでいた。

その手は彼の頭を掴んだまま、地面に叩きつけて小さなクレーターを作ったところだった。

そこに戦う姿は無い。両腕は曲がらない方に曲げられ、全身も同じように骨が折れているだろう。

そしてその光景を見つめる人影が水辺にあった。緑谷、蛙吹、峰田の3人だ。

彼らは水難ゾーンに飛ばされたが無事突破し、川のように伸びた水辺に潜み移動してきたのだろう。

自分たちの力は十分に敵に通じる…そう勘違いしていた事に彼らは気が付き、深い絶望から動く事ができなくなっていた。

「死柄木 弔…」

その名は手のマスクをつけた男の名前のようだ。

名前を呼ばれた死柄木は声のする方へ向く。

「黒霧、13号はやったのか？」

「はい。しかし散らし残した生徒に一名、逃げられてしまいました」
出入り口に陣取っていた黒霧と呼ばれた敵は、ワープして来て現状を報告する。

「…は？…はあ…はああー」

黒霧の失態にイラつきながら、ガリガリと首元を掻き巻く。

「黒霧お前…お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしたよ……」

逃げた生徒は学校に行き、プロヒーローに救援を求めらるだろう。

流石に何十人ものプロ相手では敵わない…そう考えたのかボソリ

と呟く。

「今回はゲームオーバーだ……帰ろつか」

この一言で潜んでいた3人は安心する。

だが気味が悪かった。これだけのことをしといて、あっさりと引き下がる。

死柄木は「ゲームオーバー」と言った。その言葉の通り、今日起きた一連の騒動がゲームだったように……クリアが出来ないから途中で電源を落とす子供のようにも見えた。

「けども……その前に平和の象徴としての矜持を少しでも……」

死柄木は水辺へと距離を詰め、蛙吹に向けて掌を伸ばす。

「へし折って帰ろう」

動けずにいた3人は反応に遅れた。

死柄木の個性は見たところ、”触れた物を崩壊させる”ことが出来る。一度だが、それでイレイザーヘッドの肘が崩れるのを緑谷は見ていた。

だからこそ想像してしまう。蛙吹が物理的に崩壊する様を……

「……………?」

「…本っ当かつこいぜ！ イレイザーヘッド!!?」

しかし個性は不発に終わった。イレイザーヘッドの個性で抹消したため、死柄木の個性は発動しなかった。

大男に捕まれ全身の骨が砕けようとも生徒を守り続ける。それが相澤 消太という教師であり、イレイザーヘッドという名のヒーローである。

だが圧倒的な力の前では無意味だった。

再び頭を地面に叩き付けられ、手放し掛けていた意識が完全に飛んだ。死柄木の個性も戻り、再度、蛙吹が危機に晒される。

先ほど自分たちが相手にしていたチンピラとは違う。

それでもこの場の全員を助けるには、一瞬でも隙をつき、イレイザーヘッドを抱えて逃げなければならない。

「手っ…放せえ!!?」

まだ制御できないそのオーバーパワーを振りかざす緑谷。狙いは

死柄木 弔。

その派手な力とは対照的に、緑谷は制御できるように強く意識する。

電子レンジに入れた卵が割れないように…地味なイメージだが少しずつ。

(割れない、割れない、割れない！)

「…脳無」

「スマッシュ!!?」

緑谷が突き出した拳が風圧を発生させる。

その拳は力強く前へと突き出されたが、前のように腕が壊れるような事はなかった。力の制御がうまくいった証拠である。

「え……」

制御したという事は、手加減したということ。

死柄木の命令に反応したのか、脳が剥き出しの大男が緑谷の拳を平然と受け止めていた。

どうやらこの大男は脳無と言らしい。

「良い動きするなあ…スマッシュってオールマイトのフォローかい？」

レーザーヘッドを掴む手とは逆の手で、脳無は緑谷の腕を掴む。

大人の腕を小枝のようにヘシ折るほどの怪力だ。並大抵の力では振りほどけず蛙吹も舌を伸ばして助けようするが、緑谷の身体に巻き付いただけで引き剥がす力は彼女にはない。

さらにそんな彼女に死柄木は掌を近づける。

「おどれらあああ!!?…!!?」

そこに聞こえたのは少女の咆哮。

そして飛んできたのは……尾白 猿夫だった。

「カハッ………ッ!!?」

「尾白白オオオオ!!?」

文字通り飛んできた尾白は回転し、遠心力を加えた尻尾を死柄木の鳩尾に打ち付ける。

その登場に峰田は泣いて喜ぶが、緑谷は先に聞こえた咆哮の方に目

を向けた。

「よっちゃん!!?」

「十升モード!!?」

強化された夜々の拳が脳無の顎を打ち上げる。

脳が揺れたのか、脳無は両手を開いた。即座に夜々はイレイザーヘッドを抱き抱えて距離を取り、緑谷は蛙吹が伸ばし巻きつけていた舌で回収しされた。

「尾白オオ!!?酒井イ!!?オイラもうダメかとおぼであああ!!?」

「落ち着きい。あと汚い」

抱きつこうとする峰田を、夜々は両手がイレイザーで塞がっているので足で押さえる。

「みんな逃げえ。うちが時間稼ぐ」

「酒井! なにバカなこと言ってるんだ!」

イレイザーヘッドを尾白に手渡すと、尾白からそう咎められる。

「尾白ちゃんの言う通り、ダメよ夜々ちゃん。その脳無っていう敵サイラン…聞か限りオールマイトを倒すための切り札みたいよ」

「なら尚更のこと……逆サイランに聞くけど、オールマイト級の敵から逃げる思うてるん?」

「それは……」

「でもよっちゃん「でもやあらへん!!?」…ツ!!?」

夜々の渴にたじろぐクラスメイト。

「最近の子供って凄いな。恥ずかしくなってくるぜ……脳無、邪魔した鬼女と尻尾のガキを殺せ」

「俺もか……マジかよ」

「早よ行けツ!!?」

脳無が命令に従い動き出す前に、夜々は叫びながら鬼砲を脳無に放つ。

極太のレーザーは脳無を飲み込んで尚、その後ろへと真っ直ぐに伸びる。しかしそのレーザーの中に立つ大柄な影は身じろぎ一つしなかった。

「ツ……行こうみんな!」

「おい緑谷!?!?」

「庇いながら戦うのは無理だ。僕らはイレイザーヘッドを安全な場所に……………」

「黒霧!・ 逃すな!!?!?」

背を向け走り出した緑谷たちを見て、死柄木が黒霧に指示をする。

すぐさまワープホールを作り捕らえようとする黒霧だが、彼の上に爆発物が落ちてくる。

「死いねええええ!!?!?!?!?」

—— Boom!?!?!? ——

「グウツ?!?!?」

爆風に怯んだ黒霧は、落ちてきた少年に組み伏される。その手は小さく爆破しており、脅しに十分な音と光を発していた。

「ケロツ?!?!? あれは爆豪ちゃん?!?!?」

「行こう!!?!?」

爆豪の登場に驚く一同だが、緑谷の言葉で再び走り始めた。

「”危ない” つつた時に見抜いてんだよ!!?!? 実体が無かったら”危ない” つつう発想自体ねえはずだからなア!!?!?」

「あ——、クソ…:何テメエまでやられてんだよ黒霧い!」

「勝己!・ 手エ触れんな!!?!?」

「わあつてるよ!!?!?」

爆豪に伸ばした死柄木の手を警戒し、掌を向けて爆破し近づけさせない。

「チツ、脳無!!?!? 先に爆発小僧を…:」

「させるかさすかツ!!?!?」

夜々の拳は脳無の腹部に突き刺さる。しかし、脳無はピクリとも動かない。

「ツ?!?!?」

「ハハッ…:脳無は対オールマイト用に作られた先生の最高傑作だ。増強系個性にショック吸収と超再生能力…:…:その程度のパンチじやどうにもなんねえよ。脳無、やっぱその女を先にやれ」

頭部くらい包めるサイズの拳が夜々の身体を殴り抜く。

抵抗もできず、夜々は宙を舞い壁面に突っ込んだ。

「酒井ツ!!??…チツ」

一瞬気をそらしてしまった爆豪の隙をつき、死柄木が攻撃を仕掛け黒霧は脱出する。

「お手数お掛けしました。死柄木 弔」

「これ以上へマすんなよ。やれ、脳無」

脳無は爆豪に向けて豪腕を振り上げるが、今度はその腕が凍りつく。ただ怪力の所為もあって、凍りついた腕は一瞬の硬直の後に問題なく振り下ろされた。

「ああ…ああー。何だよ次から次と……………」

「テメエ。半分野郎ツ！」

脳無の足元から氷の道が伸びていた。それに触れてから足を伝い腕が凍ったのだ。その道を辿った先には轟の姿があった。

個性は半冷半熱…この氷の道もそうだし、相手を凍らせたのも彼の個性だ。

「大丈夫か。爆豪」

「ぎっけんな!!? 余裕だわ!!?」

今にも噛みつきそうな形相で怒鳴る爆豪と、澄ました表情でたった今登場した轟は敵と向き合う。

「途中で緑谷たちと会った。誰か外に出たらしい……………応援が来るまで 耐えるぞ」

「俺に指図すんな、クソガツ!!?」

次々と入る妨害に死柄木は苛立っていたが、深呼吸を挟んで切り替える。そして笑う。

「ホント凄いな。まるで小さなヒーローだ…自分が助けるんだって本気で思ってやがる。本気で脳無に勝てると思ってやがる……………脳無、さっさとそいつらを殺せ。雄英に消えない傷をつけろ」

自分の首筋をポリポリと掻きながら、再度脳無に指示を出す。

野心家の爆豪であったが、自分より強くなるとも轟を雑魚認定はしていない。

轟も爆豪を甘くは見えていないし、先程は砕かれたがより分厚く重ね

れば、凍らせて相手を捕縛できると考えていた。

……………だがそう上手くいくわけがない。

「ガツ!!?」

「爆豪ツ!!?」

脳無の腕が爆豪の腹を捉えかける。持ち前の反射神経で後方へ飛んで威力を軽減した爆豪だが、ダメージが消しきれてないのは見てわかる。両手を爆破させ爆速で下がったにも関わらず、肋骨にヒビは確実に入っているだろう。

轟は自分の前に個性で氷壁を築くがたつたの一撃で粉碎される。直撃は免れたが砕けた氷塊が轟を襲い吹き飛ばされる。

咄嗟に腕でガードするが、したところで腕に多大なダメージを受けるだけだった。

「ハハ……………ハハハハ!!? 忘れたか? 対オールマイイト用に作られた脳無だ。氷と爆竹でどうにかなるわけがない。当然と言えば当然か……………」

死柄木は育てたゲームのキャラを遠回しに自慢するように言った。夜々が飛ばされてからまだ3分も経っていないが、すでに二人は深手を負っている。

口には出さないがレベルが違うことを理解する。だが諦めはしない。焦った様子で打開策を考える。

ゴオオオオオ!!?

「ハハ……………ハ?」

死柄木の乾いた笑い声が途絶え、その横を赤いレーザーが通り過ぎた。地面は焼き抉れ、直撃を免れても火傷を疑う熱さだ。

「ウ……………酒井、なのか?」

轟が視線を向けた先には、先程飛ばされた夜々が居た。ただ様子がおかしかった。

足はフラつき、目は何処と無く虚ろだ。

「百升……………モード……………」

7. 鬼を垣間見る

「……………」

対オールマイトと言うから警戒したが、それでも予想していた以上の攻撃力に言葉も出ない。

(なにが”なんとかなる”や。この楽観主義者が……………)

驚愕…というよりは物理的に無理な話だった。打ち付けられた衝撃で、肺からは空気が出て行くばかり。呼吸を落ち着かせようとしていると、瓦礫に埋まった両足がろくに動かないことに気付く。オマケに十升モードは切れている。

(十升じゃまるで歯が立たん……………脳は揺れるん？ ショック吸収の上限は？ どのみちこのままやと決定打に欠ける……………なら……………)

————更なる高みへ————

夜々たち鬼の一族は、経口摂取したアルコールを力に還元する個性を持つ。

そして彼女らにはアルコール度数の高い血潮が通っている。

より自身の血を飲めば強くなる。言葉にすればわかりやすい内容に聞こえるが、言うほど簡単なことでは無い。

まず十升分のアルコールを含んだ血液を摂取した時と比べ、二十升分の血液を摂取した時…彼女はどれ程強くなるだろうか。

単純に二倍？ 否、答えは一倍……………つまり”十”も”二十”も変わらないのである。

(まだ親にや、止められてたんやけど……………)

一升から九升まで、身体能力や戦闘力は一切変化しない。桁が増える事で初めて強化されるのだ。

つまり”十”を超えるためには”百”に達しなければならない。

(時間稼ぎ…やる事自体は変わらへん……………さて、全身の血液と体重の比率ってなんやったっけ？ 昔計算したんやけど……………)

震える右手を自分の口へと運び、彼女の歯が手首に食らいついた。すると遠くで聞こえていた地鳴りのような音に気付く。

(早く…早く…………)

爆豪はまだ戦っているだろう。先程見えた氷塊は轟の個性だろう。2人が揃ってどれだけ時間が稼げる？ 脳無は別格の敵だ。時間稼ぎすら難しい。

(…早く…………早く…………)

2人の元へすぐにでも向かいたいが両足は瓦礫に捕らわれ、抜け出す力も無い。少しでも早くと自身の血を吸い上げると、身体中に巡る力を感じる。

同時にやって来るのは激しい目眩と頭痛。

力の巡る快感と負荷としてかかる頭痛が混ざり、通常では感じない嘔吐感にまで襲われた。

それが十数秒前の事だった。

「

「

「

「……………き……………お……………う」

両の足がフラつきながらも、夜々は脳無をビシツと指差す。

「死柄木 弔！ 脳無に回避の指示をッ！」

「うるせえ黒霧。脳無！ 迎え撃て！！？」

「弔ッ！」

「……………ゴオオオオオオ!!??!!?? ……」

指示するが早いか、夜々の指先から極太のレーザーが放たれる。先程までと違い、赤というよりは朱色に近いレーザー…威力は言わずもがな格段に上がり、飲み込まれた脳無の原型が若干崩れる。

レーザーはやがて通り過ぎ、そこに残ったのは大きく抉れた地面と、表面が焼け爛れて内側の肉を見せる脳無だった。

「ハハハハハ!!?? 見ろ！ そんなんじや脳無は倒れねえよ!!??」

「よく見てください、死柄木 弔！ 脳無の表面を…再生が目に見えて遅い……………いや、再生が止まっています!!??」

言われて気付く。

脳無はオールマイトを殺す為の生物兵器。No.1ヒーローを殺

すために数ある個性を持たされた生物兵器だ。数ある個性の中には
”再生系”の個性もある。

それも”超”が付くほどの高性能自己回復個性。

(それが発動しない？　すでにダメージが許容範囲を超えたか……
いや、あのビームがおかしいのか。炎症か……それともつと別の
ナニカか)

死柄木が考察する合間に、距離を詰めた夜々が脳無を殴る。

”シヨック吸収”の個性によつて、その攻撃による衝撃は皮膚下に
沈むように消えた。

しかし夜々はその手を止めない。

”シヨック無効”ではなく”シヨック吸収”なら上限があるとか、
そんな事を考えていたりはしない。

「今更そいつに物理は効かねえ!!?　下がれ!!?」

爆豪が声をかけるが、夜々は未だに止まらない。

「……………半分野郎ツ!!?」

「ああ!!?」

不審に思い飛び出した爆豪は、自分の呼び方で轟を呼ぶ。

それだけで察したのか、轟が右足を前に踏み込むと氷の道ができ
る。そしてその先にいた脳無に道が触れると、脳無は氷塊に閉じ込め
られる。

「グギツ……………!」

無論、それは一瞬だが、その間に爆豪は夜々を抱えて下がった。

肋骨がイかれて表情は歪むが、抱えていた夜々を下ろして面を向か
いあわせる。

「デメエどこ見てやがる!!?　オイ!　鬼女ツ!!?」

爆豪の呼び掛けに対し、夜々は一瞬固まってから辺りを見渡し、脳
無を見つけると爆豪を振りほどき脳無へと走り出そうとする。

「どうした酒井!　落ち着け!」

見かねた轟も声をかけて、夜々の腕を掴む。

「……………ツ……………」

「何だ?　よく聞こえねえ!」

「……………ッ！ テメエ…まさか……………」

目の前で小さな爆発を手の上で起こす。そんな爆豪の手を前にして、夜々は一瞬何が起きたか分からなそうな表情を浮かべる。今の光が爆発で起きたものだともわかっていないような。

夜々の視界は既に霞み、彼女の耳には爆豪の声も轟の声も届いていなかったのだ。

原因は百升モードに入るための失血による貧血。

今は意識か辛うじて残っているだけで、本人は気付いていないが規律が回らず会話もできていない。

「……………死柄木 弔」

「ああ……………脳無！ 鬼女を殺せ!!？」

死柄木がまた命令すれば、先程は殴られっぱなしだった脳無が夜々に迫る。

「……………!!？」

聞きたくない鈍い音と共に、またも夜々は殴り飛ばされる。

反応に遅れた爆豪は、突発的に手を向けここの一番の大爆発を引き起こした。

「クソガアアアア!!??!!??」

眩い閃光が弾け、爆熱が周囲の生物の肌を焼く。

その爆発は下から掬い上げるように放たれ、脳無もダメージこそ無いが後方へと吹き飛ばされた。

「グッ……………」

「爆豪！ もう動くな。酒井連れて逃げろ」

「ぎっけんなよ…こんなのダメージにも入らんわ!!？」

やはり折れているのか、今の爆発の衝撃に耐えきれず爆豪は腹部を押さえて膝をつく。

(今の火力をもう一度でも出せば、今度こそ爆豪が壊れる。かくいう俺もこの腕じゃ……………)

轟の個性の”冷”の方は右側から発せられる。使えないわけでは無いが、彼の右腕は脳無が砕いた氷塊の礫をくらい、おそらくだが脱臼していた。

「行け、脳無」

「止めろ!!?」

右足を踏み出し、また足元から氷の道を形成。そして脳無の前に巨大な氷壁を築く。だが案の定、脳無はいとも容易くそれを破壊する。爆豪は脳無の前に回り込もうとするが、身体が言う事を効かず思うように飛べなかった。

「逃げる!!?・夜々ツ!!?」

もはやそう叫ぶことしか出来ない。

その叫びも虚しく、脳無は跳躍……そして夜々がくたばっている瓦礫の山に突っ込んだ。

土煙が舞い上がり、脳無の足元には夜々が倒れている。

「止めろ!・止めろオオオオ!!?」

脳無が夜々の首根つこを掴み片手で持ち上げる。そして反対の腕を振り上げ、彼女に向けて突き出した。

また彼女は吹き飛ばされる。

「さかー」

唯一の違いといえば、すぐさま立ち上がった夜々が脳無に殴り返した事だろう。

渾身の一振りが脳無の顔面を捉える………といっても、正面を向いていた脳無の首が、少し左に曲がる程度だった。

「離れろツ!」

轟が築く氷壁、氷塊は何も守れず何も拘束できなかった。

「脳無!・確実に殺せ!!?」

弱くは無いが力不足なその拳で黙々と殴り続ける夜々……その頭上で、脳無は両手を組む。そしてそれをハンマーのようにそのまま振り下ろした。

ー

ー

ー

オールマイトがここにいないうえ、1人のガキが逃げ応援を呼んでいる。なら生徒を何人か殺し、雄英に傷を付けて帰ろう。

黒霧がガキを逃したと言った時はそう思った。

(アイツを見ていると虫酸が走る)

「……………死柄木 弔」

「ああ……………脳無！ 鬼女を殺せ！！？」

ターゲットを酒井とか言う鬼の女に絞る。

本来の目的とは別に、殺すべきだと思ったからだ。

理由は知らない。

脳無に数度殴られても原型をとどめて立っているのには驚いたが、アイツが痛めつけられるさまを見ているのはとても痛快だった。

「脳無！ 確実に殺せ！！？」

そう命じると、脳無は腹部を殴られながらも物ともせず手を組んだ。

そしてそれを振り下ろせば鬼女の頭部を上から捉え、アイツは勢いをそのまま受け継いで地面に叩きつけられた。

瞬間、あたりは激しい轟音と共に土煙が充満する。

「サブクエストクリア…か。帰るぞ黒霧、脳無を回収しろ」

「……………死柄木 弔」

「あ？」

帰ろうと背を向けるが黒霧は動かない。

呼び掛けられ俺はまた振り向くと、晴れかけていたがまだ土煙が舞っている。そこに立つ脳無……………の足元で俯けに倒れた鬼女が、ピクリと腕を動かした。

「おいおいマジか…頑丈すぎないか？」

確実に殺せと命じたからか、脳無は足を振り上げ踏み潰そうとする。とつくに外野になっていたガキが2人騒いでいるが、もう止まらな——

「TEXAS SMASH！！？！！？」

……………ああ、コンテニューだ…

1

夜々の頭を踏み潰そうとした脳無を、颯爽と現れた大男が拳を突き出す。しかし”シヨック吸収”の個性で威力は殺されてしまうが、彼はそこから更に力を加え、押し上げるように殴り飛ばした。

「胸騒ぎがして校長の話を切り上げて来てみれば、途中で飯田少年と会ってね。事情は聞いたよ。でも大丈夫……………」

現れた大男はサラリーマンのような服装をしていたが、その首元に巻かれたネクタイに指をかける。そしてネクタイを緩めるような動作で、結び目からソレを引きちぎった。

「私が来た」

「オールマイトツ!!?」

「気をつけてください。そいつはシヨック吸収といった物理耐性の個性を……………」

「それも知ってるよ。USJの入り口で、早口に緑谷少年が言っていたからね」

轟の言葉に軽く返ししながら、オールマイトは膝について夜々の容体を確認する。彼女の命に別状が無いのがわかると、優しくその頭を撫でてから前へ出た。

「私が相手だ……………来い、ライラン敵どもツ!!?」

堀の濃い表情で敵を睨みつけながら言えば、死柄木は嬉しそうに表情を歪めた。登場したオールマイトに食いつくように、その場で前のめりになりながら口を開いた。

「もちろんだ。なんたつてその為に来たんだからなあ!!?!!? やれ!!?!!? 脳無ツ!!? こんな世の中を作った平和の象徴をぶっ壊せツ!!?!!?」

今まで死柄木が指示を出してから脳無は動いていた。それが頭に刷り込まれていた爆豪と轟は、戦いの余波に備えて身構える。オールマイトの登場で安心こそしたが、彼の気迫で現場の緊張感が更に高まっているからだ。

だからこそ棒立ちで動かない脳無に対して、2人は呆気にとられ

た。それは相手側も同じようで、死柄木は頭にクエツションマークを浮かべながら脳無を見る。

「おい、どうした脳無！ やれツ!!?」

それでも脳無は動かない。

その様子に焦る死柄木に、隣に立っていた黒霧が耳打ちをして何かを渡す。

それは携帯電話のようで、死柄木は自分の耳にそれを当てる。個性の関係か、中指だけ浮かせて携帯を持っている。

「……………はあッ!!? 撤退つて……………どういう事だよ先生ツ!!?」

「先生?」

その言葉に反応して眉を動かすオールマイト。そして次の瞬間、脳無が何かを吐き出し始めた。それもその体積に合わない量の流動体だ。

「SHIT!!? まさかワープ系の個性かツ!!?」

咄嗟に走り出し、拳を振りかぶるオールマイト。その拳は脳無を捉えたかのように見えたが、振り抜いた拳には吐き出した流動体が少し付着してるだけでそこには何もいない。

「ゴポッ!!?」

そして同じ現象が死柄木、黒霧の身にも起きる。

「待てツ!!? 私も連れて行け!!?」

逃すまいと手を伸ばすが、奇しくもその手はまたすり抜けてしまう。

「クツ……………逃したか」

すり抜けた拳を握りしめ、ゆっくりと下に下ろして振り向く。

しかし彼は教師でありヒーローである。すぐさま生徒の安否を確認する為に動き始めた。

その後、現場に到着したヒーロー達が生徒を一ヶ所に集め点呼を取り始める。ちなみに、黒霧が逃したガキというのは飯田の事で、彼は応援に駆けつけたヒーローと共にUSJに戻ってきていた。

「みんな！ 怪我はなかったかッ!!?」

「委員チョー、こちらは平気だったよ!」

「すまないッ!!? 僕がもつと早く走らせていけば迅速に…」

「自分を責めんなよ。むしろお前のお陰で俺たち助かったんだぜ?」

集まり始めた生徒たちは、緊張感から解放されてかそんな話を話しながら息をついている。

「そうだ…よっちゃんッ!」

緑谷は彼女の名を呼び目を向けると、夜々は脳無の攻撃で地面に打ち付けられた場所にいた。まだ横になっていたところを、応援で駆けつけたヒーローの1人…プレゼントマイクがちょうど抱きかかえる所だった。

俗に言う”お姫様抱っこ”だが、夜々は意識があつたのか身動いでその腕から逃れる。

「酒井ガール! スゲエタフネスだな。だが大人しくしとけ。それとも年頃の女生徒として、流石に恥ずかしかったか?」

「……………」

無言のまま、千鳥足で歩き出す夜々。無視されたマイクはなんとも言えぬ表情を浮かべる。

「……………酒井さん?」

フラフラと歩く夜々を見て、八百万が疑問を浮かべ呼びかける。だがそれにも無反応を示す夜々は、フラフラとしていた歩みだったが次第に強く走り出す。

ヴィラン

「敵はこれで全員ですかね」

「だろうね」

(そろそろ時間か…頃合いを見て抜け出さねば……………ん?)

その先には情報交換を行っていたヒーローが2人いた。片方は最初に応援として駆けつけたオールマイトだ。

「どうかしたのかい? 酒井少ジョツ!?」

「why!?」

「……………え?」

派手な轟音をたてオールマイトが瓦礫の山へと吹っ飛ぶ。無論、その現場を見たものは啞然とし静まり返った。

「…酒井…いったい、何…を?」

耳郎が状況を飲み込めないまま、ワナワナと震えて口に出した。状況が飲み込めないのは彼女だけでは無い。しかし、間を置いていち早く理解した者もいた。

「モブ蛸にタラコ唇は消えろツ!!?」

「爆豪?」

「な、なんだよ急に……………」

咄嗟に夜々を追い掛ける為に走り出した爆豪。もちろん肋骨がすでに完治してるわけではなく、苦悶の表情が見える。

「グギギツ……………」

そして状況を把握していないが、それでもすぐに走り出した者もいた。その者は走りながら状況を再確認し、答えに辿り着いた。

「かつちゃんは何で障子くんと砂藤くん!? ツノがまだ光ってる。個性の力がまだ切れてないんだ。そういえばよつちゃんは自分の血を経口摂取して強くなる個性。あの敵を相手にする為に自分の血を吸いすぎたとしたら…貧血? 周りに無反応だった。まさか耳と目があまり機能してない。きつとオールマイトのシルエツトを脳みその敵と間違えたんだ。だからかつちゃんはガタイの大きい2人にあんな事を言ったのか」ブツブツ

「H A H A H A ……まさかこの筋肉が仇になるとはね」

(S H I T ! ! ? そこは弱いんだ!! ? それに時間が…活動限界の時間が!)

オールマイトに大きなダメージは無さそうだったが、笑顔の裏では焦りを見せていた。

そんな彼の元に夜々が辿り着く。オールマイトは彼女の大振りな一振りを半身で避けたが、それと同時に身体から煙が噴き出した。

「しまっ!!?」

夜々の追撃に身構えるオールマイト。だがその追撃は来ない。

「…H A H A ……緑谷少年の推測は当たりのようだねガハツ!!?」

そう笑いながら吐血するが、そこには筋骨隆々なN O . 1ヒーローの姿は無い。

あつたのは虚弱体質で自然と吐血する骸骨のような男がいた。

そう……それがオールマイトの本来の姿である。

「止まりなさい!!?」

そう言ったのは四角い顔をした教師だった。無論、彼も教師でありヒーロー。セメントスという名のヒーローは、夜々とオールマイトの間にコンクリートの壁を出現させる。

夜々の攻撃を防ぐには薄い気もするが、目標を見失った夜々は混乱して硬直する。そこに2人が追いついた。

「止まれツ!!? 夜々（よっちゃん）!!?」

左手に組み付き左から大声で呼び止めたのが緑谷、右手に組み付き右から大声で呼び止めたのが爆豪である。

「……………いず……………か……き……………?」

口もあまり動かさず、消えそうな声で彼女が呟く。

「もう大丈夫だから!」

「ことはとつくに終わってんだよ!!?」

「……………」

糸が切れた人形のように動かなくなり倒れると、もちろん2人はそれを支える。しかしある問題に気づき、ゆつくりとその場に寝かせた。

気絶した瞬間、2人が組み付いていた両腕が途端に柔らかくなっていた。

百升モードが切れ、強化されていた身体が元に戻ったのだろう。鋼のようだった両腕が少女相応のソレになり、その肉の下の異変に気付いたのだ。

「折れてる……多分脚も……………それを個性で強化し、筋肉だけで骨も身体も支えていたのか……………」

「オイ!!? タンカ!!?」

まだ場がどよめく中、セメントスが秘密裏にオールマイトの元へ移動する。

ちなみにオールマイトの本当の姿を世間は知らないが、教師陣は把握している。最も、緑谷 出久がオールマイトの後継者というのは誰も知らないが。

「大丈夫ですか？」

「もちろんだ。食らった時はまだ”マッスルフォーム”だったからね。だが時間だ…私はこれで……………」

「わかりました……………さあみんな。点呼を取り次第移動しますよ」

夜々によつてまた騒動が起きたが、それもすぐに収集が付き全員の生存確認が行われた。夜々の奇行に関しては緑谷が代わりに弁解し、何故そうなったのかは轟の補足もあつたが爆豪が答えた。

こうしてUSJで起きた事件は、幕を下ろす事になる。

ー

ー

ー

『どういう事か説明してくれよ。先生』

場所は変わつて、何処かもわからない暗闇の中。

1人の男がモニター越しに誰かと話していた。その誰かとは死柄木 弴で、先生と呼ばれた男は全身をチューブで繋がれた重症患者だった。

医療器具につなぐられ患者と呼んだが、ここはどうも病院ではない。

「エラーだよ」

『エラー？』

「対オールマイイト用の脳無……………私とドクターの最高傑作だったのだが、こちらでエラーを感知してね。あのままオールマイイトと戦わせても、最高のパフォーマンスは求められないだろう」

『だから強制帰還させたのかよ。何から何までダメじゃねえか』

画面の向こうにいる彼は、ゲームが思い通りにいかずに拗ねる子供のようにだった。それを見て先生と呼ばれた男は口角を吊り上げる。

「それで良いんだよ。死柄木 弴…よく言うだろう？」 失敗は成功の元”だって。沢山失敗して良いんだ。そこから学べば良い…大丈夫。その為に僕がいる」

そうあやすように告げ、男はモニターの電源を切った。

「……………で、どうだった。ドクター」

その声に応えるように姿を現したもう1人の男。その男は姿を現

してから文字通り答えた。

「ふむ。前半分の表面の焼け爛れと、打撲痕に似た焼け跡…前者はもちろん、ただの物理じゃこうはならん」

「そうか……フフフツ…そうか!」

「ツ!!? これはいかん!!? タマちゃん、部屋から薬を取ってきてくれ! パツクのやつ!」

備え付けていた医療機器がアラームを鳴らし、心電図らしき画面の線が歪に波打つ。

焦ったように誰かに命令すると、脳無の顔を取り付けた猫のような生物が暗いこの部屋から出て行った。

「すまないドクター。疼いてしまったね……コレと同じ傷か」

「ダメージは全然無かったがのう」

患者の男は自分の首筋をなぞるように撫でる。

「薬もタダじゃない。何より死柄木 弔の先生として、あまりはしやがんでくれよ? オール・フォー・ワン」

「わかっているよ……フフフ、酒井 姫の娘…そして……」

酒呑童子の子孫か

8. 鬼は成長を望む

USJ事件。

そう簡潔に事件は名付けられ、USJ中に散っていた敵はワイプで逃げた”死柄杓””黒霧””脳無”を除いて無事に捕まった。

どれもチンピラのように、最も危険視するべき3人に逃げられたのをヒーローたちは悔やんでいた。

そしてその事件に巻き込まれた1―Aの生徒たちは、大小の怪我こそしたが全員無事に生還した。

怪我人は保健室に運ばれ、リカバリーガールの個性で治癒される。唯一、夜々だけは病院に搬送するべきだと判断されたが、判断し終えた頃には失血を除いた怪我はほぼ消えていた。

それもあつて夜々は入院せずに検査だけで済んだらしい。

逆に入院した者は生徒の中にはおらず、前線で一人踏み止まっていたイレイザーヘッドと、自らの個性で自分にダメージを与えてしまった13号が入院する羽目になった。

今回の事件で最も負傷した者は間違いなくイレイザーだろう。

「……………うう〜クラクラする……………」

そして翌日。

USJ事件のこともあつて臨時休校となった今日、夜々は目覚め一番にそう呟いた。

頭に手を置き深呼吸して、その後にくっきりと身体を起こした。

そして昨日のことを思い出し、自責の念に駆られてナーバスになる。

「ああ…バーサークしてもうた。大戦犯や……………間違えてオールマイト殴るとか…」

もちろんその件に関して謝罪しようとしたが、保健室から病院に向かう前に探すも会えず終いになってしまっていた。その原因が活動限界により本来の姿トゥルーパーフォームになつていたからだと言うことを、もちろんのと夜々は知らない。

帰宅後に「謝罪したい」との旨を学校に伝えると、本人の承諾を得

てからメアドを交換したのは彼女にとって嬉しい誤算だった。

「自分だけ良い思いして良いのか」と、また自責の念を感じながら謝罪メールを送ると、逆に励ましの文と共に元気にサムズアップした自分の写真を添付して送られてきたという。

「直接あったときに、再度謝らせてもらおう…」

最後に「迷惑かもしれへんけど…」と付け足して立ち上がり、壁を支えに台所へ向かう。

貧血時にお世話になるアイテムを手取る為だ。

しかし運の悪い事にストックを切らしている事を彼女は知ることになる。

冷蔵庫を開けては膝をつき、その場で座り込んで冷蔵庫の戸を閉める。

そしてその場で仰向けに倒れた。

「ああー最悪……床気持ちー」

ヒンヤリとしたフローリングの上で、床に頬を擦りつける。

ちなみにこのアパートの間取りは、キッチンとダイニング…そして寝室として使っている畳張りの部屋だけで、トイレや洗面所は玄関へ続く廊下の途中にある。

ーピンポーンー

「……………」

あからさまに嫌な顔をしてから立ち上がり、夜々は玄関へと向かった。

扉の覗き穴で相手を確認してから、夜々は扉を開けた。

「よ、よっちゃん。具合大丈夫？」

やって来たのは幼馴染の出久だった。

「えっと…まだ貧血かとも思ってお見舞いに……………良かったらこれ」

そう言つて差し出されたビニール袋の中身は、ゼリー飲料の詰め合わせだった。大半は栄養チャージ系と鉄分補給ゼリー…それを受け取るや否や、夜々は早速一つを口に含み飲み込んだ。

「プハァー。好きー」

「へっ!? あ、いや、えっと……………」

「このゼリー飲料によくお世話になってるんよ。ただストック切らしててな。助かったわー」

「あ、好きってそういう………」

理解したのか、1人でテンパった緑谷は顔を赤くする。

「ん？ 好きって言ったのは出久に対してやで？」

「フアツ!?？」

爆発の個性を持っていないにも関わらず、ボンッ！と音を立てて更に顔を赤くする。頭からは湯気が登っている。

「はあく可愛いだよ」

「からかわないですよ、よっちゃん!!？」

子犬を眺めるような眼差しで緑谷を見つめると、彼は両手を前に出して顔を隠し、視認拒否を身体で訴える。

「とりあえずありがとなあ。茶でも飲んでき」

そのまま夜々の誘いでダイニングに上がり、軽く持て成しを受ける緑谷。するとそこでまたチャイムが鳴る。

誰だろうと思っていると、立ち上がる前に夜々のケータイが鳴る。

メールを受信したようだ。

内容は「開けろ」とだけ書かれていて、差出人は爆豪だった。

「……………出久、少しフラフラするん。友達来たから代わりに開けてくれへん？」

「わかった」

善意から笑顔でそう言った緑谷はダイニングを出て玄関に向かう。

それを悪戯っぽい笑みを浮かべて見送り、今か今かと何かを待った。

そして玄関先から爆発音が聞こえた。

ー

ー

ー

「なんでクソデクがいやがんだ!?？」

「クツ…………お、お見舞いに来て、くれたんよ…フックククツ」

「笑ってんじやねえ鬼女ツ!!？」

ダイニングに戻ってきた出久の後ろには、不機嫌な表情を隠さない爆豪が付いてきていた。前を歩く緑谷は汗をかきながら苦笑いを浮かべている。

「まあそう怒らんといてな。出久くお茶おかわり〜」

「はい……………あれ？　いつから僕は持て成す側に？」

ポットに入った茶を注ぎながら、出久は違和感に気付いた。だが一々突っかかる性格では無いので、コップに茶を最後まで注いでくれる。

ついでに食器棚からもう一つ持ってきて、緑谷は爆豪の前にそれを置いた。

「……………ズズツ」

「不機嫌な割に飲むんやな」

「うるせえ」

出久が出した茶を飲みながら、爆豪は夜々の顔を凝視する。

「まだ青いな。飯は？」

「昼？　まだやけど」

「そうじゃねえ、朝だ。ちゃんと食ったんだろうな？　食うもん食わねえと、治るもんも治らねえだろ」

夜々はあからさまに視線を逸らし、天井のシミを凝視する。

「なに目え逸らしてんだオイ」

「実は、疲れ果てて帰ったからすぐ寝て……………昨日の夜も……………」

「……………あゝ？」

「…かつちやくん。うちより鬼みたいやね〜…なんちやつて……………」

文字通りの鬼の形相に、流石の夜々も苦笑いを浮かべる。「あ、コレ本当に怒ってる」と直感したのだろう。

「…昨日の夜から何も食ってねえと？」

「あ、コレ飲んで……………食ったよ」

藁にもすがる思いで、出久か持ってきた空のゼリー飲料を指差す。

しかしそれは火に油を注ぐ行為で、爆豪の額に浮かぶ血管が切れたように見えた。

「…手洗い殺していい」

「ハイ」

上から見下すように低い声で言われ、夜々は即座に返事で返す。

そして爆豪は持つてきていたビニール袋を手にキッチンへ向かう。今更だが彼も見舞いに来た者で、袋の中には色々な食材が入っていた。

手を洗い終え戻ってきた頃には、爆豪がその食材を使って料理をしている。

「かつちゃんの手料理楽しみやわー」

「黙って座つてろ」

その時、完全に帰るタイミングを逃していた緑谷は、そろそろ帰ろうと思い始める。しかしそれを察知したのか、夜々に声をかけられる。

「……………出久って昼食べた？」

「へ？ いや、帰りの道中で適当に食べようと思ってたけど…」

「かつちゃん！ 一人前追加！」

「ハアツ!!? なんて俺がクソデクの面倒まで見なきゃなんなんだよ!!?」

「頼むわ。一人で食べるのも味気ないし、3人で食べようや〜」

面倒くさそうな表情を浮かべて押し黙る爆豪だが、諦めたように舌打ちをする。

「チツ、米はあんだらうな？」

「あ、炊いてない」

「デク！ パック米買ってこい！」

「う、うん！」

「鬼女！ 菜箸！」

「シンクの引き出しにある。一番上のところ」

「」

「」

「」

「ご馳走さまでした」

「お粗末」ボソツ

「凄いや。とつても美味しかったよ」

「あ？ んなもん聞いてねえよボケ！ 食ったんならとつとと働けツ
!!?」

爆豪の手料理を食べ終えて一息つく3人だったが、緑谷は使い終
わった食器をシンクへと運び皿洗いを始める。

「すまんなあ2人とも」

「別にいいよ。このくらい」

「ケツ……………」

笑って答える緑谷と、照れ隠しなのか頬杖をついてテレビを見る爆
豪。

緑谷は皿洗いを続け、爆豪はリモコンを手を取り勝手につける。す
ると丁度、USJ事件の事がニュースになっていた。昨日の今日だ
し、当然といえば当然だろう。

「昨日のアレ。いつもああなのか?」

顔色が比較的良くなったのを見かねて爆豪が尋ねる。察した
夜々は飲んでいた茶を置いて口を開く。

「百升モードのことか? もう少し副作用はマシやと思つとつたんや
けどな……………」

「またああなされると面倒くせえ。説明しろや」

失態を思い出し、目に見えてしよげる夜々。そんな彼女には気を遣
わず、爆豪は単刀直入に尋ねる。

「うちの個性は知つての通り”鬼人”。経口摂取したアルコールを力
に還元することなんや。その摂取するアルコールで一番適してるの
が自分の血……………副作用はもちろん失血や」

洗いながらも耳を傾け、緑谷は「やっぱり…」と1人呟く。

「百升モードは常人なら気絶するほど量の血を失うんやけど、うちら
鬼の末裔はその程度で堕ちたりせえへん……………はずなんやけど、うち
はまだ未熟やったん。本当は親にも止められてたんよ……………」

「アルコールつつつたな。法には触れねえのか?」

「個性上の問題やから触れないんやけど、疑われ検査されるたびに説
明せなあかん……………その説明を聞いてくれなければ、ウチつてアウト

なんよねえ……常に血管にアルコール度数100%超えの常識はずれが流れてん」

「ふーん」

爆豪は、聞いたいて興味なさそうに相槌をうつ。

「百升は使いもんになんのか?」

「そのうちな。オカンも使つとるし、代々伝わる個性の鍛え方も知つとる」

「そのうちじゃねえ。間に合うのか? もうすぐだろ」

「もうすぐ……?」

「あ! 体育祭!!?」

黙っていた緑谷が思い出したように声を上げる。

体育祭といえ、年に一度の学校行事。それもヒーロー科ともなれば、自分を世界に売り込むチャンスである。

現在オリンピックは、”個性”が生まれた事によって種目の記録に個人差が大きく出て衰退してしまっている。そしてあることか、ビッグネームである雄英高校の体育祭こそがオリンピックの代わりになるビッグイベントなのだ。

学校の行事と甘く見ているが、ヒーローの卵を見に数多くの現役ヒーローが見に来て、さも当然のようにテレビ中継も生でされている。

ヒーローを目指す者としては無視できない行事である。

「言つとくが、俺は十升あの動きなら対応できるぞ」

挑発的な笑みを浮かべる彼は、本気でNo.1ヒーローを目指している。

好敵手とより強い状態で戦いたい。そして自分の糧とする。そんな野心と欲望を持っているのが爆豪 勝己だ。

「上等…」

そして夜々も自分を高める為の踏み台を欲していた。性格が全く違うように見えて、2人の勝利への飢えは同格だった。

「……………」

そして彼もその飢えは負けていない。だが緑谷は自身の抱えてい

る問題が解決しておらず、まだ2人と同じ土俵には上がれてはいない。彼本人がそう自覚している。

『緑谷少年。USJで初めて個性を制御できたそうじゃないか。ハッキリ言おう。あれは全体でいう5%だ』

「5%……」

「なんやって?」

USJ事件後にオールマイトに言われた事を思い出す緑谷はふと呟き、その呟きが気になったのか夜々が話しかける。

そして彼の不安げな表情から彼女は察する。

「ははーん。個性の事やな? まだ借り物の力は制御できとらんのか?」

屋内対人訓練をした日の放課後、緑谷は秘密の一部を2人に打ち明けている。爆豪は冗談と思っっているようだが、夜々は真面目に受け入れていた。

「USJで脳無を殴った時に制御には成功したんだ。たったの5%だったけど……それが今の僕の身体が耐えられる限界らしいんだ」

「ハッ!」

耳だけ傾けて鼻で笑う爆豪に対し、夜々は親身に相談役として会話を続ける。

「じゃあ身体鍛えていけば制御できる上限を増えるんやな」

「そうなるね」

「んー、そや! 出久も来たらどうや?」

「……?」

「来たら……って、何処に?」

「オカンの実家!」

「」

「」

「」

「……相澤先生復帰早ッ!?」

臨時休校の翌日。1-Aの教壇には、包帯をグルグル巻きにされたミイラ男が立っていた。そのミイラの正体は相澤なのだが、全身を重

症を抱えて2日で仕事に戻るとは普通ではない。

それを指摘すると相澤は「婆さんの世話になった」とだけ答える。「俺の安否は良い。それよりも新たな戦いが始まろうとしている…」そんな姿になっても変わらない眼光で黙らせ、張り付く空気の中で口を開いた。

「『雄英体育祭』が迫っている」

「『クソ学校』のきたああああ!!?!!?!!」

生徒たちのテンションは上がり、まだ先の事なのに気合が入っている。もちろん全員がそうではなく、USJ事件明けなのを気にする者もいる。

そしてそれに対する相澤の返答はこうだった。

「逆だ。これで体育祭を中止にすれば、サイラン敵に屈した事になる。開催する事で雄英は盤石であることを示すつもりだ。警備も去年の5倍：何より、お前たちの最大の『チャンス』を無くす訳にはいかん」

そんな訳で雄英体育祭が問題なく行われる事を知った夜々は、ホームルームが終わってから幼馴染の元に駆け寄る。

「やるみたいやな」

「だね」

「……………おう」

もちろんその幼馴染というのは、緑谷と爆豪である。

2人に話しかけた理由はもちろん昨日話した誘いについてだ。

「予定としては週末の金曜の放課後に向かうことになる。んで、土日使ってむこうで修行するつもりや」

つまりは修行に誘ったのだ。緑谷はともかく、何故爆豪にもこの話をするのかというと、彼も夜々があの後誘ったからである。

実はあの後、テレビを見ていた爆豪が途端にソワソワし始めたのだ。それを見て笑いを堪える夜々はたつぷり焦らしてから爆豪にも修行の誘いを持ちかけたのだ。

すると……………

「行く」

……………まさかの即答に夜々は笑いを堪えられなくなり、あまりのわ

かりやすさに緑谷も思わず吹いてしまっていた。

そんな出来事が昨日あったのだ。

「じゃあ金曜の放課後に駅で……………」

「お、なんの話してんの？ 旅行？」

そこを上鳴 電気をはじめに、クラスメイトが集まってくる。

「へえー修行ね。正直酒井家の修行って気になるな」

「鬼の修行…ひとまず辛そう」

「まさに鬼門……………」

「で、2人にはちよつとコレを見てもらいたいんやけど……………」

そこで夜々はスクールバッグから1枚の紙をそれぞれに手渡す。

その紙の一番上には「当家での修行に参加する際には以下の要項を確認の上、同意の意を示すサインをお願いします」と書かれていた。

「あ？ 契約書……………」

「ひとまず読むね」

1. 負傷及び命の危険に関して、当家は一切の責任を負いません。
「いきなり重いキターーッ?!？」

「外野、五月蠅いわい」

2. 当家で行う修行内容の口外を一切禁じます。

「ヤベエ、めっちゃ気になる」

3. 当家の指示には必ず従って下さい
「え、怖っ」

4. 以上を破った際には、当家への出入り及び接触の一切を禁じます。
す。

「……………」

そして契約書の最後には、同意の意を示すサインの記入欄がある。

「やめとけよ緑谷ー、オイラ怖えよ」

「爆豪もよしとけよ。酒井には悪いけど、かなり怪しいぞ」

「私むしろ俄然気になるなく。行っちゃダメ？」

「俺も行ってえ」

「あーうるさいうるさい。悪いんやけどこれは、うちが2人に誘った事や。まずはコツチの話を終わらせてからにしとくれ！」

そう言ってから2人に視線を向け改めて尋ねる。

「命云々は多分爺さんの茶目つ気や。せやけどどうする？ 来る来ないは自由やで？」

「……………参加すりや確実に強くなれんだな？」

「そりや勿論。うちの爺さんと婆さんの手腕を舐めちやあかんよ」
「……………」

静まり返った教室で、関係ない者たちも2人の返事を待つ。

そして2人は少しの静寂ののちに、自分の名前を記入した。

「上等」

「」

「」

「」

「夜々ちやーん。私も行きたい行きたい！」

「すまんな芦戸はん。定員オーバーや」

「それはそうとコレは……………どうするか」

「早く帰って自主練したいんだけど……………」

時は流れ放課後。

「なんでこんなおるん？」

「すっかり有名になっちゃったね！」

面倒くさそうな夜々と楽しそうに笑う芦戸…その多帰ろうとする1-Aメンバーの前には教室の入り口があり、そこは他のクラスの者達で溢れかえっていた。

集まった人達の皆が皆、教室の中を覗き込んでいる。

体育祭の敵情視察か、USJ事件を乗り越えた者たちを見に来たのか、理由は不明だが全員が興味を持って見てるのは確かだ。

「意味ねえ事してねえでどげやモブ共!!？」

「流石かつちゃん。そこに痺れん憧れん」

見物客たちに怒号を浴びせる爆豪の肩を叩く夜々だが、爆豪は気にせず続ける。その結果、余計な敵を作ってしまうのは必然的だった。

「随分と偉そうだな…ヒーロー科はみんなこんな奴なのか？ 正直、幻滅だな」

気怠そうな1人の男子生徒がそう言って立ち塞がる。爆豪もそれに気に入らなそうに睨み付け、両者共に道を譲ろうとしない。

「……知ってるか？ ヒーロー科落ちた奴の中には、そのまま俺みたいに普通科に行った奴がいるんだ。けど、今度の体育祭のリザルト次第ではヒーロー科への『編入』が可能なんだ」

それは遠回しに「お前たちを引き摺り下ろして俺が這い上がる」と言っているようだった。

「はあ………出久、途中まで帰ろ」

ただ早く帰りたいただけの夜々は、爆豪を止めるのを諦めて帰ろうとする。

「そっちは敵情視察だと思ってるかもしれないけど……俺は足下掬われるぞって……『宣戦布告』で来たつもりだ」

「ハッ！ 意味ねえ事してねえで『モブ』はモブらしくしてろ!!?」

そんな口論に背中を向けていると……

「ちよつとまてえ!!? 隣のB組のもんだけだよお!!? さっきのモブ発言きいてたぞお!!? 偉く調子に乗ってんじゃねえか!!?」

「お………」

人の隙間を縫って出ようとした夜々の正面から、そう言って男子生徒が勢いよくやってくる。聞いたところ隣のクラスの生徒らしいが、彼が勢いよくくる事で人混みが動き、夜々は1-Aの方に押し戻される。

「帰して〜」

人混みに流されながら助けを求める夜々だが、下駄箱に着くまで10分かかったという。

靴を履き替えるその姿は若干やつれ、先ほどよりも疲れが見える。隣にいる緑谷に愚痴り、緑谷がそれをなだめていた。そしていつのまにか爆豪がいて、自然と一緒に帰路に着いた。

「……………」

そんな彼らの背中を盗み見る影が一つあった。

雄英の学生服を着ているが背中に穴が空いており、その穴からは鴉のような黒い翼が生えている。

「……………」ギリッ

機嫌は悪そうだが仲睦まじく帰るその姿を見て、翼を携えた男は齒をくいしばり恨めしそうに睨みつけていた。

修行編

9. 少年少女の強化合宿（前編）

あれから数日が経ち金曜を迎えた。

勉強のほか、USJ事件で行えなかった災害救助訓練もここ数日で行い、スケジュール的な遅れを取り戻した頃だ。

「ホームルームは以上だ。体育祭ももう間近だ。それぞれ土日をも有効活用するように……それと緑谷、前に焦れと言ったが程々にな。体育祭前に身体を壊しちや元も子もない。爆豪と酒井もな」

そう言つて相澤はホームルームを終わらせ、一部の生徒をチラツと見る。

それは夜々と緑谷、爆豪の3人だ。

彼らはいつも持っているスクールバッグとは別に、デカイバッグやキャリアバッグを机の横に置いている。

「起立ッ！ 礼!!？」

委員長である飯田の号令でゾロゾロと帰り始めるクラスメイトたち。中にはすぐに帰らず駄弁る生徒もいる。

「ほな相澤はん。また来週」

「ああ…先生と呼べ」

一声かけてから教室を出る夜々。それを追いかけるように緑谷と爆豪も荷物を持って教室を出ていった。

「……………いいな。女子と合宿」

誰とは言わないが、とあるクラスメイトがそう呟いた。

1

1

1

0分。 雄英高校の最寄駅から電車で1時間、乗り換え2回。更にバスで1

言うほど遠くでは無いが近くもない。しかし周囲の街並みは変わり、多少田舎臭くなっていた。

まだ5月と言うこともあり、目的地に着いた頃はまだ日も高い。そんな事を考えている夜々とは別に、緑谷と爆豪は目の前に佇む巨大な門と扉を見上げる。

「なんだこれ」

高さは5m弱の両開きの扉で見るからに重そうな鉄製。その扉を携えた門の左右には、同じ高さの扉が並んでおり終わりが見えない。「この山は爺さんの私有地なんよ。この扉はその山を一周しちよるんで入り口であるこの大扉は片方で500kg、合わせて1tある」
そう言いながら夜々は、両手でそれを押しあける。

「どれだけ筋肉があっても、かつての人の骨が耐えられる重さって500kgいかないらしいんよ。怪力系の個性なら開けれる扉ってわけやな」

開ききつた扉を確認し3人は門を潜った。すると扉は自動で閉まる。

「なるほど…ほんの少し内側に傾けて取り付けた扉なんだね。ゆっくりだけど自動で閉じる……………」

「……………」

門に振り向き緑谷が言うのに対し、爆豪は門の中の光景をまじまじと見る。

門の先にあつたのは石畳で舗装された道が伸びているだけで、それ以外はただの山奥と変わらない。

「爺さん婆さんの家は中腹あたりにあるで」

そう言いながら足を進める夜々に着いて行く2人。

緑谷は落ち着きなく周囲を見回している。ただの登山と錯覚してしまい、ここに人が住んでいるのかも怪しく思う。

「わっ！」

「つてえな！ 前見て歩けやツ!!?」

「ご、ごめんかつちゃん!!?」

先頭の夜々が立ち止まり爆豪も止まる。よそ見をしていた緑谷は、そんな爆豪にぶつかってしまったようだ。

「……………鳥居?」

まだ家らしき物は見えないが、変わりに神社などでよく見る鳥居が途中にあった。そしてその鳥居の影から1人の女性が現れる。

「鳥居の下だけ石畳の道が細くなっているだろ？ 神が通るべき道の真ん中にだけ石畳が敷かれてるのは、うちの鬼は神にも恐れないうって意味がある」

そんな説明をしながら現れたのは、夜々と同じポニーテールの女性だった。

ただ髪は夜々より長く腰まで届き、上はサラシで下はデニムパンツ：オマケにヘソにはヘソピアス、口にはタバコという不良のような服装をしていた。

見た感じ歳は20代前半くらいで目付きは悪く、よく見ればポニーテールを結んでいるのは紐ではなく十字架のついた鎖だ。

「ただいまー！ーッ！」

そんな彼女に恐れもせずに夜々は抱き着く。

女性の目付きは悪いままだが、口元だけ緩めて頭にポンポンと手を置く。

「おおおお、オレが見ねえ間にまたデカくなったか？ それはそれとして、テメエらが緑谷 出久に爆豪 勝己だな？」

夜々に対する興味もそこそこに、女性は男子2人に目を向ける。

「は、はい。えつと……アナタは？」

「月華^{げっか}だ。コイツの出迎えに来た」

「ハッ！ 俺たちはお呼びじゃねえってか？」

夜々を指差す月華に、爆豪は鼻で笑って挑発的な笑みを浮かべる。

「頼まれたのは出迎えだけだ。夜々、先行きな」

「うい」

後ろで起こりうる事には気にもとめず、夜々は1人先へと進んだ。

「そつちのガキ、お呼びじゃねえつつたな。ぶつちやけその通りだ。他所のガキの面倒まで見るなんざ、冗談ったらありやしねえ」

「そ、そんな……」

「……だが、夜々の頼みでもある。だからチャンスくらいはくれてやるよ」

数歩歩いて鳥居の真ん中に立ち塞がる月華は、ストレッチを行い手足を軽くほぐす。

「オレを出し抜いて鳥居を潜ってみろ。それが出来たら、テメエらの滞在を許可してやるよ。逆にテメエらがもし、山の入り口にあるあの門を潜って外へ出たら二度とここへ来ることは許さねえ。いいな？」

最後にグツと腕を伸ばしてストレッチを終わらせた月華。その前には荷物を降ろして、すでに戦闘態勢に入った2人がいる。

学生服は脱ぎ、下に着ていたジャージ姿になっていた。

「上等だボケエ!!？」

「お、お願いします!!？」

「ふん……………威勢は良し。来な」

指をクイクイと曲げて挑発する月華に、爆豪が早速仕掛ける。

「先行くぞデクツ!!？」

「ちよっ、かつちゃん！」

月華の手の届かない範囲から、彼女目掛けて爆破して様子を見る。

それに合わせて月華は足を振り上げると、爆破は蹴りで起きた風で相殺されたように見えた。

「グツ……………」

怯んだ爆豪の顔の所々には小石が刺さり、僅かに血が流れていた。

「想定外の事に怯んでる場合か？」

月華の手には髪を止めていた鎖が握られ、爆豪に向けて鞭のように振るう。

それは爆豪の腕に巻き付き引き寄せ、タイミングを合わせて蹴り飛ばされた。

「次」

「ウオオオオ!!？」

(割れない…割れない…割れないッ!!?)

すでに5%の力を振る事自体は、そこまで苦じゃないようで無事に拳を突き出せた。しかし側面から素手で逸らされ、そのまま掴み身を翻して宙に放られる。そして身動きのできないその身体を、鎖の先端が捉えた。

腹部を強く打ち付けられ、爆豪と同じように吹き飛ばされる。

「次！」

「」

「」

「」

「次……」

飛びかかる爆豪の首に鎖が巻き付き締め上げられる。そして意識が飛ぶ寸前に緩められ、またもや蹴り飛ばされる。

「いい加減、そろそろ2人して掛かってきたらどうだ？」

「……………」

今は日が傾き、周辺の景色が橙色に染まる頃だった。

何度も吹き飛ばされた2人は全身土まみれでボロボロ。対して月華は多少疲れが見え始めた程度でダメージは無い。

「クソがああああ!!？」

「ふむ……………」

連続した爆発で上下左右にフェイントを入れ距離を詰める爆豪。

(フェイントに注意して目を凝らしたが、爆発のフラッシュがそれを許さない。才能はあり、動きも良くなってきてる)

心の中では感心しているが、寸分狂わぬ鎖の先端が爆豪の頬を打ち抜く。そしてまた蹴り飛ばされ、爆豪は地面を転がり更に土色へと近づく。

(それに比べてそっちは……………)

「やっぱり月華さんは攻撃を見てないんだけどそれならどうやって対処してるんだ恐らく目以外で状況を判断する機関があるはずなんだたとえば異形系の蛇ならピット器官だけどそれならかつちゃんの爆発が反応するからそれはない他に特殊な目を持った生物といえればイルカとかかな姿からしてその線は無いし…」ブツブツ

ブツブツと自分の世界で憶測を立て続ける緑谷に、月華は軽く引いていた。

「となるとやっぱり伝承にある吸血鬼とかそっちの類いかなそれなら超人的な五感があってもおかしくないし鳥居の影から出ないのも納

得いく」ブツブツ

「ッ！」

(マジか。それらしい攻撃はしてないのにそこに気付くか……………上手くやってたつもりだったんだが)

「きつと夜になったら影から出て反撃してくる敗北条件を聞いて勘違いしてたけど日が沈むまでが実質タイムリミットか」ブツブツ

「……………ツチ！ いつまでブツブツやってんだ!!？ 変われツ!!？」

「わっ！ や、やめ……………」

爆豪は軽く緑谷を蹴飛ばしながら交代を宣言する。

「……………耳貸せ」

「えっ？」

2人はその場でしやがみこむ。

(あん？ オレの前で作戦会議か？)

緑谷の推測通り、月華の五感は優れている。その作戦会議も集中すれば彼女に聞こえてしまう。

だが正直な話、月華はすでに2人の事を多少評価しており通していると思っていた。

(せっかくだ。聴覚塞いで作戦は聞かねえでおこう)

多少の期待を胸に、月華は作戦会議を許し動き出すのを待った。

そして……………

「……………会議は終わったのか？」

「はい。行きますー！」

突っ込んでくる緑谷とその後ろで立っている爆豪。

もしかせずとも協力だろう。緑谷が突っ込み、爆豪が不意打ち。月華は両者を警戒しながら構える。

そして手始めに鎖を振るい、緑谷の脚を狙う。

「スマアアアツシユ!!？」

脚に巻きついた鎖に拳を振り下ろす。すると小気味良い音を立てて鎖が割れる。

「おー！」

(脆くなってた…いや、脆くした……………か)

「ずっと割れなかったのに……かつちゃんの言う通りだ」

初撃を防いだ緑谷は更に距離を詰める。

月華は短くなつた鎖を振るうが、多少精度と威力が落ちていた。逆に言えば落ちてこれだけの威力と精度があると、緑谷は気を引き締め直す。

「スマアアアツシユ!!?」

「……………はあ」

緑谷の拳を月華は左手のガードで防ぎ、鎖を握つたままの右手を振り上げる。

「この程度で動揺すると思つたのか? それに……………」

振り下ろした右腕に握られていた鎖の先端が、緑谷の背後にいた爆豪を捉える。肩を打たれ、両手から放つた爆発はどちらも月華の左右に逸れる。

「不意打ちになつてない」

(所詮はまだ子供か……………)

最後に少し落胆してから月華は緑谷を突き飛ばした。

突き飛ばされた緑谷は、肩を抑える爆豪の前に倒れる。

「……………ふう。安心しろ、特別に通してやる。見込みが無いわけじゃねえからな」

月華がそう言つて背を向けようとしたその時……………

「待てやゴラ……………」

愛想悪く爆豪が呼び止める。

「まだ終わつてねえだろ」

「あ? 通してやるつつつてんだ。無駄に強がんな」

(鎖千切れたと油断して目測見誤つたくせに……………あ?)

そこで違和感に気付く。

出会つてまだ間もないが、爆豪が鎖の射程を見誤るとは思えなかつた。なら何故? 何か間合いに入る必要があつたからだ。

「かつちゃんの言う通り……………まだ終わつてません……………気を抜かないで下さい」

ギイ……………

不意に聞こえた軋む音で月華は我にかえり、まさかと思った時には手遅れだった。

「テメエらー!」

———ズウン———

重い音を立てて倒れたのは鳥居だった。

鳥居は爆豪と緑谷の居る方へと倒れていた。しかし鳥居のすぐ前にいた事が功を奏し、鳥居は2人の頭上を通って倒れたのだ。

見方を変えれば潜ったと言っているのかもしれない。

(最後の爆発はオレじゃなく鼻から鳥居の柱を狙ったつつうわけか。そりやそうだ。オレが打ったのは左肩だけだもんな。鎖の破壊したのも当たる前提の弱体化目的だな)

月華は顔色を変え、男子高校生2人に目を向ける。

「クク…クククツ……………アツハツハツハツハ!!? 気に入った!!? 鳥居をブチ倒す神をも恐れぬその所業!!? 良いぜ!!? このオレ…酒呑しゅてん月華げっかがテメエを大歓迎してやる!!?」

嬉々と笑い、彼女は向け両手を広げて仰け反る。歓迎を身体で体現してつものりのようなのだが、その姿は悪党の高笑いのそれだ。

「や、やった!」

「……………チツ」

だが爆豪の顔は晴れない。

月華に勝てないと踏んで、緑谷と策を講じたのだ。勝てたとして面白いわけがない。

だが同時に新たな目標が目の前に現れ、爆豪の闘志が更に燃え上がった。

—

——

———

「まだやるかー、まだやるかー……………お!」

鳥居から更に10分歩くと、ようやく人が住めそうなデカイ屋敷に

つく。その玄関の前で、夜々は右往左往していた。

そこへ土まみれのジャージを着た2人の幼馴染がやってくる。

「やっときたー！ー！ 遅いから2人とも追い返されたと思ったやんか！」

「るっせえ」

「ゴメン、おまたせ」

「夜々、いいダチ持つてんじやねえか」

「せやろ？ 婆さんの鎖砕かれてんやん。割とマジやった？」

（婆さん……え!!? 月華さんつてよっちゃんのお祖母さん!!?）

（母親が酒姫だ。もう驚かねえ）

「おいガキども。今オレに失礼な事言った。もしくは思わなかったか？」

「い、いえ別に!!?」

「……………」

月華に凄まれ緑谷はビビリ、爆豪は面倒くさそうだと無視した。

「フン……………ひとまず汚ねえ。風呂入ってこい」

月華にそう言われ、男子2人は泊まる部屋に荷物を置き、夜々の案内で風呂場へ向かった。

「うわぁ……………」

「無駄に広え」

服を脱ぎ風呂場へのドアを潜ると、そこは温泉と間違える広さの露天風呂があった。

洗い場は4つ。そして板でできた1枚の高い壁があり、反対側からこちらと同じように湯気が微かに登っている。

つまり隣は女湯…男女を分けるだけのスペースがあるのだ。ならやはり温泉といって問題ないだろう。

2人は先に土まみれの身体を入念に洗ってから、露天風呂の湯に浸かった。

（気持ちいい……………あ、かつちゃんは凄く嫌な顔してる）

幼い頃は同じ風呂に入った事もある。しかし今となっては話は別だ。

ふと視線に入った爆豪を見て、緑谷は目を逸らして距離を取る。

「……………おいデク」

「ヒヤッ！ な、何？」

「キメエ声出すな」

「ご、ごめん……………」

「……………」

「……………えっと……………それで何？」

黙る爆豪に違和感を覚え、乗り気じゃないが勇気を出してもう一度聞く。

すると爆豪はポツリと呟いた。

「……………受け身」

「……………へ？」

「…クソ下手になってんぞ」

「あ……………」

ー

ー

ー

それは中学時代の話だ。

当時は1年だった幼馴染2人だが、2人は全く異なる人種だった。

片方は強固性に恵まれた才能マン。もう片方は無個性のヒーローオタクだ。2人の共通点はヒーローを目指している事だけ。

その道のりは誰が通るにしても険しいが、緑谷に限っては道すら伸びてない。ヒーローの一番の武器はその”個性”なのだから当然だ。

彼が目指す夢の道中にあるのは、深い絶壁の崖しかなかった。

「では今日は将来の夢について……………」

中学生活が始まって間もない頃…授業の一環で将来の夢を語る機会があった。

無論、2人は”ヒーロー”と言った。片方は応援され、片方はバカにされた。

2人の関係が変わったのはその日の帰り道だ。

「デク」

「…かつちゃん？ 何か用？」

小学生生活の中、いつのまにか疎遠になっていた2人。話す機会があるとするれば、虐める側と虐められる側だった。

「マジでヒーロー目指してんのか？」

「ッ……………」

言葉が詰まった。かつての虐められた記憶が蘇る。

「無個性でノロマで大した長所もねえヒーローオタクが、ヒーローになれるわけねえだろ」

「…わ……………わかんない…じゃないか。前例が無いだけで……………僕も…ヒーローに……………」

恐る恐る彼の表情を見る。

「……………」

そこにあつたのは表情は“怒り”では無い“侮蔑”でも“失笑”でもない。

真顔だった。

いたって真剣な表情で、緑谷を真つ直ぐと見返していた。

「……………来い」

ぶつきらぼうにそう言われて付いていった先は、小さい頃によく遊んだ裏山だった。

そこにつくなり、爆豪はわかりやすい大振りのパンチを繰り出す。

「わわっ!!?」

スピードもそこまで早くは無いが、急な事で尻餅をつく。

それに追い打ちをするように蹴りを放つが、眼前で寸止めされる。

「個性もねえ。力もねえ。だったらせめて、倒れない程度の技術は身につけるや」

「……………へ？」

この日からだ。彼らの奇妙な師弟関係が築かれたのは。

そしてオールマイトとの出会いにより、この関係が壊れたのは翌々年の話。爆豪との仲が酷く変わったのも、中学2年の終わり頃からの話だった。

――
――

(かっちゃんには僕が裏切ったとか思ってるんだろうな。オールマイトの事は言えないし、かっちゃんの好意を蔑ろにする形になったんだ………当然か)

思い出した後ろめたさからか、緑谷は湯に深く浸かる。

「ゴメン」

「…二度と教えねえ」

「……………ゴメン」

2人の間に気まずい空気が流れる。

「二人共、湯加減はどうじゃ?」

そこに老人の声が聞こえる。

低く老いた声だが張りのある渋い声だ。

「あ、はい。気持ちいいです」

「そうか…ならワシも、自己紹介を兼ね入るかろう」

ガララとスライドドアが開く音が聞こえる。

湯気で見えないが、おそらく夜々の祖父が入って来たのだろう。

祖母の月華がああ容姿だ。

2人はもう驚かないと心に余裕を持たせながら老人を待った。

「……………」

やがて湯気にシルエットが浮かび上がる。

身長は2mを超え、肩幅や身体つきが凄く横にもデカイ。全体的に

オールマイトのふた回りほどデカかった。

「失礼する」

「……………鬼だ」

爆豪が呟くのも無理はない。

湯気の中から現れるその姿は、山奥から人里に降りて来た鬼を彷彿とさせる。彼は鬼なのだからなんの間違いもないが……………

そして緑谷は夜々がオールマイトを見て言った「画風ならうちの爺さんも負けてへんよ」という言葉を思い出す。そして「そうだね」と思った。

10. 少年少女の強化合宿（中編）

ー　ヂャラン　ー

軽く持ち上げただけで重量のある音を立てる鎖。

それを手にしている月華は、反対の手で鎖を順番に撫でていく。やがて繫げられた一本の鎖の一番端でその手は止まる。

そこから先は無く、代わりに黒く焼け焦げた跡と強い力で砕かれた形跡があった。

「デザインが気に入ってたんだが、やはり脆いか…ふん。今日は、昨日とは違うオシヤレ用を着けるか」

月華は壊れている鎖を床に放り、壁にいくつも掛けてある鎖のうち一本を手にとった。

そしてそれを片手に部屋を出て廊下を歩く。

「……………」

現在時刻は午前4時。

空は青くなり始めているが、太陽はまだ顔を出していない時間帯。

中庭に面した廊下を歩き、ある部屋の前で足を止めて襖を開ける。

その部屋の中では、3人の高校生が布団を敷いて眠りこけていた。

「おおおお、グッスリくたばってるじゃねえか。まだ寝かせてやりた
い気もあるが……………」

月華は先程選んだ鎖で自分の髪を纏めてポニーテールにする。

そして一言「よし」と呟くと、肺いっぱい空気を吸い込んだ。

「起きなガキども!!?朝食の時間だ!!?」

「ツ!?」

「ひゃわっ!!?」

「んあ……………」

爆豪は肩をビクツと震わせ、緑谷は声を上げて跳ね起きる。

そして夜々は鬱陶しそうにゆっくりと上半身を起こした。

「婆さん……………あと10分」

「ダメだ待てねえ。ここの朝が早いのは百の承知だろ!?5分後には
席に着け」

仕方なく夜々は這いずるように布団から出る。

爆豪はデカイ欠伸をしながら立ち上がり、緑谷も眠気を堪えて布団から出た。

「」

「」

「」

夜々を先頭に朝食の席に着くと、少し遅れて月華が朝食を運んできた。

白米に味噌汁、焼き魚。よくある日本の朝食セットである。

「うまうま」

「夜々は相変わらず食うな。男どもも足りなかつたら言え」

「あ、ありがとうございます」

「…うす」

そこへ、こここの家主である夜々の祖父がやってくる。

襖を開けた時点では顔が見えず、襖のハマっている枠をしゃがんで潜り入室する。

一欠片の笑みのない彫りの深い顔…その顔の額からは二本の角が生えている。緑谷と爆豪が並んで座って比べても、この老人の方が横幅があつた。

彼の名は酒呑 童子。夜々の祖父である。

「おはよう」

「おはようございませす！」

「……………」ペコリ

「爺さんおはよー」

腰を下ろしただけでも床を通して振動が伝わってきた。

「よっちゃん」ヒソヒソ

「なんや？」

「その……………酒呑 童子って……………あの」

「気になるか。出いの字」

夜々に耳打ちしたにも関わらず、本人が口を開き目を向ける。

本人は怒っているつもりなどないが、初見の緑谷には少々怖いらし

く目を逸らしてしまう。

「酒呑 童子：それはワシの名で間違いないが、想像している酒呑童子とは別人……………夜々と同じ、末裔の1人じゃ」

「は、はあ……………」

「真偽は不明だが、鬼の強さは角で決まると言われていた。ワシの前の代：ワシの父も祖父もその前も一本角でな。4代目ぶりに産まれた二本角のワシを当時は神童と呼んでおったのじゃ」

「それで…童子の名が……………」

「そういう事だ」

「なるほど……………」

「……………」

「……………」

「爺さんわりと話すの好きなんやけど、なんか話が盛り上がらないよね」

「静かな気まずい空気になったのを見計らって夜々がそう言うと、表情は変えなかったが心なしか童子はシユンと肩を落とした。

「緑谷は「そうなんだ」とも言えず早く食べ終わる事に専念し、朝食の場はとても静かなものとなった。」

「

「

「

朝食が済むと全員は表へ出た。

まだ日は顔を見せず、空は色付くが辺りは暗い。

「では早速修行に入るが、夜々と小僧どもは別メニューだ」

「2人とも気張れや……………そや、出久」

夜々は改まった様子で出久に話しかける。

「忘れがちやけど、ウチらは全身全霊で生きとるんよ」

「……………？ うん。そうだね？」

「婆さん。そっちは頼む」

「そう言うや否や、童子は夜々を連れて山奥へと歩き出す。

「おおおお。じゃ、まずガキども。コレに着替えな」

月華は2人に白い服を投げつける。2人はそれを自然と取ろうとしたが、想像以上の重量によるめく。

「おも…コレは?」

「上下20kgの道着だ。着方はわかるか? ひとまず下着以外を脱いで、それを上下身に付けろ」

驚く間もくれず、月華の指示で2人はそれを身につける。

「その服は一部の修行と入浴時以外はもう脱ぐな」

「まじか」

「じゃ、早速ウォーミングアップから始めるか」

すると月華は昨日のように、軽く自分の身体をほぐす。

「で、なにやんだ?」

「よし。5分やる。逃げろ」

「は?」

質問し、返答を聞き、疑問を口にする爆豪。

それを聞き、面倒くさそうに月華が補足する。

「今から日が昇るまで、テメエらはオレから逃げろ。屋内で無ければ、この山のどこを逃げてもいい」

「ようは鬼ごっこだ。」

違いと言えば2人は重りを付け、相手は暗闇の中で真価を発揮する吸血鬼である。逃げ切れない前提の鬼ごっこ。

こんなベタな展開はコミックの中だけだと、緑谷は思っていた。

「おら。さっさと逃げな。もう1分経ったぞ」

ー

ー

ー

「アアアアアア!!?」

「クソガアアアア!!?」

「ま、当然の結果か」

酒呑老夫婦が住む家とは反対側にある山の中腹。そこには10mほどの高さの滝と、その滝の水を受け止める滝壺があった。

その滝の上から、緑谷と爆豪は滝壺へと突き落とされた。

「疲労、パニック、苦痛、全部無視して落ち着け。さもないと溺れつぞ！」

突き落とした本人である月華は、滝壺を見下ろしてそう叫ぶ。

いろいろな心配だったか、緑谷と爆豪は滝壺から這い上がってくる。

「この特訓の目的は単に肉体を虐め抜く事だ！ 2分後にまた追いかけてぞ！」

「ウォーミングじゃねえのかよ……」

「ウググ………」

2人は森の中へと走り出す。道着も重くあまり早くは無かった。

そして2分後……月華は走り出し、1分と経たずに2人を抱えて滝に戻ってくる。そしてまた突き落とした。

「アアアアアア!!?」

「クソガアアア!!?」

「ま、当然の結果か」

日が昇り月華の身体能力が落ちた頃、ウォーミングアップを終えた2人は滝壺の浅い部分に座り込んでいる。

「うし。ウォーミングアップ終了。休憩がてら、次の特訓の説明をする」

そうやって月華は2人に水筒を投げつけ、受け取り次第2人は中身を喉に通す。

(水筒が重え……全身の筋肉が悲鳴を上げてやがる)

(そ………想像の3倍くらいハードだ……これ死ぬんじゃないか?)

「まずはこれを被りな」バシヤ

「わっぷー」

月華は桶に入った赤い液体を、柄杓で2人にぶっ掛ける。

液体を吸って、白かった道着の上半分は赤く染まる。

「この匂いって……」

「オレの血だ。この滝の川下の方の森に、訳あってオレの手足となつて動く獣達がいる。その獣たちはオレの血の匂いを頼りに襲いか

かってくる。今度は逃げてても良いし反撃してもいい。説明は以上だ」
「何時までやりやあい」

「昼飯時までだな。時間になったら呼ぶ。疲れたら好きに休め。頭を使って安置を探し、神経尖らせて息を整えろ。水を飲みたきや川に行け」

歩きだす月華に続き、2人は身体に鞭を打ち後を追う。

そのまま川下へと山を下ると、赤い縄で区切られた暗い森に着く。

「この縄を一度超えたら、俺が呼びに行くまで出るな」

それ以上は何も言わず、緑谷と爆豪は言われるがままに足を踏み入れた。

ー

ー

ー

く 緑谷 side く

10mも進めば、もう月華さんがいた場所が見えなくなった。

それ程生い茂った森で、見通しも悪い。

「月華さんは獣たちと言っていた。敵は複数：相手は犬とか熊かな：

あ、かつちゃん待って」

「うるせえ。来んなクソデク」

あ、行っちゃった……………

「…って人の心配してる場合じゃない！ まずは休めるところを見つけないと…」

そう言っで見渡すけど、どこもかしこも同じ景色だ。川沿いを歩いてなければ、前も後ろもわからなくなっていたな。

川に近付き、僕は膝をついた。

「…今のうちに飲んでおこーー」

「GYAAAAA!!!」

「イ……ッテエ!?」

突如として右から何かに飛びつかれ、右腕を噛まれる。

痛いけど牙は腕に刺さってはない。この道着はただの重りじゃない、簡単には破けない素材で出来ているようだ。

「ガハッ！」

そのまま押し倒され、ギリギリと腕を噛む力が強くなっていく。ここで始めて、自分に噛み付いているのが狼だと僕は気付いた。

「ワン……フオー・オール、5%……スマッシュ!!？」

痛みを堪え、反対の手で殴りつける。

だが狼は僕の腕を離し、後ろに飛んで攻撃を避けた。

「こいつ、馬鹿正直に突っ込む獣じゃないぞ！」

狼は僕の周りを時計回りに走りだす。

飯田くん程じゃないけどかなり早い。今の僕じゃ……ましてや重りを着てる僕じゃとても対処出来ない。

「集中して……フンツ！」

個性で脚力を強化して跳んで逃げる。

(跳ぶために右足に”個性”を使った。次に木の枝を掴むために右腕に……直線上に移動しても撒けないだろうし、また足に使って木の枝を蹴って方向転換。できたらだいぶカッコいいぞ……)

なんて思っただけ……

「イツ!!？」

スムーズに”個性”の力を切り替えられず、木の枝を掴んだ腕が体重のせいでビントと伸びきる。道着の重量もあつてスジを痛めたかもしれない。

握力も緩み、僕は背中から地面に落下してしまう。

「ツテエ……」

「……H A A A A …」

「ウゲッ！」

狼は僕を踏み付けて走り去っていった。

アイツ僕を見て、最後に溜め息を零してたな。月華さんの言う通り、痛めつけるだけ痛めつけてそれ以上はしないみたいだ。

「G R R R R ……」

「……え？」

でもそれは、ただあの狼がそれ以上追撃しないだけで、この山の動物たちの数を考えれば何の意味もなかった。

「は、早く安全な所を見つけないと！」

また足に力を込めて走りだす。今度こそ跳んで逃げてみるか？

でも”個性”の切り替えが上手くできなかつたら確実に捕まる。どうすれば上手く切り替えられる？

「どうすれば……切り替える……切り替える？」

何かを見落としてる気がする。

逃げるために必要なのは「足」だ。着地にも足を使えば切り替える必要は無いけど、このエリアの木はどれも枝が多い。枝が邪魔で、どうしても手で掴みぶら下がるか、枝の上に着地するために邪魔な枝は折るしかない。

「どの木も枝が多いだけじゃなくて、そこそこ太い。素の力で折れる都合のいい木なんて無い……四足獣相手に地面を走るなんてもつてのほかだ。”個性”の切り替えはしない。でも手足を使う？」

どうすれば……ッ！

「そうか！ わかったぞ、よっちゃん！」

ー

ー

ー

く 爆豪 side く

酒井の誘いに乗ったのは正解だった。こんなにしごける環境はそうそうねえ。

(……………にしてもウゼエ)

道着は重く、腕を持ち上げるのに若干のタイムロスがかかる。

だからといって最初から腕上げとくのはただのバカだ。

敵の気配を感じてからでいい。神経だけ尖らせて、身体だけでも僅かに休ませる。

だが視線を感じて両手を構える。

「……………」

何も襲ってはこねえ。だから一度手を下ろしてみる。

「GYA! GYA! GYAAA!!?」

「さつきから手口がウゼエんだよエテ公がツ!!?」

ー Boom!!? ー

モロに爆破食らったクソ猿は、すぐさま木の上に逃げやがる。

この森にいる獣は”個性”持ちなのか、身体能力とその耐久力がウゼエ。

「死ねええええ!!?」

「UKYAAA!」

「テメツ!!?」

このクソ猿、ババアと同じ鎖を持ってやがる。それを安全圏から振り回して良い気になりやがって…………

追撃しても疲労と重りのせいで身体が上手く動かねえ。多少慣れれば殺れるか?

「KYA、KYA?」

首を傾げて笑ってんじゃねえ。クソ猿の分際で人間様に挑発しやがる。

「ぶっ殺すツ!!?」

だが誘いには乗るな。そのせいでデクに出し抜かれてんだ。頭を冷やせ…………猿は冷静にぶっ殺す。

ー

ー

ー

「はっ、はっ、はっ……………」

「GRRRRR!」

森の中を走っているのは緑谷…そしてそれを追うのは、1頭のドーベルマン犬だった。

月華の僕しもべである森の獣は、全員が月華の血を…………吸血鬼の血を身体に流している。

その理由はまた別の機会で出久たちは知る事になるだろう。今重要なのは、知っての通り獣たちが普通ではない事。

強化された脚力が緑谷を追い詰め、背中に飛び付き組み伏せる。そして抜け出すまで、布ごしに肉の感触を楽しむように甘噛みをする。

獣たちにとっても、この修行相手として追いかけるのは楽しいイベ

ントに過ぎなかった。

だが今はどうだろう……………

「GRRR……………」

最初は口を開けて笑うように追っかけていた犬だが、今は足を止めて悔しそうに辺りを見渡す。

緑谷を見失い、嗅覚を使って道着に付いている月華の血を探す。

「……………！」

「ワン・フォー・オール 5%：フルカウル!!？」

緑谷の位置情報を把握して見上げると、緑谷は木の上で枝を引っ張り、ギリギリと踏ん張っていた。

”個性”を使う時に発生するエフェクトのような電流は、身体の一部などではなく全身に流れていた。

「じゃあね」

踏ん張るのを止めると、元に戻ろうとする枝に引っ張られパチンコのように緑谷は射出された。

その場に残された犬は、悲しげな声を上げて追うのを諦めた。

「フルカウル：これだ！ 身体の一部じゃなく全身に使う。まだちよつとぎこちないけど！」

やがて緑谷は四つん這いで着地する。

「だいぶ飛んだし、これで少しは休めるかな……………」

緑谷は腰を下ろして、木の幹を背凭れに脱力した。

ここでは撒いた瞬間別の獣に襲われ、また撒いても別の獣に襲われる。

それで緑谷は、戦っている最中から次の獣が監視してスタンバイしていることに気付いた。

だから一瞬で長距離を移動すれば監視の目を抜けられ、少しの間休めると思っただのだ。

「GYAAAA!!？」

「嘘お!!？」

しかしそんな緑谷の目論見とは裏腹に、1匹の猿が姿を現わす。

「……………えっ？」

「Uuuu……」

猿は緑谷の背中に回り、彼の影に身を隠した。

「ゴラアクソ猿!!? 挑発しといて逃げてんじゃねえぞ!!?」

「……………うわあ」

爆破と共に現れた爆豪を見て、緑谷は軽く引きながら「面倒くさい事になりそう」と内心思った。

そして隠れていた猿は鳴き声をあげながら、また一目散に逃げ出した。

「……………ツケ！ テメエのことだから、とつくにくたばってると思っ
たぜ」

「かつちゃん。あの子に何やったの?」

「ああ? ババアが反撃ありつつただろ。特訓の相手に付き合っ
て貰っただけだ」

そういう彼の顔や手には青い打撲痕の痣が出来ていた。道着の下
にも同じような痕があるだろう。

「ちようどいい。猿も逃げちまったし、デク……………ちよつと付き合え
や」

「……………マジか」

ー

ー

ー

「……………ん?」

昼飯の準備を始めている月華は、火を止めて耳を澄ましてみる。

日の届かない屋内という事もあり、強化されている聴覚が遠くの方
で巻き起こる爆音を拾う。

「フン……………派手にやってるじゃねえか」

小さく笑ってから火が止まっていることを再度確認し、月華は2人
を迎えに行く。

遮光性の日傘を広げ、修行場所を選んだ森へ足を運ぶと爆音が更に
大きくなる。それに被って、喧騒も聞こえてくるようになった。

「おおおお、バトってんのか? 午後の修行メニューと被るじゃねえ

か」

森は深く、木の間隔や枝の密度だけを言うなら樹海以上だ。日もろくに届かず、月華も不要になった日傘を畳んで地面に突き刺して走り出した。

「こんなもんじゃねえんだろゴラアツ!!?」

「ちよ待ツ！ 休ませろよ、かつちゃん!!?」

「……………仲が悪いと聞いたが、言うほど悪くはなさそうじゃねえか」
喧嘩するほど仲が良い。

それが一目見た月華の感想だった。

「ガキども。飯だ」

屋敷に戻った2人はまず風呂に入って汗を流した。

緑谷は自分の全身にある打撲痕や火傷痕を見て、自らの身体なのだが軽く引いていた。

それを見て爆豪は鼻で笑うが、「かつちゃんだって同じようなものじゃないか」という指摘に青筋を立てる。

昔の緑谷は夜々が居なくなってから爆豪を苦手に思い、彼とは極力話そうとしなくなった。

しかし今は多少は気が強くなり、相変わらず苦手意識があるが軽く言い返せるほどになっていた。

月華が「やつぱ仲良いじゃねえか」といえば、緑谷は苦笑いして爆豪は全否定するが、修行から戻ってきた夜々もそれを見て思っていたよりは仲が良いと判断した。

「全員揃ったな。今飯を持ってくる。男どもは大盛りか?」

「はい」

「うす」

「夜々は?」

「うちは…少なめで」

それを聞いて月華は台所へ向かい、昼食を盆に乗せて持ってきた。
「よっちゃんだいぶ疲れてるね。何をやったの?」

「それは……………秘密や」

緑谷の問いに黙秘権を行使する夜々。

「爆豪は飯を前に合掌しながら「食わねえと身体できねえぞ」と短く唱えた。」

「何気に勝己は礼儀正しいよな。うちも」いただきます」つと」

「ああ？」

「そう言つて食事を始める夜々だが、誰よりも早く箸を置きまた合掌する。」

「ぐ馳走さま」

「え、もうっ？」

緑谷の驚きもよそに、夜々はそそくさと退散した。

「……………うぷ」

場を離れた夜々は、口を押さえて走り出した。

「向かう先は厠。品も投げ捨て便座に顔を向け、胃の中身を吐けるだけ吐き出した。」

「

」

「

時は巻き戻り今朝方。

夜々が別メニユーと称され連れてこられた場所は、本館とは別に立っていた倉庫のような小屋だった。

「入るや否や、彼女の祖父…酒呑 童子は口を開く。」

「知つての通り、ワシら酒呑童子の末裔は経口摂取したアルコールを妖力に変換する力を持つておる。摂取したアルコール度数が高いほど強くなる…そこで、この世で最もアルコール度数の高いものは一体何か……………わかるな？」

「そりや……………うちの”血”やろ？」

「うむ。元は血管を流れているものじゃが、それを一度喉に通し消化器官で分解する事で妖力になる。じゃが血の量にも限りがある。ならどうすれば良いと思う？」

「んー……………血の量を増やすか…あ、口にした血が血管に戻るまでの

時間を短くするとかやろか？」

「出来ることならそれも1つの手じゃ。だがどちらも違う」

夜々の答えに頷く童子。しかしそれは望んでいた答えとは違うようだ。

「まず前者。血を増やすといっても、血液は体重に比例する：それはワシらも例外ではなく、身体の成長に関しては咄嗟に促して短い間に成果を出す事はできません」

「後者は？」

「確かにワシら鬼の再生力は優れておる。個人差はあるが1000mlの血を失った時、常人ならそれを取り戻すのに4日と半日を要する。しかしワシらは4日もあれば、2000mlの血を取り戻せる。しかしそれは生まれつき決まっておるもので、飛躍的に強化することはできません」

原因は”個性”の発動条件にある。

血を飲めば身体能力と共に再生能力が上がる。そうすれば血も戻るが、それには再生力がやや足りない。更に強化すれば可能だが、その為にまた血を失うのは本末転倒である。

自身の血を戻す為に自身の血を飲む場合、最終的に行き着くのは”傷だけが再生された失血死体”である。

ちなみに2000mlとは、今の夜々が”百升モード”を2回行使できる程の量だ。

といっても、夜々の身体に流れる血液量は4400mlほどで、1000ml失うだけで出血性ショックで普通なら気絶する。気絶せずに貧血で済むのは”個性”のおかげだろう。

「ならどうするん……あ、血をあらかじめ抜いて取っておくとか？」
「ワシらの血は特殊で、保存が効かない。できて3日ほどじゃ」

3日後に大事件が起こるから取っておくというのは有りかもしれない。ただその犠牲は、血を抜いた日の翌日と翌々日だ。

いつ事件が起こらない状況でパトロールを行うヒーローにはできない方法である。

「じゃあどうするん？ 血よりアルコール度数の高い飲み物でも作っ

て持ち運ぶん？」

「否、答えはこれじゃ」

小屋には床下に収納できるスペースがあり、童子はそこから大量の酒瓶を取り出す。

そして単刀直入に言った。

「飲め」

「へ？ ……爺さんこれは……………」

「鬼殺し”ならぬ”鬼神殺し”：ワシの血と鬼殺しから作った、自家製の密造酒よ。ワシらの血液程ではないが度数は謎の100%超え。これを飲み、夜々の血中のアルコール度数を高める。少ない血で、十・百升モードになるのが理想じゃ」

「密造酒……………」

「うむ」

「それをうちが飲む？」

「うむ」

密造酒とは、政府等の公的機関の許可を得ないで製造されたアルコール飲料の総称でももちろん犯罪である。

そして未成年の飲酒も、もちろん犯罪である。

「……………い……………」

「い……………」

踵返して夜々は逃げようとする。

「嫌やあ……………!!？」

「待ていッ……………!!？」

予期していたのか夜々の腕を掴み、軽々と持ち上げた。

「何ヒーロー志望の孫に犯罪させようとしとるんじゃボケエ！」

「爺ちゃんボケとは何事じゃ。安心せい…あの誓約書はその為にある」

それは緑谷と爆豪に書かせた誓約書の上から2つ目の記述のことだ。そこには「当家で行う修行内容の口外を一切禁じます」としっかりと書かれている。

「ウワアアアアアア!!……………!!……………」

「やかましい。よいか夜々よ……バレなきや犯罪じゃないんじやよ？」

「元・ヒーローの口から一番聞きたくないやつやぁー!!?」

「もうワシヒーローじゃないしの。堪忍せい夜々！ お主の為じや。何より……」

「……何より？」

「3日前に作った酒が無駄になる」

「ウワアアアアア!!?!!?」

ー

ー

ー

「……うちもう、ヒーローなれない」

「夜々よ。これは酒呑家に代々伝わる訓練じや。お主の母も18の時にやっておる」

「聞きたくなかった……」

「そもそも”個性”の関係上、表立つては言えんが我が一族は、年齢問わず飲酒を黙認されておる」

「知つとるけど……知つとるけどお……」

夜々は泣いた。幼き日の別れの時のように……

そして昼食後に吐いたことがバレ、鬼神殺し5本がノルマに追加された。

11. 少年少女の強化合宿（後編）

酒吞家に訪れた2日目。

午前、緑谷と爆豪は重りの道着を着て森を駆けずり回った。昼食を挟み午後になると、緑谷のみ道着を重くされた。ライバル意識なのか（本人にそう言えば激怒するだろうが）爆豪は自分の道着も重くするようお願いした。

しかし月華は緑谷の強化系の”個性”を見越しての判断で、爆破の”個性”の爆豪は今のままで十分と判断した。

結果、着替えた緑谷は立つ事もままならない程の重りを着込み、常にフルカウルを使う事を余儀なくされる。そうする事でやつと動けるのだから、月華の目に狂いはないだろう。

そんな状態で、午後は「緑谷 対 爆豪」で対人訓練を行った。まだフルカウルがぎこちなく、勝率は0：10で爆豪の勝利。しかし40%の確率で、爆豪を追い詰める事もあった。

どちらも重りをつけている上での戦いだ。おそらく爆豪の方が強いが、一概に彼の方が強いとハッキリと判断はできないだろう。

そして夜々は午後も鬼神殺しを無理矢理飲み下し、その日の修行は終了を迎えた。

そして翌日の朝。

「今日の修行にはワシも付き合おう。その上で、小僧2人には別れてもらう」

最終日である今日：そう言い放った童子は、自分が着ていた浴衣を脱ぎ捨て上半身を露わにする。

「出の字はワシと、爆の字は婆さんと”マンツーマン”じゃ」

「よろしくお願いします！」

「森に行くぞ、爆豪 勝己。タイムンやる。手加減してやるから全力で来な」

「ああ？」

月華にメンチを決める爆豪だが、月華の実力は初日のテストでわかっている。強者に対する挑戦に、爆豪は胸を躍らせ午前と同じ森の

方へと姿を消した。

「えつと…も、もしかして僕も、童子さんとタイマンを……………」

「……………やりたいか？」

「いや！ その！ ……」

「フフツ…安心せい。そんな無謀な事はさせん」

慈愛を持ってそう言うが、「お前では相手にならない」とも捉えらるる言葉に緑谷は複雑な表情を浮かべる。

「では、こつちに来なさい」

童子に連れられて向かった場所は、少し開けた森の中。その開けた場所の真ん中には、除夜の鐘を連想する大きな鐘が吊るされていた。

「鐘？」

「触れてみなさい」

言われるがままに触れると、緑谷はその重さに驚く。

「吊るしてるだけなのに、ほとんど動かない……………フルカウルでこれだ。素の力じゃビクともしないぞ……………」

見てみれば鐘を吊るしているのも、ただの縄ではなく有刺鉄線を何百も束ねて作られているものだった。

「出の字……………否、緑谷 出久よ」

「は、はいー」

「”個性”の詳細は聞いておる。その”個性”は……………どれだけ使える？」

「えつと…僕が負荷なく引き出せるのは5%までです。全身に”個性”を使うフルカウルは昨日習得したばかりで、気を抜けばすぐに解けてしまいます」

「それを使った機動力は、いずれ会う事になるワシの友に習うと良い」「いずれ会う……………」

「ワシから出の字に教えるのはこれじゃ」

童子は緑谷を下がらせ鐘の前で構える。

腰を下げ、上半身は起こし、拳に作って腕を引く。

「鬼人・一閃」

「ゴオオオオオン!!? ー」

山中に響き渡る鐘の音と大きく揺れる鐘を前に、緑谷は尻餅をついて自分の腰を押さえる。

道着の重みもあつて、地味に痛いのだ。

「今のは、”個性”の力ですか？」

「否、ただの正拳突きじゃ。正確には、ワシの正拳突きじゃ」

「童子さんの……………ですか？」

大きく揺れる鐘を片手で抑え揺れを止める。

「出の字の拳は……………オールマイトを見習い過ぎているな」

「ツ！ よ、よく……………わかりましたね」

自分の”個性”の前所有者の名前が出て、緑谷は凶星を突かれる。

「しかしお主の身体はお主のものじゃ」

「……………？」

「…お主のその体格にあつた、自分の打ちやすい型を見つけろ。と、いうことじゃ」

いまいちピンと来てない緑谷に、童子は振り向きざまに告げる。

「型……………ですか？」

「どれだけ力があるうと、その全てを伝達できなければ意味がない。ワシが教えるのはそういうった力の使い方じゃ。それが一つ……………」

童子は指を立てて少し勿体ぶる。

「まだあるんですか？」

「こちらが最も今、出の字が必要とする技術じやろう」

「僕が一番……………」

生唾を飲みこみ次の言葉を待つ緑谷に、童子は膝をつき緑谷に顔を近付ける。そして立てた指で緑谷の腹部を突いた。

「ガツ!?? ……………ツカ……………ゴホツ……………な、何を？」

「一度体勢を立て直す際、距離を取るより急所を突き動きを止めた方が良い時もある」

「き、急所突きですか？」

「そういうことだ」

「わかりました。ところで…」

「ん？」

「よつちゃんの方は見なくて良いんですか？」

「うむ」

なんせ夜々が行う修行も、昨日と同じ鬼神殺しという密造酒を飲み干すことだからだ。見ていたところで、アドバイスもクソもない。

「早速、打ってみなさい。まずはお主の型を作るぞ」

「はい!!？」

早速緑谷は構えて試してみる。

構える手順の一つ一つを丁寧に、確かめながら意識するようにゆっくりと…………

そんな緑谷を見て、童子は僅かに口角を上げる。

（貴様より教え甲斐がありそうじゃな。俊典…………）

ー

ー

ー

「テメエの武器はその爆破の応用と、優れた反射神経だ」

「ーーツ!!？」

「だからそれに頼り切り、看破された時に対応できない」

「ググー！ー！ ウウー！ー!!？」

「だから俺の鎖に警戒した時、蹴りへの対応が遅れる。今までならその反射神経で見えから間に合ってたんだろ？ テメエは」

「わかったから退きやがれッ
ウウー！ー！ー！ー！ー！ー！ー!!？」

爆豪は猿轡のように鎖を噛ませられ、月華に組み伏せられていた。いくら月華の実力を認めていても、背中の上で注意を垂れ流されるのはプライドの高い彼にはさぞかし苦痛だろう。

言いたい事を言い終えたところで、月華は爆豪の上から退き鎖を解く。

「少し休憩にするぞ」

「はあ!!？ 今始めたばっかじゃねえかよ!!？」

「身体は良くても頭がな…反省点を抑えて2分後に活かせ」

「スピードが負けてんのはわかってんだよ。だが後少しだ。スピード

が負けてても、後少し早く動ければ対応できる……もう少しなんだよ！」

「そうか……じゃあやはり、重りを少し追加するか」

「はあ!?？」

成長を妨げるかのような行為に、元々物言いがあつた爆豪は更に機嫌を悪くする。

「ぶっちゃけテメエ、天才肌だろ。オレは放っておいて強くなる点を、わざわざ教えてえんじゃねえのよ。テメエに成長してもらいてえ所はもつと別にある」

「別う?」

悪かつた機嫌を一度抑え、爆豪は真剣に考えてみる。

「戦い方だ、戦い方。反射神経に頼り過ぎず先読みも鍛えてけ。んで”個性”ばつか使うな」

「んだよ。戦闘で”個性”使うなどでも言うのかよ?」

「強個性なんだ。使わない手は無い。だがもつとバリエーションを持たせてほしい。移動も攻撃も手使うんなら、動かさねえ足が勿体ねえだろ」

「……………じゃあ体術」

「おお。それだよ、オレがテメエに多少かじつてほしい要素はよお」

そう言った月華は指を咥え、綺麗な指笛を吹く。

するとガサガサと草木を分けて1匹の猿が現れる。

「……………UKYAッ!?？」

「昨日逃がした猿」

「あ? なんだよ、キビダンゴがビビってんじゃねえか。じゃあゴマ大福に相手させつか」

「おい、ネーミング」

思わず爆豪が月華のネーミングにツツコムが、気にせず月華が別の動物を呼んだ。身長は1m80cmほどの黒い毛皮に覆われた二足獣で、太い四肢が特徴的だ。

「紹介しよう。オレの僕しもべのうちの一頭。ゴリラのゴマ大福だ」

(ここは動物園かよ)

「試しに攻撃は体術のみでやってみる。体得すんのは隙を作る一打程度でいい。実践じゃどうせ、決定打は爆破だろ」

「一打程度でいい？ ハッ！ ざっけんな。全国トップ並みの体術身につけたらあ!!？」

「

」

「

12時を回ったころ、夜々は酒瓶を床に置いて立ち上がる。

フラつくその千鳥足で倉庫の扉の前に立ち、両手でグツと押しあける。

「……………(飯)…」

その目は虚で、生気を感じない。

何かに絶望し切ったような表情を浮かべ、そのまま昼食の場へと夜々は向かった。

席に着くと、その変わり果てた姿に緑谷と爆豪は目を丸める。

「……………どうした酒井」

「……………」

「よ、よっちゃん？」

「……………そつとしといてくらさい」

「夜々。米は？ 大盛りか？」

「……………少なめ」

「大盛りだな。昨日も食ってないし」

「おにい……………ウ…」

「夜々よ……………出したら追加じゃ」

「……………ング…」

夜々はこの修行を2人に誘った張本人である。

しかし彼女は誘ったことどころか、自分が参加したこと自体を後悔していた。

なんせ彼女が望んでいた修行は、もっと汗水流して身に付けるものだったのだ。しかし蓋を開けてみれば、待っていたのは酒漬け地獄。

実は昨夜逃走を図り、月華に夜々は捕まっていた。

だがどのみち今日が最後。それが彼女にとっての唯一の救いだつた。

――

――

――

昼食後は、また森に放り込まれ動物たち相手に生き抜いた。今回は夜々も参加していた。緑谷曰く夜々は満面の笑みを浮かべ「解放された！」と何度か口にしていたらしい。

そして午後の4時頃、修行に励んでいた3人は月華に呼ばれある場所に来ていた。

そこは夜々が修行の酒盛りをしていた倉庫で、その中から鬼神殺しを片手に童子が出てくる。

夜々は酒瓶を見て嫌な汗を流すが、酒瓶を童子が口にする事で飲まなくていいのかとホツとする。

「最後の修行じゃ。小童ども」

酒瓶を空にした童子のツノが薄らと光り、両の手を切つて血を地面に流す。流れ出た血は多くないが、血の赤は童子を中心に半径20mほどの円が地面に広がる。

そしてその手を合わせ、なんらかの印を結んだ。

「十升モード……百鬼夜行」

「わっ!?」

童子が呟けば地響きが始まり、夜々たちが立っていた地面が盛り上がる。

否、盛り上がると言うのは語弊があるかもしれない。その地面から、誰かが這い出てきたのだ。

「んだこれ？」

それも1人や2人ではない。

数十人の大男が、3人を取り囲むように湧いて出てきたのだ。

「爺さんの奥義“百鬼夜行”。見ての通り、百人の爺さんが血の混じった土塊から生まれる妖術や。本来、百升モードで使うやつやから、まだマシやろ。通常より脆いやろし、数も50ちよいかの？」

「まさか……この全員と戦うとか……?」

「出の字……そのまさかじゃ」

最後の修行。

それはただの乱戦だった。凶体のあるせいで、1人に対して3人しか一度に襲いかかってこない。それでも前後左右から襲ってくる鬼たちに、3人はなすすべもなかった。

だがそれは、一昨日の彼らだったらの話。

「フルカウル…上限、5%……!!?」

まだ習っていないが、フルカウルによつて劇的に向上した機動力で童子の分身の間をすり抜ける。

「スマツシユツ!!?」

ー ボコ ー

放つた拳は、分身の一部を土塊のように削るだけだった。

(確かに思ってたより硬くない。何発も打てば壊せるだろうけど、数が……)

一度に3体までしか襲つてこないが、それは襲えないだけで後続に控えている。

間をすり抜ければ、その向こうの分身が襲ってくるのは当然だった。

「でも分身の作りが人型なら……」

緑谷は右手を握り、その上から左手を被せる。そしてそのまま、分身の一体を背後から右肘で突いた。

それは右エルボーを左手で押し込む形となり、分身は腰から碎けて上半身が倒れる。

「よし! ブヘツ!!?」

「氣い抜いてんじやねえぞクソデクツ!!?」

分身に殴られ、頭から地面に叩きつけられる緑谷。しかし分身は追撃をする前に、爆破を食らって上半身を失う。

爆豪も同じように襲われているはずなのだが、最小限の動きで避け、一度たりとも止まらずに動いていた。

「んー焦るなあ……んく……十升モード」

出来ることなら百升を試したかったが、流石にそんな隙は無いと判断する夜々。

ひとまず十升で分身の攻撃を受け流し、カウンターを決める。

「量がキツイけど、やっぱ脆いなあ……………んく…二十升……………」

「ハッ！ もっとペースあげても良いんだぜ？ 酒呑 童子さんよお！」

「ちよっ……………流石にこれ以上は……………」

「もっと自信持ちい、出久。ちやあんと強くなつとるさかい……………んく……………四十升」

「酒井……………ッ！ ………………テメエは、使えるようになったのかよ!?？」

「らしいで。まだ試し……………てないけどな」

「二人とも、話辛いなら集中しなよ！」

気付けば3人は一ひとかたまり塊となり、分身との攻防を繰り広げていた。

「五月蠅え!!? テメエと違って全然余裕だわ!!?」

「その割にまだ全然倒せてないじゃないか！」

「勝己、婆さんの口調うつた？ あ、元々口悪いか。んく…七十升」
(クククツ…道着の重りを忘れさせられる動きしやがって。夜々と緑

谷は兎も角、なんで増強系じゃねえテメエが慣れてんだ爆豪?)

童子の隣で日傘をさし、修行光景を眺める月華が口を押さえて小さく笑う。

童子もその修行光景を面白そうに見ていた。

「悪いんやけど……………残りはもううで」

「チツ……………勝手にしろ」

「んく……………百升モドオ……………」

ツノの発光が僅かに強くなり、それが妖力なのか、夜々から目に見えない何かが溢れ出す。

「……………ハア…ん……………思ってたより、症状も悪くないなあ〜」

その状態を楽しむように、夜々は飛んで分身の頭上に飛び乗る。

”鬼圧”

ズンツと音を立てると共に足場になっていた分身は、夜々に潰されて容易く碎け散る。

続けざまに指先を、分身が比較的密集している所へ向ける。

「……………おい爺さん。夜々に説明はしたのか？」

「……………あ…」

”鬼砲”

ー

ー

ー

「スミマセンデシタ」

場所は変わって屋敷の前。

そこには何重にも鎖で巻かれた状態で正座をする、酒呑 童子の姿があった。相変わらず強面だが、その目には反省の色が見える。

「つうーわけで夜々。百升モードで鬼砲は撃つな」

「はい」

そう釘を刺す月華だが、それにはもちろん理由がある。

百升モードで撃てばもちろん威力が上がるのだが、パワーバランスが崩れ制御がしにくいのだ。

放った結果、直径3mほどの極太レーザーはのたうち回る大蛇のようにうねった。真っ直ぐ撃てたとしても直径3mだ。空に向けて撃たない限り、地面にレーザーが触れ足元が崩れてしまう。

「つーかそれ対人で絶対使うな。制御できないとマジで人が死ぬ。死ななくてもああなる。わかったか!?？」

「はい……………すみませんでした」

月華が半ギレ状態で指差す先には、屋根が消し飛んだ屋敷があった。今朝この屋敷で目を覚ましたのだが、その頃の面影はほとんどない。

「まあそれは説明しなかった爺さんの監督不届きだ……………人に向けて使わない事を約束すりゃあそれでいい」

「婆さん。足痺れてきた」

「あ?」

「ごめんなさい何でもありません」

「…チツ……………屋敷の修理費と、爆豪 勝己が壊した鳥居はテメエの

へソクリから出すからな」

「いや鳥居は婆さんが」

「……………」ジャラン

「どうぞお使いください」

「……………はあ。さて…改めてだがお疲れさん。短期間でオレらが教える事は可能な限り詰め込んだはずだ。精々頑張んな、ガキども」

「ありがとうございました！」

「…した……………」

「勝己もつとハッキリ言えや。爺さん、婆さん、じゃあのと」

学生3人は傷だらけの身体で荷物を持ち、月華たちの住む山を後にした。

ー

ー

ー

帰宅後、3人はそれぞれのオーバートレーニングによって得たものと、代償として生じた不調の改善に勤しんでいた。

「スウー、ハアー……………フンツ!!？」

緑谷は自室でサンドバッグをぶら下げ、正拳突きを放つ。

今着ているのは、餞別に貰った道着。もちろん修行中に使っていた重りだ。

「……………ダメだ、まだ力がどこかからか逃げてる気がする。肘か？」

腰もしっくりこないし、無意識に今まで”個性”頼りで威力を出してたんだな僕……………よし、もう一回」

腰を落とし態勢を直すと、全身に痛みが走る。

「うっ……………今は、筋肉痛を治した方が……………いいかも」

ー

ー

ー

「で、どうだったのよ。夜々ちゃんとお泊まり合宿」

そう言っって爆豪の耳に息を吹きかけるのは彼の母親だった。

吹きかけられた爆豪は鳥肌を立て震え上がる。

しかしそれを知っていてなお、彼女はそれに抵抗を覚えている。つまりチキっているのだ。

「……………んくんく……………ふんだ!」

結局、彼女は水だけ飲んで横になった。

「うう……………体育祭まで……………あと数日……………うう」

最高のポティンシャルに戻せるのかというプレッシャーも相まって、夜々はこの後、盛大に吐いた。

ー

ー

ー

そして翌日。

いつも通りの学校生活を過ごすのが、体育祭が近い事もあり雰囲気が違う。そして帰りのホームルームが終わり、各々が帰路につく。

強化合宿について夜々たちは質問されたが、誓約書を理由に断固拒否。緑谷と爆豪は別に言っても問題ない気もしたが、真に隠すべき理由は夜々だけが知っている。

彼が現れたのはそんな時だった。

「ふーん。本当にハニーと合宿に行ってたんだ」

帰ろうとした緑谷と夜々は、教室の前で待ち構えていた男子生徒によつて足を止められた。

男子生徒は、制服の背中に穴が空いておりそこから一對の黒い翼を生やしていた。

「えつと、誰……………つてハニー?」

男子生徒の言葉に緑谷は首を傾げ、夜々は^{なめくじ}蛞蝓を見るような目をしていて。その様子から、夜々の知り合いなのだろう。

「……………誰だテメエ。退けやコラ」

同じく帰ろうとした(と聞いてい)爆豪が話に首を突っ込む。

「この2人が例の幼馴染くんかい?」

「……………人違いデース。通してくださいサイ」

そう言つて無理矢理通ろうとすると、腕を掴まれた拳句、両手でその手を熱く掴み顔を近づける。

「どうしたんだい？　もしかして照れているルツ？」

最後に上ずった声を上げ、男子生徒は膝から崩れ落ちた。

緑谷は白目を向いて息を呑み、爆豪は無反応を取り繕ったが若干内股になる。偶然その光景を見ていた尾白は「また君はそうやって……」と遠い目をしていた。

「オ……………オ……………」

「よっちゃん！　急に何をツ？　だ、大丈夫ですか？」

緑谷はテンパった様子で、現れた男子生徒に手を伸ばす。

しかしその手は、男子生徒本人の手で払われ、今まで股間を押さえ蹲っていたのが嘘のように緑谷をキツく睨みつけていた。

「触らないでくれ。君なんかの手助けは要らない」

「え……………」

この異様な男子生徒の登場により、気付けばA組の生徒のほとんどが寄ってきていた。

そこが出口なのだから当然といえば当然だが……………

「え、何々？　どうしたの？」

「なんかこの人、青山と同じ人種な気がする」

「え☆そう？」

「フフツ、まあ僕の事を知らない人のためにも自己紹介しておこうかな？」

そうやって制服の埃を叩いてから優雅に立ち上がる。

翼は両サイドに大きく広げ、右手で胸を押さえ空いた左手は後ろに回す。そうやっていいトコの坊ちゃんのように礼をした。

「ボクはI—B組の黒羽くろば 礼文あきふみ。そのマイハニー…酒井 夜々の許婚さ」

そう言って爽やかな笑みをA組の面々に向ける男子生徒。

それに対してA組の面々は口を開けて驚愕する。

「「「ええ……………」」」

「「「はあ……………」」」

男女の二重の驚愕が飛び交うが、それすらもどこ吹く風といった感じで顔を夜々へ向ける黒羽。

「で、答えをまだ聞いてなかったね」

「るっさい、未練タラタラストーカーナルシスト糞鳥。何が許婚や。何度フったら死ぬねんお前。だったらなんやねん」

(夜々ちゃん、口悪いな)

「別に……………ただ君の目はどうやら曇っているようだから、体育祭で完膚なきまでに潰してボクの方が良いってことを教えてあげようかと……………だからボクが優勝した時…その時は……………」

そう言っつてまで夜々に手を伸ばそうとする黒羽だが、その手首を掴まれたせいで夜々には届かない。

その手は僅かに熱く、ガチガチに固まった鍛えられ酷使された手だった。

「待てや。何勝手に話進めてんだ」

「……………爆豪くん。だったかな？ この手は何のつもりだい？」

「何も糞も、要は宣戦布告だろ。何俺から目え逸らしてんだ」

「宣戦布告だなんて…ボクにその気は全然無いんだけどな」

「ハッ！ 眼中に無えつてか？ 体育祭でサクツとやられて恥かくぞ
テメエ」

「……………言うじゃないか。まあいい……………続きは体育祭でやろう」

そう言い残して黒羽は踵返して帰路についた。

「ん？ お前ら、何をたむろしてるんだ？」

「あ、B組担任のブラド先生……………」

「ちようど良かったわあ。実は黒羽とか言う気持ち悪い生徒にセクハラされてん。退学処分にしてもらえへん？」

(酒井、今のやつを凄く嫌ってるんだな)

そう心で思いながら、切島は別れの挨拶をしていち早く帰り始めた。

雄英体育祭編

12. 鬼と体育祭

「……………」

「……………なはは〜……………おはようございます。相澤はん」

眼光を光らせる相澤を前に、流石に今回はやはり萎縮する夜々。

相澤はUSJ事件の傷が完治しておらず、未だに包帯を全身に巻いていた。

ちなみにここは1―A組の教室で、夜々以外は全員席についている。

「酒井、遅刻だ」

「いや〜相澤はん。これには山より深く海より高い理由がありまして……………」

「それ海拔0メートルだろ。ひとまず話せ」

「……………寝坊しました」

小声でそう呟く夜々の頭を、相澤は出席名簿の裏面で軽く叩く。

「説教はまた今度にする。座れ」

「はい」

そそくさと自分の席へと向かい、バッグを置いて椅子に腰をかける。る。

「一人遅刻したが全員揃ったな。体操着に着替えて控え室に移動しろ。それから……………」

両手で教卓の角に手を置き、少し前のめりになって間を空けてから相澤は告げる。

「各自、全力を尽くすように」

その言葉はやけに重く、遅刻して軽くおちやらけていた夜々が気を引き締めるのにも十分だった。

今日は雄英体育祭。

ヒーローを目指す少年少女たちの、数少ないビックイイベントである。

「

」

「

「凄い集まっとなるな」

「夜々ちゃん、緊張しないの?」

「しとる。普通にしとる」

雄英に今、大勢の人が集まっていた。

保護者や見物客はもちろん、ヒーローの卵を見にきたプロヒーローもいる。

USJ事件もあり警備として雇われた多くのヒーローもいるので、それを含めればヒーローだけでも1000人を超えるだろう。

それを話題にして、入場控え室では各々が雑談をしていた。

その目的は主に、緊張を緩和させるためだろう。ただ話題のせいで、逆に緊張感を増す者の中にはいた。

「そんなにヒーロー集まるって、ヤバくね?」

「それだけ皆、注目しとるんやろ。充電はバツチリか、ピカ〇ユウ」

「誰がピ〇チュウだ!!? いや良く言われるけどよ!!?」

「今日もバチバチして可愛いなあ」

静電気で逆立ったような上鳴の頭を、夜々は無邪気に指を通し掻き乱す。

「可愛いって…ちよ、やめろよ! お前のテンションにまだオレ付いていけねえわ」

「すまん。ふざけてへんと緊張紛れんのや」

「女子に構ってもらうなんて…上鳴…お前だけはオイラの仲間だと思っていたのに……」

血走った目で上鳴を睨みつける峰田に苦笑いを零すが、上鳴はその後ろに立つ2人を見て更に表情が引き曇る。

「あー、酒井。そろそろやめてくれ」

「うい」

「緑谷…ちよつといいか?」

緑谷と爆豪の無言の圧に負け、上鳴はその場をそっと離れる。

それとほぼ同時のタイミングで、轟が緑谷に話しかける。少し異質な組み合わせに、周囲のクラスメイトの何名かがそれに注目する。

「客観的に見ても実力は俺の方が上だ」

いきなりなんだと思うが、確かにそうだな。と緑谷はまた微妙な表情を浮かべる。

「だけどお前……：オールマイトに目かけられてるよな？」

「へ？」

オールマイトと緑谷の関係を轟は知らない。ただ師弟関係でもあるため、隠してはいるが時折一緒にいるところを皆は見ていた。

増強系の”個性”同士、”個性”の制御ができていない緑谷をオールマイトがアドバイスしている。クラスメイトの大半はそう捉えているが、轟は違ったようだ。

緑谷もそれを感じ取って、必死に隠しているが焦っているのが表情に出る。

「そのことについて深く詮索はしねえ。だが緑谷……：お前には勝つぞ」

「宣戦布告なんてやめとき。色々面倒や」

そう言ったのは夜々だった。

緑谷の肩に腕を回し、悪絡みするように首を突っ込む。

「仲良しこよしじゃねえんだ。別に良いだろ？」

轟は夜々を睨みつけるが、負けじと夜々も睨み返す。

「何だ。言いてえ事があるなら言えよ」

「轟はん……：あんたに宣戦布告するような資格ないで？」

「……：なんだと？」

空気がピリ付き、事の始まりを見ていなかった者も今では見ている。

「あの2人……：どうしたんだ？」

「そういうえば酒井のやつ……：やけに轟のことを嫌ってないか？」

「ちよつとわかる……：最初は気のせいかな？　って思ってたんだけど……：夜々ちゃんたまに轟を見て嫌な顔するんだよね。悲しいような……：なんとというか……：」

1—Aのクラスメイトは、わりかし周囲の人を見ているらしい。だから夜々が轟を見て、目を曇らせている事を何人かは知っていた。

「轟はんって、醜みにくいなあ」

「な！ 酒井さん!!？流石に言っつていい事と悪い事が……」

「生き方が醜いねん」

轟の容姿はイケメンの部類だ。髪は左右で色が違うくらいで、顔そのものは整っており1—Aの中ではトップだろう。ただ顔の左…そこに古い火傷痕が残っているのだ。それは治った今でも古傷を残している。

それについて言っているのであれば。と、八百万が夜々を咎めるが、どうやら違うらしい。

轟も「生き方が醜い」と言われ、表情を顰めて次の言葉を待った。

しかし夜々は目を瞑り、目頭を指で押さえて反省の色を見せる。

「いやすまん……なんでも無いわ。忘れてくれや」

「おい！ そこまで言っつてそれはねえだろ」

引つ込みがつかず、去ろうとする夜々の肩を掴む。

その手を剥がして振り向くが、夜々はそれでも謝罪の言葉を述べ逃れようとする。

「ホントすまんで。これ以上は喧嘩になってまうし、ここでやめとこ
うや」

「……ならせめて、結局何が言いたかったのかだけ教えろよ」

本当に申し訳なさそうにする夜々の姿に頭が冷めたのか、轟も少し落ち着きを取り戻し改めて尋ねる。

すると少し迷った表情を浮かべ、溜め息をついてから轟以外に聞こえないよう耳打ちをした。

「そのままでおるならお前さん……ヒーロー諦めた方が良えよ？」
「……………」

轟は意味がわからず硬直する。

空気は嫌に白けたままだが、夜々はそろそろ入場だと言って控え室を出て行った。

それに続いて…というよりは、この空気に耐え切れず次々とクラス

メイトは部屋を出て行く。

「…………轟くん」

「緑谷…」

最後に残ったのはこの2人だった。

「さっきの話の続きだけど……………僕よりは轟くんの方が実力は上だと僕も思うよ。かつちゃんやよつちゃんでも、君に勝てるのか分からない。けど、他の科の人も本気でトップを取りに行こうとしてるんだ……………だから」

緑谷は少し間を空けてから、轟の目の前に立ち宣言する。

「僕も『本気』で獲りに行く！」

「……………そうか」

夜々の言葉の意味がわからず少し考え込んでいたが、緑谷の言葉で現実を引き戻される。

(そうだ……………今は考えてる場合じゃねえ)

「だが俺が勝つ」

そう言つて2人も、控え室を後にした。

1

1

1

列をなして暗い通路を進む1—A組の生徒たち。もちろんその中には夜々や緑谷たちの姿もある。

暗い道だが前はわかる…光が差す入場口と、その向こうからすでに聞こえている歓声。

『遂に来たぜ!!?年に一度の大バトル!!?ヒーローの卵と侮んなよ!!? つうかお前等の目的はこいつ等だろ!!?ヴィラン襲撃を乗り越えた鋼の卵共!!?!!?』

入学試験でも聞いたプレゼント・マイクが場を盛り上げているのも聞こえてくる。

明らかに自分たちに的を絞った内容で、また緊張する者と冷静を保つ者…そして気恥ずかしく不恰好に頬が釣り上がる者に別れた。

そしてついに光差すグラウンドへ入場する。

しかし爆豪はその表情を真面目なものに変え、ある人物を睨みつけた。

「……………フン。肝は座ってるようだね」

黒羽は眉間に青筋を浮かべ、背中から飛び出した翼の羽が苛立ちを表すように逆立ち始めた。

だがそれでも司会進行役であるミッドナイトは、体育祭の選手宣誓と処理して次へ進める。

宙に配置された巨大なスクリーンに、第一種目の内容が表示される。

「さーて、それじゃあ早速第一種目に行きましょう！ いわゆる予選よ！ 毎年ここで多くの者が涙を飲むわ！ さて運命の第一種目！

今年は……………障害物競走よ!!?」

スクリーンに表示された文字は「障害物競走」の5文字。

いくらヒーローの名門校でも、やはり体育祭らしい内容なのだなどコレでは思うだろう。

しかしそれは障害物の内容を知れば、「いくら体育祭でも、やはりヒーローの名門校なのだ」と意見を変えるだろう。

「計一クラスでの総当たりレースよ！ コースはこのスタジアムの外周、約4km！ 我が校は自由さが売り文句！ コースさえ守れば何をしたって構わないわ!!? さあさあ、位置につきまくりなさい！」
「つきまぐるってなんや？ まあ、この人数なら”つきまぐる”でええんかな？」

そんな事を言いながらスタート位置へ移動する。

人数が多いので、それだけでも一苦労…ましてや先頭に陣取るなど無理に等しい。それでも先頭に運良く陣取れる者も居るわけだが……………

「あーもうこの辺でいいや」

全員が位置についたのを確認できたのか、スタートの合図を示すシグナルに3つのライトが灯る。

それを見た生徒たちと観客のざわめきは、すぐに小さくなってやがて消えてなくなつた。

「ここって真ん中ちよい後ろくらいやろか？」

シグナルのライトの1つが消える。

(さてどうするか。うちの十升モードに必要な血の量は、1000mlから800mlに減つとるけど)

障害物競走は第一種目で、種目は全てで3つあると伝えられている。

最終種目まで出来る事なら温存したい。

(そのためにここは素でやろうかの?)

そう考えていると、シグナルがまた1つ消える。

残り1つの光が消えるのを、今か今かと皆が待ち構えていた。

(上位に食い込めば良いだけやし…うん)

そして最後のライトが消えた。

『スタート!!??!!??』

歓声がまた上がり、人の波か一気に動こうとしたその時……

「なっ!?!?」

「嘘だろオイ！」

「ちよっ、いきなりかよ!!??」

凍った足元に一同は困惑する。

両足は凍りつき地面に固定され、動ける者はほとんどいない。

「悪いな」

主犯は轟。スタートと同時に凍らせて妨害し、先頭に躍り出る。

ただ手の内を知っている1-Aは、全員が回避して後を追っていた。

「チツ…流石に全員は無理か………なっ!?!?」

そして彼女も、もちろん逃れていた。

ツノを僅かに光らせ、たった今轟の頭上を飛び過ぎていく。

進行方向に背中を向け、指先から出るビームの推進力で空を飛んでいた。

「でもやっぱ、温存できるほど甘くはないわなーツ！」

1

1

『ついに始まったぜ、雄英体育祭1年部門！ 実況はこのボイスヒーローことプレゼント・マイク！ 解説は抹消ヒーロー、イレイザーヘッドの2人でお伝えしていくぜ!!? 解説のミイラマン、アークユーレデイ!!?』

『無理矢理呼びやがって…』

相変わらず包帯姿でミイラマンと称された相澤は、仕方なく競技に目を向ける。

『さあ！ スタートダッシュで先頭に出たのは、後続を凍らせた轟：ではなく!!? 空飛びナウの酒井ガールルツ!!? その後ろを1―A組の面々が追いかけていく!!? 教え子の活躍を前に感想はねえのかよイレイザー!!?』

『休ませろ』

夜々は地上を見下ろし、コースだけ確認して飛び続ける。

しかしこのまま飛べば早々に切れるため、着地するタイミングを探す……

ー カアン ー

「へブツッ！」

『プッハ！ ここで酒井ガール撃墜!!?』

『何やってんだアイツ』

前方不注意で何か硬いものに叩き落とされた夜々は、土埃の中から立ち上がり振り向く。

そこに佇んでいたのは2体の巨大なロボで、ヒーロー科の生徒達は入試で一度見ていた0ポイント ワイラン 敵だ。

『クウー……ッ！ しかし早いな！ もう第一関門か!!? 手始めの第一関門……』 ロボインフェルノ”の始まりだぜえ!!?』

「マジかい」

「先行くぞ」

土埃を払って走り始めると、その横を轟が抜き去っていく。

もちろん先頭を走る轟をロボが襲うが、それも一瞬で氷漬けにされて動かなくなる。

『ここで先頭が入れ替わるーーーーッ!!?!轟! またもやお得意の氷結でロボインフェルノを無力化ーーーーッ!!?!』

轟は無力化したアーチ状で静止したロボの下を潜る。すぐさま夜々もその後を追うが、頭上から嫌な音が聞こえる。

「そこはやめとけ。崩れやすくなってる」

「なんやて?!?!」

氷結具合を制御したのか、轟が通った後でロボが崩れ始める。それを見て夜々は右手を引いて、タイミングを合わせて振り上げる。

「あぁんにやろおおお!」

ー ドオオン!!?! ー

振り上げた拳が鈍い音と共に、ロボが一瞬身体を浮かびあがらせる。夜々はその隙に前へと飛び、下敷きになることを免れた。

もつとも、夜々の後続の者たちはそうはいかなかったようだが。

「俺の前に行くんじゃねえーーーーッ!!?!」

そこへ追いついてきたのは、ロボの上を通ってきた爆豪だった。

彼は爆破の推進力で上を通ったようだが、他にもテープで自分を引き上げる瀬呂や、黒^{ダークシャドウ}影と呼んでいる影のモンスターを足場に乗り越えてくる常闇の姿も後続に見えた。

「ちんたらしてられんな」

夜々には50mを3秒37で走る脚力がある。

しかし強化合宿で20kgの重りをつけて飛んでいた爆豪は、そんな夜々を置いて前へ進んでいく。

「マジか……………いや、焦るな。言うてまだ3位や」

『おおーっところで酒井ガール順位が下がっていくーーーーッ!!?!』

「……………マイクはん、煽らんというて」

『一方その頃先頭に行く轟! もう第二関門か?!? 第一がそんなにぬるかかったか? ならこれはどうだ!!?! 奈落に落ちたら即アウト!!?!? ザ・フオオオオーーーーッ!!?!』

轟が第二関門に着いたのを見計らって、マイクがそう言うて場を盛り上げる。

そしてマイクが言った通りそこにあるのは巨大な底の見えない穴

で、点々とある足場にロープがかけられているだけだ。

要は綱渡りをしろと言う事だろう。

しかし轟は氷で安定した足場を作り難無くクリアする。もちろんその氷は、後続が使えないように数秒で溶けて崩れた。

「待てやゴラアアア!!?」

爆豪は元々の移動手段が空中移動だ。もちろん難無くクリア。

だが次に来た夜々は、最初のような燃費の悪い行動を取らなければ飛べない。しかし彼女も、強化合宿で数時間だが森を駆け巡っている。

『酒井ガール跳んだー！ーッ!!?またレーザーで空飛ぶつもりか!!?』

『おい、他も映せよ』

相澤に指摘され、マイクは咳払いしてから先頭との距離を詰める爆豪の実況に移った。

そして飛び降りた夜々はというと、岸から岸に伸びているロープを落下中に掴み、腕力にモノを言わせて振り子の容量で更に跳ぶ。

前の2人程では無いが、夜々も数分かけて難無く突破する。

「よしー。前が見えてきたー!」

「なっ、出久!!?」

一度振り向くと、さつきまで居た岸に緑谷が立っていた。

しかも何故か、第一関門のロボの装甲をロープで縛り担いでいる。「いかんいかん。前向かんと……」

緑谷まで追いついてきた事実には、夜々は驚くと同時に少し嬉しく思っていた。強化合宿を通して力になれた事に対してだ。

だがそれも一瞬で、すぐ切り替えて先頭を追いかける。

『止まって正解だ!!?そこは最終関門の地雷原、”怒りのアフガン”だ!!?地雷は目凝らせば見えるし、威力もそこまで高くねえから安心して爆ぜろ!!?』

『爆ぜたらダメだろ』

夜々からは確認できないが、先頭はもう最終関門に辿り着いたようだ。そして夜々が到着したのはその実況を聴き終えた頃： 夜々は

実況通りの内容が目の前に広がっているのを確認しながら、一切減速せずに前へと進む。

地雷を避けて進む轟に爆豪が追い付き、互いに妨害しながら進んだ結果減速しているようだった。

「最終関門だけあつて地雷原が広いやん。ちまちま進んでられへんな!!?」

ー ボゴオン ー

『マジで爆ぜたーーツ!!?』

『お前が言っただろ』

音だけでなく煙も凄い。しかし確かに威力は低く、爆炎の中からは一切の減速を見られない夜々が腕を振って走って出てきた。

『YEAH!!?この程度の威力は足止めにならねえってか!!?酒井ガール爆進するのを止めない!!?』

『脳筋過ぎんだろ』

だがしかし、その猛進する速度は馬鹿にできず、ついに先頭に追い付き3人でトップを奪い合う形になる。

「どけ爆豪!」

「テメエが退きやがれ!!?」

「じゃあ間取って2人とも退いてや!!?」

「どこが間だボケエ!!?」

ー ー ボゴオオオオン!!? ー ー

そして後続でまた爆発が起こる。後続も追い付きつつあり、爆音も度々なっている。しかし今のはそんな中でも群を抜く爆音だった。

思わず先頭の3人は一瞬気を後ろに向ける。

『また爆発ーーツ!!?でもって今日は良く人が飛ぶな!!?』

『地雷は目を凝らして見えるほど浅く埋まっている。それを掘り返して集め、あえて爆発させたな』

「デクツ!!?」

「緑谷!!?」

緑谷は担いでいた装甲を盾に、爆風で空を飛んで一気に先頭に躍り出た。

「なんちゅー使い方しよんねん!!?」

「この手は……絶対には離さない!!?」

妨害しようと緑谷に伸びる3本の手。

しかし緑谷は盾に使った装甲に結ばれたロープを掴み、前転の勢いで間髪入れず装甲を地面に叩きつける。

「またっ!!?」

ー ボゴオン!!? ー

着地先の地雷が爆発し、盾にしていた装甲は爆風を面で受ける。それによって効率良く受けた爆風で前に吹っ飛び、緑谷は引っ張られ3人を引き離す。

「行かせへん!」

「行かせねえ!」

続くのは爆風をもろともせずに進む夜々だった。その次が咄嗟に氷で防御した轟で、空中移動をしていた爆豪は2人よりも踏ん張りが利かず、一番の被害を受けていた。

「テメエもだ酒井!」

「んな! またそうやって!」

轟は氷の道を形成して夜々を足止めし、当の本人はその上を滑走して加速する。

「クツ、間に合うか!!?」

ー

ー

ー

『ゴオオオー!?!? 第一種目をトップでゴールしたのは、気付いたら前に現れたダークホース……緑谷ア 出久ウー!?!?』

「チツ……」

「ハア……やられた……」

「クソガアアア!!?」

続いて後続がゴールするが、上位2〜4位の顔には不満の表情が見えていた。

(轟はんの妨害さえなければまだ……んや、言い訳やなコレ)

次々とゴールしていき、やがてミッドナイトが笛の代わりに鞭を振って音を鳴らす。

「そこまで!!? さあモニターを見て、これが第一種目を突破した者たちよ!!?」

第一種目の結果、夜々は3位という記録を残した。ちなみに2位が轟で4位が爆豪だ。第二種目の参加券を手にしたのは上位42名。脱落したのは43位以降の生徒たちだ。

「落ちちゃった人もまだ見せ場はあるから安心しなさい! それよりもここからが本選よ! 第二種目は……………」

騎馬戦よ!!?

「……………チーム戦や」

第一種目はいわば予選。本戦とも言える第二種目は“騎馬戦”だった。

個人競技でない事に戸惑う者もいたが、ミッドナイトは説明を続ける。

「ルールを説明するわ。まず2〜4人のチームで自由に組んでもらい騎馬を作ってもらいます。基本的なルールは騎馬戦と同じだけど、違う点といえば障害物競争の順位の結果が、各自に振り当てられたポイントになるということ! ポイントが高い人ほど狙われてしまう下克上サバイバルよ!!?」

「なるほど。最初に動くのが辛い……………か」

そう緑谷は考察するが、ミッドナイトの次の説明で表情を固めさせる。

「次にポイント。ポイントは下から5ずつ増えていくわ! だけど1位だけは1000万Pよ!!?」

「……………ん?」

下から5ポイント。つまり第一種目で42位だった者の持ちポイントは5ポイント、41位は10ポイントだ。

しかし一位だけは……………

「1000万ポイントよ」

「ええええー！ツッ!?？」

大事な事なので2回言ったのか、改めて言われて緑谷はあからさまに挙動不審になる。

┆

┆┆

┆┆┆

緑谷が混乱しようとも説明は続いた。

要点をまとめると以下の通りだ。

- ・2〜4人で1チームの騎馬を作る。
- ・ルールは基本的に通常と同じ騎馬戦。
- ・ハチマキを奪われる。騎馬を崩される。そのどちらになっても失格にはならない。

・悪質な崩しは一発退場。

・騎手は騎馬を含めた合計のPのハチマキを首から上に巻く。

・ポイントは下から5ポイント。1位だけ1000万ポイント。

・競技を行う制限時間は15分。

説明が終わると15分だけ、それぞれが自分の騎馬、自分のチームを築き上げる時間が設けられた。時間がたったところで再度ミッドナイトが呼びかけ確認する。

全チームが完成し、それぞれがグラウンドに散ってスタート位置につくとプレゼント・マイクに実況権が移った。

そして彼のスタートの合図で第二種目が始まる。

『さあ始まつぞ!!?まさにな、合戦がスタアアアアー！……つてなんだありや!!?おいイレイザー!!?アレって有りかよ!!?』

『有りだろ。誰が誰と組もうが自由だからな』

『いやでも流石にどうよアレ!!?』

観客席も少しザワつき、ある騎馬に注目が集まる。

「うっしやー、気張っ……あ、騎馬と気張るでダジャレになる……頑張るで!!?」

その騎馬の騎手である夜々は、張り切った様子でそうチームを鼓舞している。

しかしその騎馬の両翼にいるクラスメイトの顔は暗かった。

「うっ……………胃が痛い」

「奇遇だね麗日さん。僕もだよ」

右翼の麗日は顔色の悪いまま無理にでも笑みを作り自分を保ち、左翼の緑谷も彼女に同情しながらも苦笑いを浮かべる。

そして夜々を乗せ2人を引つ張るポジションである先頭はというと……………

「……………足引つ張つたら殺す」

「ヒツ……………」

既に「血管が切れるんじゃないか」と、疑わせるほどに青筋を浮かび上がらせた爆豪がいた。

その様子に麗日は子鹿のように足を震わせる。

『どうやら酒井に丸め込まれたみたいだな』

『1位、3位、4位が同じチームって大丈夫かよ！盛り上がり欠けたりしねえ？』

『知らん』

「またそうやって君たちはボクの手を……………」

そして人知れず1人の男子生徒は憤怒の形相を浮かべ、ターゲットを夜々たちに絞った。

13. 鬼と騎馬戦（前編）

「勝己く組もうやー!」

「ああん!?!」

説明が終わると、夜々は真っ先に爆豪に交渉を持ち掛けた。

夜々は実力者だ。鬼火のような牽制技も持っている。組めば勝利に近づく事は間違いないだろう。

「ぎっけんな。俺はテメエもぶっ倒す…組んだらそれができねえじゃねえか」

しかしそれが彼の答えだった。

夜々は爆豪にとって好敵手ライバルでもある。ここで彼女と騎馬を組むという事は、少なくとも第二種目中は彼女を相手に戦えないという事だ。

「ええー、真っ先にうちに誘ってもらえて内心ニヤニヤしとる癖に………」

「ニヤニヤなんざしてねえ!!?」

「ま、えっか。勝己が無理なら出久と組もう」

爆豪はその場を去ろうとするが、同じように背を向け歩き出そうとした夜々の独り言を聞いて彼女の腕を掴む。

顔は背けたままノールックでだ。そして白目を剥けたまま、コメカミをピクつかせて振り向く。

「なんでそこでクソデクが出てくんダア?」

「別にええやん、うちの勝手やろ。あ、出久いた。じゃあの!」

「あ、待てこら!」

手を振りほどき、素早く緑谷の元へ移動する。そして素早く彼女は交渉した。

「うちと組もう!」

「え、よっちゃんと………いいの? 僕1000万ポイントだから、みんなから狙われるよ?」

「かまへんかまへん。あとお茶子はんも同じチームなん?」

「うん。力不足かもしれへんけど、デクくと組ませてもらいました」

「そかー、うちも入ってよい？」

「勿論だよ。よっちゃんがいれば……………」

そこまで話が進み、ようやく爆豪が追い付き夜々の肩を掴む。

「待てや。話は終わってねえつつてんだろ？」

「ば、爆豪……………くん……………」

爆豪の登場に、既に緑谷と組んでいた麗日は固まる。緑谷は緑谷で何か嫌な予感を感じ、額に汗を滲ませる。

「なんや〜？　なんか用？」

「俺は別に組まねえとは言ってねえ」

本当は戦えない事を理由に、夜々と組むつもりはサラサラなかった。しかしどうも緑谷を引き合いに出される…それも引き合いに出した本人が夜々だと、どうしても爆豪は黙っていられないたちなのだ。

無論、夜々はそれを知った上で動いているわけだが……………

「あ、そうだったん？　でも出久たちともう組んでしもうてな……………せつかく組んでもらったのに、やっぱゴメンで抜けるのはうちが納得できへんわ」

「僕は別に構わな……………」

「うちが、納得、できへんの！」

嫌な予感を察知していた緑谷は、この先に起こる事を何となく予想。そして回避しようとするが、夜々によってその策は潰れる。

「だからうちと組むとしたら、勝己が来るしかないで？」

「ああん!?　なんで俺がクソデクと丸顔のチームに……………」

「ああー、しゃあなしやなあ。いくら勝己でも、うちら抱えて勝利するのは難しいらしいで？　しゃあないから他の人あたり行こ」

夜々は緑谷と麗日を引っ張り、別のメンバーを探しに行こうとする。しかしまた、彼女の肩を爆豪が掴む。

「バカにしてんのか……………？」

青筋を浮かべてプルプルと震える彼を見て、夜々は何かを考えるように人差し指で唇を触れる。

「んー、でも難しいやろ？」

「ぎっけんな!!? お守りしながらでもトップ爆走してやるわ!!?」

夜々の仕草がわざとで、自分が嵌められている事も自覚している。しかし聞き過ぎることが出来ない内容のせいで、引っ込みがつかない。

結果彼は両手を爆発させながら、包み隠さず宣言するように叫んだ。

「これで4人やな出久」

「……………そうだね」

「一応聞くけど勝己、最低限の協力は?」

「……………してやる」

「仲間は?」

「殺さねえ」

「よっしゃおいで!」

「クソガツ!!?」

コレが第一種目の1位、3位、4位が1つのチームになった経緯である。

――

――

「マジか…あそこが一括りになるのかよ……………轟い、マジでポイントあそこから取んの!!?」

爆豪の両肩に手を置き、無邪気な笑みを浮かべながら騎馬を進める夜々。それを見て、上鳴は自分の騎手を見あげて不安を口にする。

「ああ。酒井たちが組むのは想定外だったが、ポイントは必ず奪うぞ!」
「そうだな。俺個人としても、緑谷くんたちには勝ちたい!」

騎手は第一種目で2位の成績を収めた轟だった。そして騎馬を牽引するポジションにいるのは飯田…彼も夜々たちを見て少し表情を曇らせるが、それは一瞬のことで決意を口にする。

「ですが仕掛けるのは予定通り終盤ですわね」

「ああ。それまでに準備を頼むぞ、八百万」

最後のメンバーである八百万に轟は告げ、彼は競技に集中した。

「」

「」

「」

「1000万貫ったあーーッ!!?」

「やらへんよ!」

「ー ボッ ー」

「うわっ!」

夜々を中心に周囲を漂う火の玉に、炎を対処できないチームは近づく事をたじろぐ。

「今だ、やれ!」

しかし中には勿論対処できる”個性”を持った者もいる。

丁度今仕掛けて来ているのは、1-B組の者で粘着性の固まる液体…ボンドを噴出させる”個性”を持っている。

それに火の玉…もとい、夜々が出した鬼火は飲み込まれる。

「行くぞ!」

「俺たちも行くぞ!!?」

開いた道を通って距離を詰めようとする騎馬に続き、周囲を他チームの騎馬に包囲されてしまう。そんな状況を前に、夜々は慌てず下に指示を出す。

「頼むわお茶子はん、勝!」

「承知!」

「ケッ!」

夜々も仲良しこよしで幼馴染と組んだわけではない。既に緑谷と組んでいたため誘う手間こそ省けたが、麗日に関しては夜々が一番欲していた”個性”の持ち主である。

「準備オーケー!」

麗日は手早く触れて、緑谷、夜々、そして自分を無重力にする。そして騎馬の先頭である爆豪は両手を離れた。

といっても、麗日の個性で夜々の現在の体重は0である。爆豪の肩を掴んでいる緑谷と麗日のクロスした腕で十分に支えられるのだ。

そして現在無重力になっていないのは爆豪のみ…つまり両手をフ

リーにした今、彼はいつものように空中移動を容易く行う事ができるのだ

「つしゃあ！ 行くぞオラツ!!?」

ー Boom! ー

『酒井チームここで空を飛んで危機を脱したー！ツ!!? つうかアイツら、飛び過ぎじゃね?』

『既に何度か見たな』

「丸顔！」

「うちの名前は麗日 お茶子です！」

爆豪に多少慣れたのか、そう返しながら夜々以外の無重力状態を解除して着地する。

「出久！」

「わかってる！」

『おおー！ツ!!? 酒井チーム、騎馬が崩れたか!!?』

『いや崩している…組み直しているって言ったほうがいいな』

無重力状態の夜々を麗日が持ち、その間に爆豪と緑谷が位置をチェンジする。

「麗日さん！」

「はいはい！」

今度は夜々をそのまま、爆豪と自分を無重力にする。そして先頭の緑谷は全身に力を張り巡らせる。

「ワン・フォー・オール 8%：フルカウル!!?」

『ここでまた爆走!!? 緑谷がメンバー引っ提げてステージを駆け抜けるー！ツ!!? 組み直すのは有りか!!?』

「普段は仲悪くも仲間の為に協力した上での完璧な連携……好みツ!!? 故にあり！」

『いや好みとかじゃなくて……いいのかイレイザー?』

『緑谷は個性の扱いがかなりマシになってるな』

『無視すんなよ』

ステージの反対側まで移動したところで、緑谷は止まり麗日も個性を解除する。

「お疲れさん。お茶子はなんと何回できる」

「うっ………何度でも、やってやんよ!」

使い過ぎると吐いてしまうらしいが、この様子ならまだ平気そう
だ。

「……………夜々。クソ鳥が来んぞ」

「やっぱりかい……………」

今までの行動は、最初の関門である他チームからの集中狙いを乗り
越えるためのものである。だが同時に、もう一つの目的を持ってい
た。

「なっ、突風!?!?」

「嘘だろ! 俺たちのハチマキが!!?!?」

突如として吹き上がる突風……それも下から上へだ。

その突風に掠め取られ、舞い上がったハチマキを飛行して悠々と回
収する姿があった。

「随分仲良さそうに逃げてくれるじゃないか……………」

黒羽は待つているハチマキを回収した後、夜々目掛けて急加速して
接近する。

「死ねえ!!?!?」

「鬼火!」

現在左側にいる爆豪は、左手のみ一瞬離して黒羽に爆破を放つ。そ
して夜々も鬼火を彼との間に出して牽制する。

「チツ……………」

それを見て、黒羽は自分の騎馬の上へ飛んで撤退する。

『アレは有りか?』

『ダイレクトだから……………有り!』

進行役兼審判をしているミッドナイトがそう宣言する。

「さて……………どうやってハニーの点を取ってあげようか」

「いや黒羽、どうせなら緑谷 出久の1000万ポイントを狙ってく
れ」

「何を言う。ハニーの方が価値があるぞ?」

「恋は盲目と言うことでしょうか…」

「……………すまんお茶子はん。あんた差し置いて、うちが吐きそう」

鳥肌を立てて口を手で押さえる夜々に、麗日は軽く同情した。そしてそれは麗日だけでなく、観客の……………少なくとも女性の観客は皆夜々に同情し、男性客の何人かは黒羽のセリフに引いて冷たい視線を投げかける。

「おや？ ふふん、嫉妬かな…モテるって……………罪だね」

冷たい視線が更に強くなるが、黒羽は一切気にしない。爆豪と同じように観客のヘイトを集めているが、違いといえば黒羽の方は天然だと言うことだろう。

「おい…なんだ？」

「今日は一日かけて晴天なんじゃ？」

空は唐突に曇りだし、そして1分も経たぬ間に雨が降り出した。それもグラウンドだけ。

「これだから糞鳥は……………アイツの”個性”は「だいてんぐ大天狗」…得意とするのは範囲攻撃と遠距離攻撃。天気と風を自在に操る。オマケに鳥系統の異形付き」

「強個性や…」

麗日は生唾を飲み、爆豪は「おもしれえ」と睨み返す。そして緑谷も神経を尖らせて警戒する。

「それじゃ……………少しの間、止まって貰おうか」

「…プハツ!!? 走れ出久!!?」

夜々は指を噛んで血を吸い上げ十升モードを発動する。

そして指示を出して走り出させる。

「逃がさないよ」

「… ピシヤアアアン!!? ……」

「なっ、今のは!!?」

『ここで落雷……!!? 今のは”個性”か!!?』

『黒羽 礼文。自然現象を操る”個性”らしい』

「黒羽くん。悪質な崩し行為は退場よ？ 当たってないから、今回は見逃すけど……………」

「ふふ、嫌だなミッドナイト先生。ボクはちゃんと加減をしていますよ。」

軽く痺れて動けなくなるくらいに……………」

「妖力的な何かが高まつとる。3人とも、踏ん張り！」

夜々はそう言つて天に向けて人差し指を突き立てる。

その先端からは朱色を帯びた光線が現れ、それは雨雲を切り裂きながら天をかける。

「グギギ…」

「デクくんファイト！」

「膝ついたら足折るぞクソデク！」

鬼砲を撃つたことによつて、推進力か上から下へと働き緑谷を苦しめる。右手には右足、左手には左足、そして爆豪と麗日の手を通して体重が両肩にかかる。

緑谷のフルカウルが無ければ騎馬は崩れていただろう。

「次を落とす前に雲を散らすんだね！ はあく！ 流星はマイハニー！」

「……………」

自分の騎馬の上に戻つた黒羽は、そう言つて薄くなつた雲を見上げる。その言動に引いているのか、騎馬を担う1人の生徒は無言で目を背ける。

「……………計算通りッ!!?」

夜々が天に向けていた指先を地面に向けると、雲を裂き続けた光線は分裂し、流星群のようにグラウンドに降り注いだ。

『オマツ!!? 悪質な崩しはアウトつつたろ!!? 悪意！ ダメ！』

絶対！ リピート、アフターミー!!?」

『落ち着けマイク。アレは誰にも当たつてない』

『Why!?!?』

『見ればわかる。土埃が晴れるぞ』

実況席にいる相澤がそう促すとマイクはもちろんのこと、観客席の人たちまで土埃が晴れるのを目を凝らして待った。

「あれは…なるほど……………」

「あのチーム。……………計算してたのか？」

土煙が晴れたところには、いくつものクレーターが重なって並んで

いた。それもグラウンドの端にいる夜々たちを囲うように…

夜々の十升モードから繰り出される”鬼砲”は操作性に優れている。彼女はそれを分散させて地上に降り注ぎ、自分たちのいる場所を陸の孤島に作り変えていた。

『分散させたレーザーで地面を抉り、いくつものクレーターを並べる。そうやって他とのチームとの間に谷を作ったみたいだな』

クレーターの大きさは深さ直径ともに1〜2m。それを並べてできた谷だ。身軽に動けるならまだしも、騎馬を組んだまま超えるのは苦勞するだろう。

『超えられないこともないだろうが、谷を越えようとするれば決定的な隙になるだろうな』

（だが合理的と言えるかはグレーだな。この先はどうするつもりだ？）

ここまでの行動で生まれた現状に対し、相澤は意味深に心の中で呟く。口にしないのは、競技中にヒントを与え過ぎるのはフェアではないからだ。

クレーターによって出来た谷。

それを難無く超えられるのは飛べる”個性”か、橋を作れる”個性”に限定される。

それに気付いている相澤は、2名の生徒に視線を配った。

「ほな、ここからは予定通りと臨機応変の中間で……………」

「茨さん。2人を巻いて下さい」

「はい」

「……………」

黒羽は徹鐵という名の男子生徒の両脇に腕を突っ込み、そのまま飛んで持ち上げる。

持ち上げられた彼の足には薔薇が巻き付いており、残りの2人も芋づる式で宙に浮いた。

「3人抱えて空を飛ぶなんて…あの翼、見かけによらず凄い筋力だ……………」

「出久、もうちよい下がるで。直接攻撃が”悪質な崩し”として判断

されかねない今、遠距離攻撃は当てられん」

夜々はこのチームで勝つ見込みがあると判断しているが、それでも弱点は存在する。それは轟の氷結や黒羽の落雷のような、拘束技や隙を作りやすい手段がない事だ。

「テメエらだけ下がってる。俺が行く」

「勝己!?」

「来るのを指咥えて待つてられるわけねえだろポケツ!!」

『ここで爆豪が迎撃に動くーッ!!?念の為に言っておくが悪質な崩しは…』

『流石に分かつてるだろ。くどいぞ』

いつものように爆破の推進力で飛び、黒羽チームのハチマキを狙う爆豪。

もちろん相手は抵抗し、女子生徒：塩崎 茨が頭から髪のように生えたツルで壁を作る。

「フン：無鉄砲に突っ込んでくるなんて、愚の骨頂だね。君もなんか言つてやんなよ」

「：そうだな。チームの意見も聞かず、自分が全て正しいと思つて行動をする。味方の足引っ張つて無様晒すのがオチだろ」

「あんだとゴリアツ!!?」

飛ぶたびに聞こえる爆破音が途端に途切れ、飛ぶことをやめた爆豪は背中から地面にへと落ちていく。

「なっ!??どないした勝己!!?」

「この高さは危ないかな?」

黒羽がそう言つたかと思うと、爆豪の身体が捲き上る突風で減速し無事に地面に落ちた。

「グエツ!!?」

爆豪は黒羽：ではなく、塩崎のツルで縛り上げられている男子生徒を睨みつける。その睨んだ相手の顔に、爆豪は見覚えがあった。

「言つただろ? 足下掬われるぞつて」

彼はUSJ事件後の臨時急行明けて宣戦布告に来た生徒の1人だった。爆豪を前に怯まず「正直、幻滅だな」と言つて宣戦布告をし

ていた彼が、黒羽チームの騎馬としてそこにいた。

名は心操しんそう 人使ひとし。

第二種目に参加している唯一の普通科だ。

「高えところから見下しやがって……調子こいてんじやあねえぞ!!」

はち切れんばかりに額の血管を浮かせた爆豪は、先程よりも強い勢いで黒羽チームに迫る。

「同じことを繰り返すんだね。同じ結末を迎えるだけだよ」

「ぎっけんな!!? つうかテメエもダクソ鳥野郎!!? 風なんか起こしやがって、俺を助けたつもりか!!? 余計なお世話なんだよ!!?!!?」

「冷静さを欠いた時点で敵じゃない……が、面倒だ。茨さん、次の攻防で彼を拘束してください」

塩崎は頷きツルを展開する。

流星の爆豪でも4対1で……オマケに冷静さを欠いているのなら捕まる可能性も低くはない。

だが夜々も黙ってそれを待つつもりは無かった。

『爆豪が単体で攻める……ツツて!!? 一方で本隊は何やってんだ!!?』

『あれは……いやマジで何やってんだ?』

「ちよちよちよちよ、よっちゃん!!?」

「うりうり」

出久と麗日の2人に担がれている夜々は上半身を倒し、緑谷に胸を押し付ける形で後ろから抱きついていた。

「酒井くん!!? 生徒は健全であるべきだ!!?」

「緑谷テメエ……!!? 羨ましけしからん!!?」

「Fooooo!!?」

「!!!!Fooooo!!!!」

真面目な飯田は赤面しながら遠くにいても咎めようと大声で注意をし、峰田は血の涙を流しながら緑谷を呪った。

観客席の誰かが歓声を上げると、つられて多くのノリの良い観客が同じように黄色い歓声を上げる。

？」

「まあだやられた事を根に持つてるん？ 自業自得やん」

「でもよっちゃん……このまま逃げて僕らは、勝ったって言えるのかな？」

爆豪に対して呆れた表情を浮かべていた夜々だが、緑谷の言葉にピクリと反応を示して深呼吸を挟む。

「……………せやな。折角の晴れ舞台や！ ド派手にアイツのポイントぶん取ってやろうや!!？」

「わあく、大変そく。頑張ろく」

「お茶子はん！ そろそろ戻ってきてきて!!？」

土埃が舞う中。陸の孤島で2つのチームが向き合う。

そして……………

「轟さん。準備はできてます」

「ああ……………そろそろ俺たちも動くぞ」

終始夜々たちのポイントを狙っていた轟は、目を光らせ絶好のタイミングを逃すまいとしていた。

「おおおお……怖いなあ……………」

もちろん夜々もそれには警戒していた。だがそれでも、全てが予想通りに動くわけではなかった。

14. 鬼と騎馬戦（後半）

抱えてるポイントを持って逃げ切る。

それが最善策だが、このチームは合理的に生き残りたいわけではない。生き残りレースで勝ちたいのではなく、不合理でもトップ争いで勝利したいのだ。

「散れ！ 人間風情共!!?」

「踏ん張れ！ 3人!!?」

ハチマキどころか、強い突風で騎馬ごと飛ばされかける。

足の裏が地面から離れる寸前に騎手である夜々は「鬼圧」で自分の重量を上げて防いだが、踏ん張るだけで精一杯で身動きが取れずにいる。

「よっちゃん！ 対象を僕にして！」

言われて騎馬の先頭である緑谷に、自身にかけていた術の矛先を移す。

すでに緑谷はフルカウル状態で、そのまま走り出すと後続の2人の足が浮く。

「えっ!!?」

つまりこの騎馬を支えるのは緑谷ただ1人になる。

そこに伸びていたツルが緑谷の足に絡まり、緑谷は移動手段を奪われる。

「氣い抜いてんじゃねえぞゴラア!!?」

「アチツ！」

爆豪は片手を離して蔓に向けて手を爆破させる。

その熱で緑谷は眉間に皺を寄せるが、ツルは足から剥がれて抜け出す事が出来た。

「黒羽さん！ 今の状態で落雷はダメですからね!!?」

「ふうー、わかっている。わかっているとも！ クソツ!!?」

血走った目で緑谷を睨みつける黒羽と目が合い、緑谷は胃が痛くなるのを感じた。それを見た夜々は激情しているが故にコントロール出来ず、黒羽が落雷を落とせない事を察した。

「ただあの竜巻の中をどう突っ切るか……………」

「……………酒井、一種目みてえに飛べねえのか？」

「突っ切るだけならできるやもしれん。ただハチマキは取れんし、軌道修正して戻ってくることはできんよ？」

「チツ、マジで突っ切るだけか」

「残り時間は……………で……………きつと……………そうなる……………」
「ブツブツ

……………」

「だから……………それなら……………うん、でも……………そうか」
「ブツブツ

「ダアーウルセエ!!? テメエのブツブツ聴くとサブイボ出んだよ!!
?」

「わ! ゴメン!」

ブツブツと独り言を続けていた緑谷を爆豪が咎める。気がつかなかったが、黒羽と目があつた後から独り言を始めていたようだ。

「…デクくん。もしかしてなんか作戦が……………」

「うん…3人とも聞いて」

—

—

—

『残り時間は1分を切つた—ツツ!!? 陸の孤島の2チームは未だに拮抗状態ツツ!!? 竜巻で近付けさせない黒羽チームと、塩崎ガールのツルから逃げる酒井チーム!!? エンターテイナーからすれば、いい加減場面を変えてほしいぜ!!?』

『黒羽は多少苛立ちが収まつてるな。言われずともそろそろ動き出すだろう……………酒井たちも何か企んでるみてえだが』

音声が拾えないほどの小声で最後に付け足す。

それを隣で聞いたマイクは気になつたが、指摘すれば「言つちまつたらフェアじゃねえだろ」と言われるのが眼に浮かぶのでスルーして実況に戻った。

「黒羽ア!!? いい加減頭冷ませ!!?」

「わかっているよ! つたく、どいつもこいつも…僕は至って冷静だ

!!?」

(じゃあなんでキレてんだよ)

徹鐵と黒羽の掛け合いを聞いて、心操は口にせず、心に呟く。

「ふうー………3人とも、そろそろ仕掛けるからね?」

大きく深呼吸を挟んでから、黒羽はそう宣言する。

夜々たちは身構え、ある人物の指示を待つ。

「今度こそ………ハニーのポイントは僕が貰うからね!!?」

「だから3位じゃなく1000万を取れえ!!?」

徹鐵の叫びに呼応するかのよう、再び上空の雲行きが怪しくなる。

セーブはしているが感情の昂りもあり、先程よりも短い時間で天候は変化した。

またも落雷と誰しもが思い、夜々も十升モードを発動して天へ撃とうとする。

だがそれよりも早く自然の猛威がその身に降り注いだ。

「雷……やない!!?」

それは雷ではなく、極寒の豪雪地帯を彷彿させる猛吹雪。天から地へと不自然にソレは垂直に吹雪いていた。それも最初だけで、上下左右前後へと風向きは変化を続ける。

「んのやろーッ!」

「待て酒井!!?まだ撃つんじゃねえ!!?」

爆豪の待ったで鬼砲を撃つのを躊躇う。

すでに騎馬を保つのがやつとの状態……この吹雪の中で天気を変える程の火力を出せば、推進力で崩れるのは眼に見えていた。

「合図はまだかいな!」

「まだ!」

黒羽チームの騎馬は未だに竜巻の中心に陣取っており、手出しが出せない状態。そもそも酒井チームと黒羽チームがいるのは、夜々が作り出した陸の孤島の上だ。

他のチームも手を出すどころか、そっち側に行けずにいる。

「デクウ!!?」

「まだ……………」

やがて空が僅かに明るくなるが、それは陽の光ではなく迸る雷の光だ。

「まだ……………」

「今度こそ……………ポイントは僕の物だ!!?」

その時……………陸の孤島の外側。

観戦客たちは目を向けてなかったステージの一角で、何かが光った。

「今だ!!?」

「おっしやあ!!?!!?」

指先を天に向け、朱色のレーザーが空へ伸びる。一瞬遅れて落雷が酒井チームの騎馬へ落ちるが、それはレーザーと拮抗し阻まれる。

「ふーん。防ぐんだ……………なら巻き上げるだけのこと!!?」

吹雪+レーザーの反動によって騎馬のバランスが危うくなり、それを見越して黒羽は風力を強めようと操作する。

しかし……………

———— BZZZZZZZZ!!?!!? ————

「グギツ!!?」

「ツ!!?」

黒羽を支えていた3人は短く唸って動かなくなる。

そしてそれは騎手の黒羽も同様で、強い痺れを感じながら天候操作を止める。

(この痺れは雷!!?…僕に限って操作をミスるわけ……………)

冷静さを欠けば精度は落ちるが、幼い頃から使ってきた”個性”である。制度のブレる範囲を黒羽はもちろん把握していた。

「テ……………か!」

辛うじて踏ん張りながら徹鐵が言う。その言葉を向けた先にいるのは、轟チームの騎馬の1人である上鳴 電気だった。

ただ当の本人…および轟チームの表情は暗い。というよりは強い焦りが見えた。

八百万の”個性”でゴム製の衣類を作って身に纏い、上鳴の”個性

”による放電で黒羽チームを無力化する。ここまでは轟の作戦通りだ。

唯一の違いは、黒羽の攻撃を酒井チームが凌いだことだった。

鬼砲を撃って抵抗すれば、黒羽が風を使って詰めに入るのは予測していた。緑谷や爆豪も同じように予測したはずだと、轟は思っていた。

”撃てば負ける”…………それを踏まえれば一か八か避けようとする。それが轟 焦凍の予想した酒井チームの動き。

「何故100%負ける方を選んだ!?」

「轟くんたちなら、絶対にこのタイミングを逃さないと思ったよ！」

彼の存在は、緑谷が更に先を見据えていた事だ。

緑谷は轟ならここまで予測しているだろうと予測し、ここで漁夫の利に出ると判断。黒羽チームと酒井チームの両チームを電撃で奇襲し、飯田の機動力で両方を奪い取る事ができる。

それを緑谷は知っていた。

「やるやん！ あとはクソ鳥の搔っ払って終いや！」

轟が黒羽の”個性”を止めてくれるなら、酒井チームの騎馬はバランスを気にせず鬼砲が撃てる。

そしてその後で、逆に漁夫の利を得ればいい。それが緑谷の作戦であり、一種の賭けだった。

(俺の”個性”なら両チーム凍らせられた。だがそうすれば黒羽が飛んじまうから上鳴に”個性”を使わせた)

「今から間に合うか…………いや、間に合わせる!!?」

”個性”を使い陸の孤島へと橋をかけ、そのまま酒井チームを捉えようとする。

騎馬の足元に氷の道が伸びるが、それも予測していたのか難無く避けられてしまう。

「当たるかボケエ!!?」

いつのまにか騎馬の先頭が爆豪に切り替わっており、例の手段で空を飛ぶ。

そのまま硬直したままの黒羽チームへと迫り、夜々はその手をハチ

マキへと伸ばす。

だが緑谷たちが予測したのはここまでだった。

「それで良い轟君、間に合った！……皆、最後の攻撃を仕掛ける。この後、俺は使えなくなるが、頼んだぞ」

その言葉は轟チームの皆には聞こえたが、他の者には聞こえていなかった。

「行くぞ轟君！ トルクオーバー…レシプロバースト!!?」

「ッ！」

飯田の”個性”：「エンジン」のトルクと回転数を無理矢理上げ、10秒ほど爆発的な推進力を生み出す裏技である。ただ使用後は反動でエンストしてしまうというリスクをもつ切り札……こちらもまた賭けだった。

ー Boom! ー

驚異のスピードで迫る轟チームへ反応できたのは、地の反射力が優れていた爆豪だけだった。

夜々の両足を乗せている自身の両手を爆破させ、打ち出すように彼女飛ばす。

「うわっ!!?」

騎手を失った騎馬の前を、飯田が牽引する轟チームが通り過ぎる。

同時に夜々が先ほどまっていた場所を、轟の右手が通過した。

爆豪の行動がなければハチマキは取られたかもしれない。

「な、な? ……なんやねん!!?」

身体が反応しただけで打ち出されたことに今気付いた夜々本人はというと、今ちようど黒羽の頭上を通り過ぎるところだった。

ワタワタと四肢を振り回して、危なからず黒羽のハチマキに指を引っ掛ける。

『ここで轟チームが爆進!!?だが惜しくも避けられ、酒井ガールが宙を舞うーッ!!?』

『もはや見慣れた光景だな』

実況席からそんな事を言われるが、ほぼ偶然だが黒羽のハチマキを空中で奪った夜々はホッと一息をつく。

奪ったことで油断してしまったのだ。

『しかしここからどうする!??陸の孤島を飛び出した鳥がハゲタカ共に狩られるぜ!??』

「げっ!??」

それを聞いて気付いた夜々は、すでに十升モードは切れており鬼砲による軌道修正などはできない。

現在夜々は麗日の”個性”で無重力状態…側から見れば、高得点をぶら下げた風船が宙に浮かんでいる状態である。

彼女には成すすべはなく「あかん。やつちまった」と脳内で呟くだけだった。

「アエエエエク!!?!?!」

しかし男どもは違った。

騎馬は解体され、緑谷は自分に向けてドロップキックを放とうとする爆豪に面食らう。

しかし爆豪の視線が夜々から外れていないことに気付き腰を落とし構える。

「フルカウル…8%じゃ足りない…けど単純な話だったんだ。2つ使えばいい」

その構えはバレーボールのレシーブのようだった。しかしボールの代わりにその両手に飛び込んできたのは爆豪の両足だった。

「16%…ツイン・スマッシュ!!?!」

「爆速ターボ!!?!」

緑谷の振り上げるその両手に合わせて、爆豪は”爆破”の個性で更に加速する。進路にいるのは宙に浮かんだ夜々と、空に向けて捕縛系の個性を伸ばす他チームたちだ。

「歯あくいしばれや!!?!」

「ひゃっ…」

風を切りながら鬼の形相で突っ込んでくる幼馴染を見て、思わず目を瞑る夜々。その次に来るであろう衝撃に備えるが、想像してた衝撃とは違い優しくそれはやってきた。

俗に言うお姫様抱っこ。

空中でその体勢を爆豪は作ると、器用に手首を捻って掌を爆破。軌道修正と同時に、他チームがハチマキを奪うために伸ばしていたテープや長い舌を払いのける。

やがてその他チームの頭上をも越えて地面に着地する。

『……………ピピ カシヤツ……………ここで時間一杯！ 試合終了……………ツツ！！？』

「写真撮った！ 今マイクはん写真撮った！！？」

『気のせいだぜ。早速、結果発表だ！！？ 一位は見てわかる通り、酒井チーム！ FOO！』

「！！！！FOOOOO！！？」

「いっそ殺せ……………」

マイクの茶々に続き、観客席から黄色い声援が夜々たちに送られる。

『この空を舞ったジュリエットと颯爽と駆け付けたロミオに盛大な拍手を————！！？』

「やめい！ ンでお前はいい加減離さんかい！」

「グツ」

顔を殴れば、ようやく腕から地面に降ろされる。降ろされた本人はそのまま両手で顔を隠すがそれも当然の心境だろう。なんせ雄英体育祭は生でテレビ中継されているのだから。

更に赤くなる顔を隠すが、恥じらいのせいかつノまで真っ赤になる。それは両手の隙間から飛び出ている隠せてはいなかった。

その姿はアツプで画面に映される。

それを見て”2ちゃんねる”に彼女の話題が上がり、そのスレでファンクラブ設立の議題が上がるのは知る由もない。

『2位は序盤に他チームのポイントを狩りまくった黒羽チーム！ 3位は逆に守り抜いた轟チーム！ 4位は……………悪い全然見てなかった、瀬呂チーム！ この4チームが決勝トーナメント進出だ————！！？』

「そんな————！ 見といてよ！！？」

「結構頑張ったんすけどね？」

「不覚……………」

「決勝で挽回しようぜ」

そう抗議の声などを挙げるのは、芦戸 三菜、瀬呂 範太、常闇 踏陰、切島 鋭児郎のA組の4名だった。

テープの”個性”を持った瀬呂を騎手にしてハチマキを奪い、芦戸の酸を撒いて牽制し常闇の影で攻撃を防ぐ。先頭はタフネスに定評のある切島で、目立たなかったのは残念だが割とバランスの良いチームだった。

ともあれこれで騎馬戦は終わり、昼食を挟んで決勝トーナメントが始まるのだった。

「……………フツ」

「……………は？」

そして何故か勝ち誇った笑みを浮かべた爆豪と、珍しく青筋を浮かべてメンチを切る緑谷の存在は、同チームの麗日のみが知ることとなる。

ー

ー

ー

「……………チツ」

そう舌打ちをして通路を歩いているのは、騎馬戦で3位に食い込んだ轟だった。

真ん中から右は白髪、左は赤髪。それに加えてオッドアイという左右非対称な容姿が特徴の彼だが、クラスで群を抜くイケメンの部類である。

しかし今はその顔を、勿体無いことに歪めて苛立ちを露わにしていた。

そんな彼を待ち伏せしていたのか、一人の男が曲がり角から姿をあらわす。

ガタイが良く、眉毛や髭が燃えている事から炎系の”個性”である事は間違いないだろう。

「情けない。焦凍、何故左を使わん」

「……………」

轟はその男を睨むと、何も言わずに横を通り過ぎる。

それに対し、男は轟を目で追いもせず背中越しに話し続けた。

「いい加減子供染みた反抗は止めろ。お前にはオールマイトを超えるという義務がある」

「……………」

「聞いているのか！ 焦凍！」

「聞こえておらん思うよ？」

「ッ！ 誰だ!？」

第三者の声に男が振り向くと、眼前にいたのは一人の少女。

その少女は150もいかない身長で、轟の耳に手を伸ばし塞いでいた。

その小さな身体は着物を羽織り、下駄を履いた足で僅かに背伸びをしている。

「??？」

両耳を初対面の少女…または幼女に抑えられた本人は、父親への憎悪を「？」で上書きしていく。

「久しいなあ、エンデヴァーはん」

「酒姫！ 何のようだ！」

耳を押さえていた両手を離し、片手で口元を隠してクスクスと笑う。

「別に用件なんてあらへんよー？ えらいイケメンさんおるから摘み

食いしに來たんやでえー」

「はっ」

相変わらず脳内には疑問を表す記号が増殖し、そんな時によく捻り出した言葉はその一音だけ。

「ふざけるのも大概にしろ」

「いやーすまへんな。あんさんピリピリし過ぎて、無理してでもふざけてないと緊張してしまうねん」

顔を覆う炎の火力が強まるのを見て、酒姫と呼ばれた幼女はヘラヘラと距離を取る。

「酒姫って……酒井の」

「あ、知つとるん？ 儂の娘と仲良くしてくれてありがとなく」

「いや俺はむしろ嫌われて……」

「え、そうなん？ こんなイケメンを蔑ろに……あとでとつちめちやる」

「酒姫ツ!!」

轟と面と向かって話し始めた辺りで、エンデヴァーが怒気を強めて幼女のヒーローネームを呼ぶ。

「はあ……そんなカツカしてたら、嫁さんに嫌われるで？」

「貴様には関係ない」

「関係無くとも面倒ごと首突つ込むのがヒーローやねん。ういんく??」

そう言つてウイंकを飛ばす酒姫に、エンデヴァーはプルプルと震えながら若干天井を仰ぐ。よく見れば白目を向いていて青筋も立っている。

やがてそれが収まると、デカイ溜め息を吐いて歩き出した。

「貴様の相手はやってられん」

「……………」

残された轟は酒姫を見て待つが、それ以降何も言わず何の進展もない。

「……………結局何しに来たんですか？」

「んやー娘か顔馴染みを探してるねん。やけど見つからんくてな……そんな時にあんたら見つけたけん」

そう言つて懐から飴か何かの袋を取り出して、一つ摘むと口の中へと放り込む。

「イケメンさん。名前は？」

「…轟 焦凍」

「焦凍はん……あんた、自分の父親を許せる？」

唐突に突きつけられたデリケートな質問に、轟の眉間がわかりやすく反応する。

「あんたには関係無いです」

「……………なんで夜々が嫌うか、なんとなくわかったわ」

袋から二つ目を取り出して頬張って、納得したように肯く酒姫。

「きつと夜々が言いたがってる事を儂が言うのも違うやろうし…儂はそろそろ退散するさかい」

結局何しに来たのかもわからないまま立ち去ろうとする酒姫。

それを数秒置いてから……………すでにかかなりの距離がある所で轟は振り返る。

「俺ってヒーローやめた方がいいんですか？」

気が付けば口からそんな言葉が出ていた。

彼自身ヒーローを諦める気は無い……………にも関わらず、夜々の言った事が引っかけり、つい口走ってしまふ。

「……………夜々が言ったんか？」

「……………」

「…君の事を知らんから何も言えん……………否、これくらいなら言ってもええじゃろ」

困った表情を浮かべたまま頬を掻き、酒姫は轟を一瞥してか顔を背けた。

「君の名前は轟 焦凍じゃ」

質問には答えずそんな事を言い、轟を見るその目は僅かに彼を哀れむようなものだった。

そしてその目は、開会式前に見た夜々ととても似ていた。

「はあー、イレイザー昼何食うよ」

「一緒に食うつもりか？ お前の隣は騒がしくて嫌なんだが」

「あ！ イレイザーはんやん?! おひさー!」

「うわっ、先輩」

「うわってなんやー!」

酒姫はそのまま、逃げるようにイレイザーとマイクを追いかけていった。

ー

ー

ー

裏で母とクラスメイトが会敵してるなど梅雨知らず、夜々はクラスの女子グループと昼食を済ませた。

それが終われば午後の部が始まり、種目で敗退した者達が見せ場となる玉転がしや綱引きと言ったレクリエーションが始まる。

何故か男子グループが騒いでいたので、夜々は幼馴染達とはなく女子グループと共に観戦……そして途中で敗退した葉隠や蛙吹はレクに参加するが、最終種目に向けて体を休めていた。

そしてその時は来た。

『さあさあいよいよ最終種目。進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式！ 一対一のガチバトルだ！』

ブロック1

第一試合：酒井 夜々 VS 鉄哲 徹鐵

第二試合：轟 焦凍 VS 瀬呂 範太

第三試合：緑谷 出久 VS 心操 人使

第四試合：飯田 天哉 VS 塩崎 茨

ブロック2

第五試合：芦戸 三奈 VS 常闇 踏陰

第六試合：八百万 百 VS 上鳴 電気

第七試合：黒羽 礼文 VS 切島 鋭児郎

第八試合：爆豪 勝己 VS 麗日 お茶子

くじ引きでトーナメント分けされ、夜々は一気に鉄分ゼリーを飲み干す。

「開幕一番…派手に行きまっせ！」

空のバックを唾え、夜々は背中に女子グループの激励を浴びながら控え室に向かった。

15. 少年少女の一戦目

「オツシ！ んじゃ、行ってくるわ！」

「アハハハハ！ A組に吠え面かかせてやってよ!!」

気合を入れて立ち上がったのは、1年B組の鉄哲 徹鐵。夜々の対戦相手である。

それを見た物真が私怨丸出したが彼なりの言葉で応援する。

「ほら！ 君も何か言ってやりなよ。クラスメイトとしてさあ!?!」

「……………」

話を振られた黒羽は難問を突きつけられたかのように眉間にシワを寄せる。

「…悪いけどMr. 鉄。君じゃ僕のハニーは倒せないかな」

個性は”ステイール”。

防御面と耐熱性に優れている為、夜々の攻撃手段とは相性が良い。にも関わらず、夜々を良く知る黒羽は士気の下がる言葉を投げかけた。

「おいおい。そこは思っても頑張れだろ」

まだ短い付き合いだが本音しか話さず友達作りが下手。そんな黒羽を知っているからか、苦笑いを浮かべながら控え室に向かう鉄哲。

黒羽は訂正もせず、その背中を見送った。

そんな黒羽の隣に一人の女子生徒が腰を下ろす。

名は拳藤 一佳。B組のまとめ役である。

「まったく……………鉄哲は気にしてないようだけど、手厳しい事いうね」

「…僕ら大天狗の一族は、ヒーロー志望だろうとなかろうと幼少期から個性の制御を義務化されてる。それは鬼も同じ」

指を組んで目を瞑り、独り言のように黒羽は語り始める。

「その有り余るパワーを制御するために、彼女も幼少期の頃から必要最低限の腕力を癖のように維持。そして相手を怪我させないために、どうすれば効率良く弱い力で無力化できるのかを義務化されている……………彼には悪いけど、学ぶ環境と基盤が違いすぎる」

「ふーん。つまりそんな技術がある上で、血を飲んで力も込められた

ら勝ち目ないってわけね」

『ヘイガイズ！ アーユーレディ!? 色々やってきたが、結局これだぜ ガチンコ勝負！ 頼れるのは己のみ！ 心技体に知恵知識！ 総動員して駆け上げろ!』

そうこう言っている与会場の熱が高まり、見てみればフィールドに選手が2名入場してくる。

「血を飲まれる前に速攻しかければ、鉄哲にも勝ち目はあるってわけだ」

そう言つてクラスメイトの勝利を願つて、腕を回して肩を鳴らす男子生徒に目を向けた。

「…ハニーを知らないからそう言えるんだ」

「え？ 何？」

『ルールは簡単！ 相手を場外に落とすか行動不能にする。あとは、まいった』とか言わせても勝ちのガチンコだ！ 怪我等！ こちらら我らがリカバリーガールが待機してつから、道徳倫理は一旦捨ておけ！ だがもちろん命に関わるようなのは駄目だぜ！ アウト！ ヒーローはヴィランを捕まえる為に拳を振るうのだ！ さあ、行くぜ!! レディ………スタートオ!!』

鉄哲本人も速攻しかないと思つたのか、試合開始の合図に合わせて走り出す。

飲む隙も与えずに仕留める。

夜々にそう攻撃を仕掛ける刹那…鉄哲の視界に不自然なものが映り込む。

否、映り込むどころではなく、それは視界を覆い周囲が確認できなくなる。気付けば身体の自由は奪われ動けない。

彼自身…自分の身に起きている事を把握できずにいた。

「Mr. 鉄がハニーに勝つために足りない物…それは盾ではなく矛盾だ。寄せ付けずに射抜き、素手では真似できない技」

バトルフィールド上で関節を決められたまま、俯けに伏せて抑えられている鉄哲を見て当然の様に黒羽は言った。

夜々はその上に座る様な形で体重をかけ、後ろに回した腕と鉄哲の

頭をそれぞれ片手で押さえ込む。

「…鉄哲君。そこから動ける?」

「…………グツ…………降参…です」

審判として場にいるミッドナイトが夜々に組み伏せられた鉄哲に尋ねると、ようやく自分の現状を理解。

地に伏せ地面しか見えないまま、絞り出す様に敗北を宣言した。

ー

ー

ー

「速え…」

「速いというより手際が良いな」

場所は変わってA組側の観客席。

爆豪 勝己を挟んで、上鳴と切島がそんな感想を溢す。

(あの動き…………ババア仕込みか)

つい最近体験した強化合宿。

爆豪の脳裏に嫌でも浮かび上がるのは、地に伏せた自分とその上に座る酒呑 月華。今フィールドにいる二人の姿は、そのまま脳内で自分たちに置き換える事ができた。

「…………チツ」

「ん、どうした爆豪」

「なんでもねえ!」

怒鳴り気味で質問をバツサリ切り落とす。

「あの動き…もしかして月華さんの?」

「間違いねえ。母親もそうなら実家仕込み…テメエその点知らねえのか?」

「酒姫の動画は少ないから…でも確かに敵に怪我をさせたような記述は見えないし、酒姫もあの体術で無力化してるんだ…………」

興味深そうに口元を手で隠し、緑谷はブツブツと独り言を始める。

その数秒後に、爆豪は肩をピクツと震わせる。

「なあんでテメエがここに居んだクソデクローツ!?」

「え、いやポカリ買いに行こうと…………」

「だったらさっさと通り過ぎやがれ!! 俺と雑談しようとするんじゃないねえよ!!」

「わ、わかったから、痛い…痛いってかっちゃん!」

慌てて離れようとする緑谷の背中を爆豪は蹴飛ばし、唸り声を上げて獣のように威嚇する。

「…喧嘩するほど仲が良い奴って本当にいるんだな」

「ああん!」

上鳴は爆豪の反応を見てこの関係は暖かく見守ろうと判断する。

「それより次が始まんぞ。瀬呂には悪いけど、やっぱ勝つのは轟か」

「だな。瀬呂には悪いけど」

「うちも轟はんかな。瀬呂はんには悪いんやけど」

「どわツ!」

いつの間にか戻ってきた夜々が、爆豪の切島の間から顔を出して言う。それに驚いた切島を見て満足したのか、大人しくその隣の席に移動した。

「夜々ちゃん! お疲れ様!」

「ありがと!」

前の方で試合を見ていた女子グループが振り向き、こちらに手を振って労ってくれる。それに返事をしてから腕を組み深く腰を下ろす。

「派手に行くつもりやったんやけど、地味に終わらせてもうた。それも全部B組のあの人が悪い! だって相性悪いんやもん!」

「俺は勉強させてもらったぜ! 俺も身体一つで戦う個性だからよ、今度組み技教えてくれよ」

「ええ…うち、使えはするんやけど教えるのは…まあええよ」

難しそうな表情を浮かべてから、開き直ったように笑って承諾する。

そこに上鳴が首を伸ばして夜々に何か尋ねようとした。その時……

フィールド上に巨大な氷壁が築かれ、上鳴は質問を忘れて息を飲む。

「……瀬呂君…動ける？」

「無理っす……っつか浮いてます」

試合開始するや否や、瀬呂は個性で轟を拘束。そのまま場外へ投げ出そうとした。

が、轟は最大火力を持って、瀬呂を氷壁で拘束。

抜け出す手段の無い瀬呂は大人しく降参した。

「……………で、なんや？」

「え？ あ、なんだっけ？ 爆豪、俺今何言おうとした？」

「知るかつ!!」

「

」

」

第三試合：緑谷 VS 心操。

会話を成立させた相手を操る個性を持つ心操を相手に、緑谷は何も答えずに勝負を仕掛けようとする。

「騎馬戦では見せつけてくれたな。イチャラブカップル」

「へ!?! や、違…僕たちはまだ……………」

しかし開幕と同時に洗脳されてしまい、心操の指示で場外まで歩き去ろうとする。

あと一步で場外というところで、個性を暴発させたショックで洗脳を解いた。その後は危なげなく心操を場外に投げ出して勝利を収めたが、緑谷は自分の心の弱さを恥じた。

第四試合は、より短い時間で終わった。

飯田 VS 塩崎。

塩崎は個性の薔薇でフィールドを埋め尽くそうとするが、スピードが売りの飯田はそれを許さず速攻で場外へ押し出して勝利。

それに比べて第五試合の芦戸と常闇は長い時間拮抗した。

芦戸の個性は”酸”。それを撒いて牽制し、滑走してスピードをだし持ち前のバランス感覚で上手いこと制御した。

だがその動きに慣れた頃に常闇は攻めに転じ、そこからは一方的だった。

ダークシャドウと呼ばれている影が酸を払い除け、そのまま芦戸に抱き付くように拘束。そしてそのまま場外へ押し出す事で勝敗は決した。

第六試合は一方的…というよりは、上鳴の自爆で終わる。

電撃をぶつ放してゴリ押し気味に攻めたが、尽く絶縁シートで防がれてしまったのだ。

やがて個性を使い果たした上鳴は脳がショートして知能が低下。

盾を構えた体当たり…俗言うシールドバツシユで場外に飛ばされた。

「んじゃ、行ってくるわ」

「気張れや、工藤！」

「おう！」

突き出した夜々の拳に、切島は自身の拳を合わせるように突き出す。

そして不意打ちで頭に手を伸ばし、夜々の頭にチョップを喰らわせる。

「切島 鋭児郎。頑張ります!!」

ちよつとした冗談を言うような口調で言い残し、切島は第七試合に出るために控え室に向かう。

相手は強敵だが負けるつもりは毛頭無い。

そんな力強う背中を夜々たちは見送った。

しばらくして時間になり、観客の声援を浴びながら切島が入場。向かいからは黒羽が入場してくる。

「手加減なしでいかせてもらおうぜ！」

「当然だね。手を抜かれても困る…：よろしくね、工藤くん？」
穏やかな表情で黒羽が挨拶し、ズルつと転けそうになる切島。

すぐに体勢を直して訂正しようとする苦笑いを浮かべると…

「知ってるよ。ハニーが勝手に呼んでるんだろ？ 原型を止めないのはともかく、あだ名呼びというのは彼女なりの愛情表現みたいなものさ…：…なのに」

「……………なんだって？」

最後の方が聞こえず聞き返すが返答は無い。

審判のミッドナイトも会話が終わったと判断し、実況席に向けて試合開始の合図を出す。

『それじゃあいくぜ!? 第七試合、スタアアトロー!?』

マイクが言い切ると同時に雲行きが怪しくなってくる。

それを確認するより早く、切島は正面から黒羽に仕掛けた。

「それなのに……………」

「クッ！」

切島の拳は避けられ、黒羽は空に退避して空を指差す。

「僕は、名前すら呼ばれ無いんだぞッ!!」

私怨丸出しの悲痛な叫びと共に空が黒雲に包まれ、それが一瞬だけ眩い閃光を放つ。

刹那、雷鳴が轟き、観客の殆どが目を瞑って決定的瞬間を見逃してしまう。

光に焼かれた視力が元に戻りフィールドに目を向けると、そこには黒く焦げた切島が横たわっていた。

黒羽はその前に立ち、心なしか見下している。

「婚約者たる僕を差し置いて…調子に乗りすぎだよ」

「…………切島くん戦闘不能により、黒羽くんの勝ち！」

『な、なんか一方的な試合が多くね？ 俺ちゃん心配になってきたぜ』

どよめく会場の事など気にもとめず、勝利した事を確認した黒羽は退場した。

—

—

—

「…………ほんとキモいわ。あのクソ鳥」

「夜々ちゃんは私らが守るからね！」

「ありがとー！」

夜々に抱きついてきた芦戸にハグで返す。

ついさっきまで敗退した芦戸を励ますつもりでそばに居たのだが、こうやって冗談でも気にかけてくれるのは嬉しいと思った。

ちなみに夜々は、試合ごとに観客席をウロウロしてあちこちでクラスメイトと話している。

今はもう爆豪の近くで試合を見てるわけではなく、爆豪が何故か夜々を見て貧乏ゆすりをしているのには気付いていない。

「いいな…オイラあの間に入りてえ」

「よせ峰田。酒井にはセコムがついてる」

「……………だよなあ」

性欲葡萄のあだ名を持つ峰田だが、目を光らせている緑谷と爆豪と目を合わせないように俯く。

「……………」

「お、行くのか爆豪」

「ファイト！」

「ああ」

第八試合の時間も迫り、爆豪は控え室に向かう。

そして対戦相手である麗日も深呼吸をして立ち上がる。

「よし」

「お茶子はんも頑張つてな〜」

「ありがとう、よっちゃん。勝ってくる！」

そう意気込んで控え室に向かった麗日の背中を見送ると、肩が少し震えているのに気付く。

「勝ってくるて…大きく出たなあ。でもて、やっぱり強いわ。お茶子はん」

「開会式の時のかつちゃんと同じで、きっと自分を追い込んでるんだ」

「一皮剥けるなら今やな」

そう言う夜々は緑谷、飯田の近くに座って今試合は観戦するようだ。

『さあ始まるぜ第八試合！ 騎馬戦では共に戦場を駆けた二人がここでぶつかり合う!!』

二人が出てくるまでの間に場を温め、観客は次の試合が始まるのを今か今かと待っていた。

そこに両者は入場する。

麗日の表情には不安こそあるが迷いなく、爆豪は軽いストレッチを兼ねながらそんな彼女を睨み付けていた。

「よっちゃんはどうがちが勝つと思う?」

「勝己」

「そ、即答だね」

「俺はどちらにも応援するぞ! 二人ともー!ーッ! 頑張れー!ーッ!」

即答する夜々に苦笑いを浮かべた緑谷だが、飯田の真面目さを見て苦笑いを更に深める。

「そりゃ…お茶子はんにも頑張つて欲しいんやけど、能力の長所が違いすぎるやん。個性で浮かせれば、場外になんて簡単に飛ばせる。それは脅威やけど、それは身動きの取れん連中に限る話やろ」

その言葉にわかつてはいたが、納得したくなくても改めて納得してしまう。

加えて爆豪のバトルセンスに有用性の高い爆破個性……一体どうすれば麗日が勝てるのだろうか。

不穏な空気が流れる組み合わせであったが、予想がより凄惨なものになっていく。

「…頑張つて! 麗日さん!!」

「ファイトやー! お茶子はーん!」

その声援が聞こえたのか、麗日は観客席に視線を飛ばしてから自身の両頬を軽く叩く。

「……ちったあ気合入ったかよ」

「うん! 胸借りるね、爆豪くん!」

『両者揃ったところで、早速レディ スタアアアアト!!』

両者が対峙し、合図と同時に仕掛け合う。

その時、後出しするように夜々は一言呟いた。

「負けたとしても、強い事に変わりないで。お茶子はんは」

ー

ー

ー

「うわ…そこまでやるかよ」

「見てらんねえ」

触れた物を無重力のように浮遊させる能力は確かに脅威だ。

だが純粋な戦闘面においては、何も活かす事が出来ない。当然と言えは当然。

麗日は爆豪に攻撃を仕掛けるが、向こうは一切の手加減もせず迎撃。

モロで食らった麗日だが、それに怯んで下がっても焼き直しになる事を知っている。だからなのか、出来る限り間を開けずに攻撃を続けた。

何度も突撃し反撃されるの繰り返し。

それを見てられなくなった観客席からは、ついにブーイングが起こり始める。

一部のヒーローが正義感を振りかざしているつもりのようなだ。

爆豪を非難するそのヒーローに「良くぞ言った」と目を向ける者、同調する様に頷く者がいる。

しかし彼は何も正しくない。

それを教えてくれたのは雄英高校所属のイレイザーヘッドだった。

無理矢理実況席に座らされて小言だけ言っていた彼だが、初めて自らマイクを握った。

『今、言った奴。何年目だ？ 本気でそう言っただけなら帰って転職しろ。もう見る意味ねえから』

その言葉に観客席は騒つく。

『騎馬戦で上位陣にフォロウしてもらった。だからここまで来れたとでも思ってるのか？ 相手の実力を知ってる。だからこそ容赦ねえんだらうが』

ブーイングは止まり、今しがた起きた騒つきも静まり返った。

避難していたヒーローも自分を恥じるように、今は大人しく試合を観戦している。

「相澤はんカッコいい」

そんな茶化すように小言を呟きながら、同じように観客席で試合を

見ていた夜々が空を仰ぐ。

「……………やっぱ強いなあ」

麗日が攻撃を仕掛け、爆豪は爆破で迎撃。それによって生じた被害は、フィールドを削りいくつもの瓦礫片を作っていた。

それを夜々は見上げていた。

(本当は足りないとわかってるんやろ？ もっと溜めたいんやろ？)

そう思う夜々は、麗日が能力を解除した所を見た。

浮いていた瓦礫片は流星群の如く降り注ぐ。

しかし爆豪に一切の油断はなく、天に向けた片腕から放たれた大規模な爆破がそれらを一掃した。

(…悔しいなあ。なあ？ お茶子はん)

傷だらけになっても尚、最後の最後で逆転劇を起こしたかった。

限界が来た麗日はそれを起こす事は出来なかった……不本意な最後の攻撃。それが完封されたのを見届けて、彼女はその場に倒れるのだった。

「……………どこが弱いんだよ」

刺こそあるが、麗日に対する爆豪の評価は夜々と同じ物だった。

欲を言うならそれが、彼女の耳に届いていればよかったが……生憎、聞こえてはいないのだろう。

「勝己、照れ臭くて絶対言わへんで」

「照れくさいとかじゃないと思うけどな」

――

――

――

『さあやって来たぜトーナメント二週目!! 多くの方々もこの組み合わせが気になってんじゃねえの!? 何を隠そう俺も、この二人の大規模な妖術バトルが楽しみだぜえ!!!』

「妖術使うのはうちだけやけどな」

実況のセリフを聞き、観客の声援を浴びる。そして実況の内容にツツコミを入れ、実況のマイクを見ながら入場する夜々。

対して向かいからは、轟が実況も歓声も聞こえていない様子で対戦

相手を見据えて入場した。

両者は位置につき、轟は一度も視線を外さずに口を開いた。

「酒井……お前にも勝つぞ」

そう言われて頭を掻いた夜々は初めて轟を視界に捉える。

「無理やで」

『レディ……スタアアアアト!!!』

それと同時に……夜々は腰を下ろした。

16. 鬼を通して、少年は何を観る

開始合図と同時に仕掛けたのは轟。

瀬呂との戦いでも見せて最大火力を夜々に向けて放つ。

分かっていた観客たちも、思わずまた絶句する。ドームを超える高さの氷壁を瞬時に形成…何度見ても圧巻だろう。

初見殺しの大技。しかし夜々をその氷塊に閉じ込めることが出来たのは一瞬だった。

氷塊の内側からそれは溶け、やがて小さな洞穴のようになる。

その中で夜々は胡座をかいて座っていた。

そんな彼女の周囲には、幾つもの鬼火が浮遊している。

「チッ」

舌打ちをしてから轟は走り出す。

足の裏から氷を形成し、自身を押し出すように加速する。

夜々はそれを見て、少し首を仰げ反らせ…轟が拳を振りかざしたタイミングで、勢いよく頭を前へ突き出す。

「グッ!？」

加速した勢いで夜々の額に伸ばした轟の手は、彼女の不完全な頭突きとぶつかる。

座った体勢のまま放たれたので威力は低いが、素の力が強く彼の掌がビリビリと痙攣。そうやって怯んだ隙に、夜々は右手を上げる。

「無駄やで。しっしっ」

夜々の挙げた右手を警戒して轟は距離を取るが、その手は虫を追い払うように動かすだけで攻撃はしなかった。

それを見た轟の目は憎悪の炎を燃やしていた。が、それは今に始まった事ではないと、夜々は知っている。

「酒井、舐めてんのか？」

攻撃らしい攻撃をせず今でさえ胡座をかき、何もしてない左手では頬杖すら突いている余裕そうな夜々。

見るからに本気ではなく、それが轟を不機嫌にする。

「……………つまらんなあ」

「何？」

胡座から体操座りへ座り方を変え、膝を抱えたまま前後に揺れる。

「何で炎使わへんの？」

「お前には関係ない」

「気付いてるやろ？ 何を隠そう自分の個性やもんな？」

「うるさいー！」

右足を踏み出し、氷のスパイクが地面から突き出しながら夜々に迫る。

しかし夜々は立ち上がる事もせず、鬼火を自分の前の床に並べた。するとそれに近づくにつれてスパイクは小さくなり、鬼火の線を超えて迫る事は無い。

「…轟はん。開会式前の会話……その続きしよか」

「続きっ。」

「そや。喧嘩になってまうからやめた話の続き」

そう言った夜々は、気怠そうにやつと立ち上がった。

「どどのつまり、喧嘩やな。喧嘩しよ」

自身の拳二つをぶつけるように構え、轟の返事を待つ。

と言っても、ここで返事なんてどう返せば分からないだろうと思いい、夜々はすぐさま轟に駆け寄った。

USJ事件で見た実力からして、氷壁を築いても壊される事を轟は予期した。その為、氷の足場で逃げ道を作りそこを移動する。

その先へ鬼火を放つ事で滑走路を溶かし躓かせ、そこへ夜々が跳んで上から踏みつけようと迫る。

「いくで、エンデヴァーの息子はん？」

「ッ!? その肩書きで呼ぶな!!」

鬼圧で自重を高めた落下を辛うじて避ける轟だが、その体勢では追撃は避けれない。

「こつち側やこつち。使えや！」

回し蹴りが轟の左側面を捉える。

鳩尾を狙えば落とせたかもしれないが、側面を狙った事で咄嗟のガードが片腕のみだが間に合う。

「左は使わねえ!!」

「ふざけた事抜かしおつて!」

その足を振り払い、轟はまた氷のスパイクを夜々に迫らせる。

先程と同じように鬼火たちを地面に並べて進行を防ぐと、轟はその鬼火の線を飛び越えて接近する。

その時、何を思ったのか夜々は鬼火を消す。

「ふざけてんのはそっちだろ!!」

ガードする為に構えた夜々の腕を掴み、轟の個性で腕を中心に凍り始める。

牽制で蹴りを放つと轟は離れ、凍った腕の侵食は止まった。

「お前…血、飲んでねえだろ!」

「現にそれで充分やない。エンデヴァアの息子はん」

「止めろ、俺は轟 焦凍だ」

「それとそこ…危ないで」

ーピシツー

背後から嫌な音が聞こえ、轟は横に飛んでそれを回避する。

すると最初に作った大氷壁が、自重に耐えきれなくなり崩れ始めた。夜々の溶かし方が中途半端だったのだろう。

「二種目の仕返しや」

回避した所に追い討ちをかます夜々。

彼の頬を裏拳が打ち抜き、その勢いを使って反対の手で正拳突きを放つ。

「おまけ」

『も、モロに入ったぁーッ!』

轟は足元を凍らせ、後ろに滑走する事で威力を減らす。

そのまま場外へ出そうになると、背後に氷壁を作ってストッパーにする。

「早よ早よー」

「クッ!」

絶え間なく攻める夜々に、轟は防戦一方になり始めた。

仮に攻めに出た所で、遠距離攻撃なら体勢を崩さずに鬼火で対処さ

れる。それがわかってている轟は直接触れて凍結し拘束を狙う…が、接近戦は彼女の土俵である。

「早よ使わんと、どんどん遅くなるで!？」

「てめえには関係ねえだろ！」

「……………はあ。それ、ヒーローになつた後も言うんか？」

途端に攻撃の手が止まり、轟は攻めに転じようと動く。

伸ばした手は夜々の眼前に迫るが手首を掴まれ引かれ、体勢を崩し夜々の後ろに転がされる事になる。

「やっぱ醜い生き方しとるなあ…損するで自分」

「うるせえ！」

「…轟はん、あんた何したいん？」

「……………なんだと？」

両手でパンと音を鳴らし、合掌したまま轟に語り掛ける。

「うちが敵だつたとしよ」

夜々の周囲には常に鬼火が浮遊していたが、その数が2倍…3倍と、数が一気に増殖する。

それが彼女の足元で円を描き、地面スレスレでクルクルと回り始めた。

「こうするだけで轟はんの氷は届かない。このままじゃ勝てないなあ。あんたはどうするん？」

「どうするもこうするも…まだ負けたと決まったわけじゃねえ」

頭を痛そうに押さえ、呆れたようにため息を吐く。

「答えになつとらんで…なら借りにこのまま負けたとする。敵に負けたあんたは、敵に殺された被害者の遺族になんて言うん？」

その言葉に、轟は動きを完全に停止させ言葉を詰まらせる。

「本気を出さなかつたせいで守れませんでしたー。こんな事が以後起きないように、強くなつて半分の手でも勝てるよう頑張りますー……………ハッ、阿呆くさ。だから嫌いなんよ」

「どこでそれを」

「いや、父親妬んでんのは見りやわかるけん。理由とかはほんまに知らん」

心底苛立った様子で轟を睨み言葉を続ける。

「で、話戻すけど、遺族が本気を出せとか言ったらこう言うんやろ？」

”てめえには関係ねえだろ”

轟の表情が歪み始める。

「せやな。関係ないな。お前さんの家庭事情に巻き込まれただけの部外者やもんな!？」

その言葉に、轟の身体がビクツと反応する。

攻防で何度も凍らせた反動で、自身の身体には霜が付いていた。

轟の使っている個性は触れたものは凍らせる事……そして凍らせた反動で体温を奪われていくデメリットが有る。

人は誰しも運動すれば熱を持ち、体温が下がればパフォーマンスが著しく落ちる。

夜々が出した鬼火で暖を取る事もできたかもしれないが、ご丁寧な事に近づかれた時に夜々は逐一消していた為暖は取れていない。

そんな体温低下のデメリットを打ち消すのが、使っていない左側の個性。その炎で体温を確保できるのに、轟はそれをしようとしな

「……ヒーローやめてくれ。あ、別にこのまま職業をヒーローにする分にはええで？ 本気出さない轟はんでも助けられる人はいつぱいおるさかい。ならなるだけの価値はある。ただ出しゃばらんといena? USJ事件で誰か死ぬかもしれん状況でも手加減して戦った男や。勝己の言葉を借りるなら、モブヒーローとしてチマチマ頑張っけてくれ」

結果的に戦犯と称して深く反省した夜々だが、少なくとも彼女は自分のできる最大限の行動を起こした。

クラスメイトの危機よりも父親への復讐を優先させた轟と違って

……

その事実が轟の心を押し潰していく。

「改めて聞くけど、あんたは何したいん？」

「……………」

轟自身わからなくなっていた。

俺は何がしたかったんだ？ 父親に復讐すること？

それはクラスメイトを見捨ててまでする事だったのか？

「……………違う。濁りこそしたが、轟が目指したものはこれじゃない。

「わからんならさっさと負けてくれへん？ お茶子はんみたく、最後の最後に大逆転の目処があるならまだしも……………代わり映えの無い戦闘をグダグダ続けられても冷めるだけやねん。それが嫌なら……………」

一呼吸挟んでから夜々は轟に怒鳴りつける。

「見失ったなりたいもん、さっさと見つけエや!!」

脳裏に浮かぶのはかつての記憶。

父親エンデヴァーは、オールマイトを超えるヒーローを作るために”個性婚”をした。

それは強い個性同士の掛け合わせで、より強い個性を持った子を作る行為。

それで産まれたのが轟 焦凍。

幼い頃から鍛え上げられ、吐いてもそれは止まらなかった。

心の拠り所でもあった母親だが、父親と愛し合って結婚したわけではない。

ストレスが重なり、ついに彼女も過ちを犯してしまう。

轟 焦凍の左側を見て憎しみを込め、消えない火傷痕を作ってしまった。

その後、母親は精神を病み病院に入院。

その原因である父親を恨み、復讐を志した。

父親の個性を使わずにNo.1ヒーローになり、父親を全否定する。

その事実だけが、箇条書きのように轟の脳裏を流れていく。

「……………俺は」

——僕は父さんのようなヒーローにはなりたくない！

「……………」

かつて自分が言った言葉を思い出した。

母親に酷い扱いをする父親を見てそう言った。

そしてこうも言った。

母さんを傷つけなくて済むならヒーローじゃなくてもいい！

(……そしたら……母さんはなんて言ったんだっけ)

夜々が轟に歩み寄ると、足元の炎の円も並行して動く。

それは目に入っておらず、轟は脳裏に浮かぶ映像ばかりを観ていた。

『そう……なら……』

そしてようやく思い出した。

『母さんを傷つけずに、救ってくれるヒーローになってくれる?』

「……………悪い。酒井」

ー

ー

ー

「オオーっつと、ここでどうした轟イー!! 今まで使わなかった炎を解放したーっツ!!」

隣で実況するマイクの事などつゆ知らず、相澤は眼下の轟を見て咳いた。

左手を夜々に向け大規模な炎を放ち、たちまち夜々を飲み込む。

「……………吹っ切れたか」

「荒療治つつうか、懐かしい……………つつうか」

実況マイクから距離を取り、前のめりだった姿勢を仰け反らせて小言を挟む。その視線は轟ではなく、包まれた炎の中に立つ夜々を見ていた。

そんな二人が思い出すのは、自分らよりも小さい小柄な少女……そんな外見をした年上の存在だった。

「覚えてるかイレイザー。あの時……」

「……………マイク、思い出話は後にしよう。また実況を忘れるぞ」

「おっと……そいつはいけねえや」

実はこの試合中に思い出話をすでにしており、実況を忘れていた事もあつてすぐに前傾姿勢に戻りマイクを握る。

思い出話をしたのは試合開始から『も、モロに入ったあーっツ!』と、慌てて実況に戻るまでの間だ。

「……………やつぱ、昼は一緒に食いたかったな」

相澤は昼食の誘われた時に、条件反射とはいえ逃げだした事を少し後悔した。

「」

「」

「」

両腕の拳の小指側面から肘にかけて密着させ、面積は狭いがそれで顔を守ろうとする。

肌が炎症を起こし、ピリピリとした痛みが走る。

更に突風：冷えた空気が熱によって膨張し場外まで吹き飛ばされたが、鬼火で自分の周囲だけでも温まっていたのが功を奏した。しかし炎に飲まれた鬼火は、全て消失していた。

「……………まるで別人やね。誰やこのイケメン」

腕を解いて顔を覗かせた夜々は、不適に笑って炎を放った轟を見る。

「何度も言わせるな。俺は、轟とどろき 焦凍しょうとだ」

父親の力でも母親の力でもない。

それを自分自身の力と割り切った轟の目には、明るみが増していた。

「悪いな酒井。俺も目指すよ…No. 1のヒーローを。待ってる人がいるから」

「……………あかんなあ。今の轟はんは、うち好きやで」

ニカツと笑って、夜々は親指の腹を噛みちぎる。

そして自身の血を喉に通していった。

「うち炎と氷で言ったら、炎が苦手やねん」

プハツと言って親指を口から話、ツノが仄かに光り始める。

鬼人には耐火性がある。

しかしそれはオマケ程度の性能で、自身の鬼火で火傷しないくらいのものだ。

だから氷を鬼火で対処できたが、それ以上の熱量の炎をぶつけられるのは苦しい。

「うちも本気…出さんとな」

今までの気怠そうな気配は消え、人差し指を轟へと向ける。

その先から放たれた光線は、轟が形成した氷壁で防がれた。しかしそれをものともせず氷壁は撃ち抜かれる。

「こっちだー!」

「そっちかい!」

氷壁はガードでなく、自身の姿を隠す目眩し。

その隙に横へ回った轟は、惜しみなく炎をぶつ放す。

辛うじて残っていたジャージは焼け落ち、申請していた耐火性インナーがあらわになる。

夜々は動じずに反撃に集中する。

「動きにキレが戻るとるね。それでもうちは負けへんよ!!」

氷壁を撃ち抜いた光線は枝分かれし、細く威力低下した無数のレーザーが轟を襲う。

「グッ!」

対人用の威力に設定されているが、それでも時速100kmの野球ボール程度の威力。

程度と言って良いのかわからない威力だ。野球選手であるなら死デッドボール球の脅威は存じているだろう。

それに四方面から狙われた轟は、堪らず氷壁を展開して繭の様に自分の身を守る。

「お邪魔するで!」

「しまッ!」

ここで轟は、守りに入るように誘われたのだと気付いた。

氷壁ができるより早く内側に飛び込んだ夜々：それから逃れようとするが、退路はたった今、自分が氷壁で塞いでしまった。

外ではまだレーザーの衝突音が聞こえ、溶かして逃げるか一瞬の迷いが生じる。

その隙が致命的となり、轟の背後を夜々がとった。

左腕が巻きつくように轟の首に回され、右腕でそれを固定させた。

膝カックンの要領で足を曲げさせ、鬼圧で高めた自重で自分ごと轟を後ろ向きに倒す。

倒れた後は足を絡めて動きを封じ、夜々は寝技で動きを完封。

「ガッ……アッ……」

首を絞められ意識を手放すのは時間の問題。

それを悟って抜け出そうと必死にもがくが、素人はこの手の技から抜け出す術を知らない。

やがて大人しくなった轟を確認し、夜々は拘束を解いた。

そして自身の汗を拭い、氷壁を殴り壊して外へ出た。

審判のミッドナイトは気絶した轟を見て、夜々の勝利を宣言した。

「

「

「

「……………」

気がつくくと、轟は白い天井を見上げていた。

「目が覚めたかい？」

声が聞こえて見てみると、小柄なお婆さんがお茶を啜っていた。

その正体はリカバリーガール。

轟は保健室で寝かされていてのだと気付く。

「……………負けた」

「にしても綺麗に落とされたみたいだね。頸動脈洞を圧迫されただけで異常はない。目が覚めたなら早く戻りな」

促されるまま保健室を出て、轟は急ぎ足で観客席に戻る。

そこにはA組の面々が雑談をしていて、今試合はやってない。

「今何試合目だ」

「あ、轟くん」

轟の存在に気付いた緑谷が手を振り、流れて彼の隣に腰を下ろす。すると近くに座っていた夜々が顔を覗かせる。

「轟はんの氷の除去に時間使って、まだ次の試合始まつたらんよ」

「そうか……先生たちには悪いことしたな」

そう言う夜々の顔は少しだけ赤い。

それは火照っているわけではなく、火傷の症状だとわかる。

むしろその程度に収まつてる事に轟は驚いた。

「それ火傷か？」

「んあ？　せやで。治りかけやけど……」

「次は負けない」

ケラケラとそう言う夜々に、轟は真面目な表情で……それでいて以前に比べると柔らかい面持ちで言った。

「お手柔らかなにな。あれ以上炎食らったら、もしかすると顔に傷が残ってしまうさね」

「……鬼にも傷は残るのか」

「そう言う問題じゃないでしょ轟くん！　女の子の顔に傷つけてどうなるか分かってんの!？」

葉隠が後ろの席から夜々に抱き付いて、驚いた夜々は彼女の透明な手を確かめるように触れて腕を絡める。

そして悪戯っぽく笑って冗談をほのめかすように言った。

「せやで〜？　うちを傷物にしたら責任とってくれるん？」

あざとく軽い口調で言うと、轟は少し考える素振りを見せる。

「………わかった。すぐには無理かもしれないが、時間をかけてでも責任は取る」

隣に座っていた緑谷はピシッと石化したように固まり、後ろの方に座っていた爆豪も分かりやすくビビったように跳ね上がる。

「そ、そか………わ、わかってるならええねん」

夜々は冗談を返された事に多少照れながら、平静を偽ろうと努力する。

「……そういうや言ってなかったな。酒井」

「な、なんや？」

「俺もお前が好きだ」

「……………」

驚くほどの静寂に包まれ、全く関係ない雑談をしていた男子グループも黙り込む。

誰もその静寂を終わらせる事なく時が流れると、轟が再び口を開いた。

「これからよろしく頼む」

「半分野郎ゴラアアア!!??」

「ちよつと良いかな! 轟くん!!!」

二言目をキツカケに、爆豪と緑谷が言いながら立ち上がり彼の両脇を抱える。

「…ど、どうした二人と…いた、緑谷、痛い。爆豪もどうし」

「良いから来いボケエ!!」

二人に連行された轟を啞然と見送るA組の面々。

唯一峰田だけはそれを見てガタガタと音を立てて震えていた。

やがて3人の喧騒が遠退くと、全員の視線は次に夜々へ向けられる。

「……………夜々ちゃん?」

自分の名を誰かが呼ぶが、彼女の耳には届かない。

「ツ!? いけない! 酒井君が気絶している!!」

「よっちゃん! しっかりして!」

「傷は深い…………重症だな」

飯田、麗日、常闇の順に口を開き、夜々本人は言葉にならない声を上げている。

その顔は先程よりも赤く、焦点の定まらない目がこの上なく震えていた。

17. ライバル達は想いを抱く

『レディ！ スタアアアアト!!』

戦いの火蓋は切って落とされ、二人はほぼ同時に動き出す。

方や加速して上段蹴りを放ち、方やそれに反応しクロスした両腕で防ぐ。

「グッ!？」

戦っているのは緑谷と飯田。

この試合に勝った方が準決勝に進み、轟を落とした夜々と戦うことになる。

更に次に進めば、負けたとしてもBブロック側の準決勝敗者と三位決定戦を行う権利も得られる。

「悪いが緑谷君！ 俺は君に勝つぞ!!」

「僕……だって、絶対に負けない!!」

ただ戦っている本人たちはそんな事を気にせず、目の前の戦いに没頭していた。

普段は共に学び、学食を食べ、訓練に勤しむ仲間である。だが二人の間には、絆とは別に闘争心が強く絡みついていた。

相手がどう思っているかが、飯田は緑谷をライバルだと思えば勝利をもぎ取ろうとしている。

そして緑谷はそんな想いに応え、恥のない戦いをして勝利を望む。

「フル……カウル……」

(焦るな！ まだ俺のペースだ！)

全身を個性で強化した緑谷を見て警戒を強めるが、飯田は蹴りによる攻撃を続け相手にターンを譲るまいとする。

『飯田蹴りの応酬……ッ！ 緑谷動くことができない!?!』

『守りに専念しているな。下手に動くより出来る事をするのは良い判断だ』

相澤の実況は実に的を得ている。

夜々の実家で行った強化合宿……それで体得したフルカウルで飛んだり跳ねたりするのは信頼できる練度ではない。

森の中を駆けるとは違い、ここは狭いフィールド。下手に飛んで自ら場外と言う事もある。

(だけどそれは……向こうも同じ！)
幾らガードしているとはいえ、その上から蹴られればダメージは通る。

緑谷は防戦一方の現状を打破するために、ただただ見ていた。

「むっー！」

飯田は緑谷が何かを企んでいる事を悟ったが、それに怖気付いて攻撃を止めることはあつてはならない。

騎馬戦で見せたレシプロ程ではないが、時間をかけて飯田は加速し始めている。

(入学初日の体力テスト……飯田君は50mしかない道で、トップスピードまでは持つていけなかった)

「ッー！」

緑谷は飯田の攻撃を受けた後、右に大きく踏み出した。

しかし起こした行動はそれだけで、飯田の次の攻撃が飛んでくる。

(この狭いフィールドで、どうすればトップギアまで持つていけるか……)

「(こ)こッー！」

「なッ!？」

次は攻撃を食らった後に左に踏み出した。

何をしているのか観るだけでは分からないが、飯田はその行動に表情を曇らせた。

『緑谷はなーにやってんだ?! 防戦一方でなす術なしか?!』

『……そいつはどうかな』

『What?』

相澤の言葉に首を傾げるマイクは、視線を試合から外したせいである瞬間を見逃した。

「(こ)こ……と、見せかけて!!」

「しま……ッ!？」

「スマッシュ!!!」

緑谷の拳が飯田の鳩尾を捉えた。

自身が走る勢いもあり、飯田は身体をくの字に曲げて進路と逆向きにバウンドしながら転がる。

ギリギリ場外には出なかつたが、飯田はそこで倒れる。

『んなー！ツッ!! カウンター入れたのか!? チックシヨウ！ オレちゃん肝心な所見逃したー！ツッ!!! イレイザー！ 緑谷は何したんだ!?!』

『やった事は主に3つだな。1つ：防衛に専念し、飯田がトップスピード入る前に目を慣らす。2つ：目が慣れた所で動き、自分の立ち位置で飯田の走るコースを制限。3つ：飯田にコースを制限させている事を悟らせ、フェイントを加えて進路妨害。以上の行動によって減速させられたところにカウンターを入れたんだろ。相手のペースと見せかけて、時間かけてトラップを築いたんだろ』

『……………つまりどゆこと？ なんで減速?』

マイクの質問に思わず溜め息を溢すが、会場に同じ疑問をもつ者がいる可能性を考慮して口を開く。

『飯田のスピードは侮れないが、それは満足に走れる立地があつて最大限に活かすことができる。それを狭いフィールドで：それも緑谷にコントロールされ、減速せざるを得ないコースに誘導した。車が減速せずに交差点に突っ込んで曲がれば事故るだろ：それと同じだ』

『なるほど！ フィールド外に事故つて出ないために減速した所を……………って何気に緑谷凄くね!?!』

観客の中にもようやく理解した者がいるのか、声を上げて感嘆した。

(凄いと思つてるヒーローはみんなノートに纏めてるんだ。もちろん飯田君も……………そして…)

「飯田君。立てる?」

審判のミッドナイトが伏せた飯田に声をかけると、両腕を使ってゆっくりと上体を起こす。

「まだ……………戦えます」

(知つてるよ飯田君、君がまだ立ち上がるのを。でも次で終わりだ

……)

「言ったはずだ緑谷くん……君に勝つと!!」

(君はきつと次の攻撃に掛けてくる!)

飯田は両脚で立ち、走りだそうと構える。

その脹脛から生えたマフラーは、先ほどとは比べものにならない力で火を吹いた。

「……何?」

「絶対負けないって、僕も言ったよね?」

(レシプロブースト……悔しいけど、今の僕じゃ反応できない。だつたらせめて)

『………What? 垂直跳び?』

緑谷は両の脚で跳んだ。俗に言う垂直跳び……上に跳ぶ分には、勢い余って場外に行く事はないだろう。

しかし……爆豪の様に飛べないのなら、身動きの取れない空中に逃げた所で何も好転しないはずだ。そもそもそのジャンプは数十センチ程の軽いジャンプ。

その奇行に多くの者が疑問の声を上げる。

『………ほう?』

しかし約数名……緑谷が起こした奇行に皆がどよめく中、彼の意図を理解したのか興味深そうに声に出した者もいた。

(せめてタイミングは……こっちで決めさせてもらう)

そして飯田も気付いたが発動を始めたレシプロブーストは止められない。せいぜい走りだそうとした自分のタイミングを、緑谷の落下に合わせるので精一杯だ。だからこそ全力で走り出す。

(緑谷君……君の誘いに乗ってやる!! だがそう簡単に上手くいくか!?)

落下を始め、緑谷が再びフィールドに着地する寸前。

足がつく寸前に、飯田はその最速の蹴りを緑谷に放つ。無論緑谷は避ける事ができない……自らそうしたのだから。

その代わりに……緑谷は回避を捨ててその拳を振り抜いた。

「ッ!!」

「ッ!?!」

渾身の一撃を放てば無意識に出るのが雄叫びだが、衝撃に襲われた二人はそれすら上げずに歯を食いしぼる。その歯の隙間から空気が漏れ、肺の中が空になっていた感覚があった。

ほぼ同時に放たれた蹴りと拳は、ほぼ同時に相手の身体から離れた。

二人は弾かれるように、反対方向へと飛んでいきその背を場外の地面に付けた。

『両者渾身の一撃がクリーンヒット!! ダブル場外によるダブルアウトーッ!!』

「二二」ウオオーッーッーッ!! 「二二」

場の熱気がピークに達し、プロヒーロー…主に武闘派のヒーロー達が立ち上がってのめり込むようにモニターに視線を向ける。

ただ一人…オールマイトだけは熱狂とは対照的に、その表情を青くして汗を流していた。

「あ……あの動きはまさか……いや、まさか……うつ」

何故か吐きそうになるオールマイトは、それをグツと堪えてモニターに目を向ける。

『OK! ルールにのっとってカメラ判定だ!! 先に場外に出たのは果たしてどっちだ?! ただ一つ言わせて貰いたい!! 勝つても負けても、お前らは最高に熱かったぜってな!! イレイザーもお前らみたいな教え子を誇りに思ってるってよ!!』

『おい』

勝手な事を言われ異論申し立てるが、そんな事を無視してモニターに流れる映像を皆が目視する。

そして流れた映像は、二人の攻撃が互いを捉えた所から始まる。

「……まだぎこちないが緑谷少年にあつた型…ま、間違いない」

オールマイトは立ち眩みを起こし思わず座り込む。

『ホント綺麗に入ってるなあ?!』

『個性を無駄なく使おうとしたのが仇になったな。飯田がもし蹴り抜く蹴りじゃなく背面蹴りを選択していれば、リーチの差で緑谷の拳は

届かない…届いたとしても浅かっただろうな』

そこから映像はコマ送りで再生され、二人はゆっくりと離れていく。

一画面に収め込めなくなっただけからは画面を分割し、それぞれを収めてコマを進める。

そして……………

「コンマの差で飯田くん場外！ よって勝者…緑谷くん!!」

ミッドナイトが勝利を告げると、歓声が一段と大きくなりピークに達したと思われた熱気が更に上がった。

ー

ー

ー

「完敗だ緑谷君!!」

「い、飯田くん、おち、落ち着いてててて」

保健室に運ばれて治療を受けた後、飯田は悔し泣きをしながら緑谷の肩を掴んで前後に揺さぶっていた。

これは決して嫌がらせではなく、感情の昂りによる無意識の行動だ。

ただ脳が揺らされ、止まったと思っただけの外の握力で、緑谷の肩は叫ぶほどではないが苦痛に襲われる。

「飯田も惜しかったねえー。運が悪かった」

「ドンマイ」

そう言っただけで励ましてくれるクラスメイトの方を見て、飯田は声を大にして叫ぶ。

「それは違う!! 先ほどの試合のリプレイを見たが互いに弾かれた後、緑谷君は地面を殴っていた!! あの対空時間の差は緑谷君の実力によるものツ!! 決して運が悪かったわけではない!!」

「わかったから落ち着けよ飯田」

クラスメイト数人によって宥められ、飯田はようやく観客席に腰を下ろした。

「にしてもようやくたな出久」

「地面殴ったのはホント偶然というか、咄嗟に手が出ただけなんだけどね」

「クッ！　これが酒井家の合宿に参加した者との差か!!　酒井君！　機会があれば僕もご指導願えないだろうか!!!」

座ったまま両拳を膝に叩きつけた飯田は、夜々の方を見てそんな申し出を出す。

あまりの勢いで首が取れたんじゃないかと驚くが、驚いてる間に俺も私もとA組の面々が参加したいと挙手する。

「いつペンには無理やろ……まあ試しに聞くだけ聞いてみるわ。期待はせんといてね」

「ホント!?　ヤッター!!」

「鬼門に足を踏み入れられるのか」

「え、オイラは……オイラはどうしようかな」

「折角だから行こうぜ！　絶対ためになるって！」

「いや……だから期待は……あーもう！」

「それより常闇……そろそろお前らの番だろ。八百万はもう行つたぞ」

「そうだな。失礼する」

次の試合に出る常闇は席を立ち、それをキツカケに話の話題は変わってしまう。

今更否定するのも馬鹿らしくなり、夜々は合宿の件はなるようになる。と、考えるのを一旦やめた。

「うーん、どっち応援しよう」

「どちらか鼻屑にできんし、その辺考えないで観戦やな」

試合間のインターバルが終わり、両者が入場する。

「二人とも頑張れやー」

どちらが勝っても褒め称え、どちらが負けても励まそうと決めた面々。

そして試合が始まるが、応援の言葉を出すよりも早く試合は終わってしまふ。

八百万は万物を生成する個性を持つ為、無難に自身を守る盾と武器になる棒状の金属を出した。デザインという概念の無い、すぐに出す

為に選択された形状だ。

それでも他と違い、構えるまでのタイムロスが生じてしまう。

対して常闇はそこを狙って先制を仕掛ける。

辛うじて盾で守る八百万だが、不完全な体勢から受けた攻撃に蹠踉めく。そして体勢を戻すよりも早く追撃が飛んできた。

全て”辛うじて”という言葉が付くが、なんとか猛攻を凌いだ八百万。何故か攻撃の手が止まったのを確認し、攻撃に出ようと武器を構える。しかし……………

「八百万さん場外により、常闇くんの勝ち！」

「え……………」

気付けば八百万は、場外にまで後退していた。

ー

ー

ー

「もっと動けるようにならないといけませんわね……………」

「実際のヒーロー活動やったら、敵と向き合ってからスタート……………つて場面ばかりやないし、武器生成する時間はあると思うんやけどね。ま、敵から奇襲サイランされるやもしれんし、たしかに出来てこした事はないなあ」

「よし！ ヤオモモも行こう！ 夜々ちゃん合宿！」

「夜々ちゃん合宿？ なんですよ、それは？」

「あの、芦戸はん？」

意気揚々と芦戸が合宿について話、緑谷の成長具合をダシにして素晴らしさを語る。

それを何故そんなに期待しているのかと、夜々は呆れた様子で見ている。

「それは素晴らしいですよわ！ 酒井さん！ 是非とも私も参加させて頂きたいですよわ!!」

「あー、わかたわかた。聞くだけ聞くさかい……………期待はせんといてね」
投げやりになっても保険をかけることは忘れず、気合十分な八百万に夜々はそう告げた。

「それより勝己！ アレはホント糞やから、負けたらその事を一生弄られるで」

「ハッ！ あんなナルシス鳥に負けるかよ!!」

好戦的な笑み。だが一切の油断の無い目で睨むようにアイコンタクトを取る爆豪。

そんな彼に拳を突き出すと、爆豪もその拳に自分の拳を重ねる。

「行ってくる」

「行つてら……ついで！」

「イツ!? ……てえな!!」

背を向けて歩き出した爆豪の背を、夜々は鞭を打つように掌で叩く。

それはそれは綺麗な音を立て、服をめくればきつと真つ赤な紅葉が背中を彩っているだろう。

怒鳴り散らす爆豪は顔だけ夜々に向け、文句を言いながら歩き去る。

そんな事は気にせず、夜々はいつものようにケラケラと笑つて見送った。

ー

ー

ー

『さあトーナメント2週目も気付けばラストだぜ!! それを飾るのは因縁の対決!! 爆豪が勝ち準決勝に進むのか!? それとも黒羽が雪辱を果たすのか!? 喉が疲れてきたがそれでも俺は叫ぶぜ!! 準備は良いか!? レディ……スタアアアアト!!!』

フィールド上で相對するのは爆豪と黒羽。

合図が出ると同時に、爆豪は掌を爆発させて接近する。それを黒羽は力強く羽ばたき空へ避けた。が、爆豪はそのまま空へ黒羽を追いかける。

「誘われてるって気付いてる? 空は僕のホームグラウンドだよ」

「テメエの土俵だ!? ハッ！ 俺を倒してから言えや!!」

慣れた様子で両手を爆破させ、推進力で黒羽の眼前に迫る。

それを流すように、爆豪は横殴りの突風に煽られ機動がズレ……

「空対空迎撃弾ツ!!」

「ナツ!？」

吹き飛ばす時まで行かずとも、軌道は自分からズレると判断した黒羽は予期せぬ攻撃に反応ができなかった。

両手を爆破させ、その勢いで直進した爆豪。彼はそのまま勢いに合わせて膝を伸ばす。

それはさながら、爆速で突き刺さる矢の如く……足裏がもの見事に、黒羽の顔面に突き刺さった。

一瞬で気が飛んだのか、黒羽は真つ逆さまに落下していく。

そのまま場外……かと思えば、爆豪が飛んだまま接近し黒羽を空中でキャッチ。

そして低空飛行した所でフィールド上に転がすように手放した。

「グヘツ……ツウ……クウ……」

バウンドした後に着地のショックで目を覚ました黒羽。

不可解そうな表情を爆豪に向け、そして彼の意図を悟り青筋を浮かべる。

「あの高さで落ちたら危ねえからよ?」

騎馬戦の時の意趣返しだ。

感情が昂ぶれば強くなる黒羽だが、冷静さを手放さない為にグツと堪え状況を整理する。

それでも浮かび上がった青筋が引つ込む事はない。

何故空中戦で……それも初手で自分が地に落ちた?

それが彼には理解できない。それほどに自信があったのだ。

それを知ってか知らずか、爆豪は追い討ちをかける。その動きに黒羽は既視感を覚える。

「ツー」

似ている。

彼が誰よりも恋慕の情を向ける片想いの相手……ひいてはその一族の動きに。

「……お前もか」

「あ？」

「合宿って聞いた時……まさかとは思ったけどお前………テメエまさか!!」

ー

ー

ー

とある日本屋敷の庭園を黒羽は歩いていった。

当時7歳。頭脳明晰、運動神経も悪くない天才よりの人物。

故に周りを見下して育っていた彼は、愛想の悪い子供という評価も持っていた。

「まったく……いい大人が飲んで騒いで………」

新年の集まりの日。

天狗の一族である彼は、鬼の一族の招待を受けてこの場に来ていた。

何置あるか数えるのも時間のかかる大部屋で、飲んで歌つての宴会状態……騒がしく思った黒羽は逃げ出すように庭を歩いていた。

小雨が降っており、その手には傘が握られている。

「ダラしないったらありゃしない………ん？」

ふと、本家から離れた所にある大きな池……それにかけられた橋の上立つ一人の人物が目に入った。

背丈は自分と同じくらいで、恐らく歳の近い親戚だろう。

(僕と同じで騒がしくて出てきたのか?)

僅かに降る雨から守る為に番傘をさしたその人は、下駄を履き女物の着物を着ていた為性別は判断できた。しかし彼女は背を向けていて顔はわからない。

黒羽は暇つぶしにと声をかける。

それに気付いた彼女は僅かに首を黒羽の方に向け、番傘からツノがはみ出て見える。

(鬼の一族………話しかけるべきじゃなかったか)

野蛮なイメージが強い鬼だと気付き、黒羽は失敗したと心のうちに呟く。

そんな事を話かけてきた少年が思ってるなど梅雨知らず、少女はちゃんと振り返りその姿が露わになる。

「……………はえ？」

面倒だと言って粧し込んではいない。しかしそこに佇む少女は一輪の花のように美しく、場所も相まって妖精の様に少年の目には映った。

その目を少女…………夜々は、憂いを帯びた目で見つめ返している。

そんな彼女を見て、黒羽は無意識に変な声を出した。

黒羽 礼文：彼の初恋は、この一目惚れから始まったのだ。

「…………好きです。結婚を前提にお付き合いしてください」

「嫌や」

その後もアタックを続けた黒羽は、そう時間をかけずに夜々に嫌われた。

ー

ー

ー

ふつつつと怒りが込み上げ、自身を中心に竜巻を起こし距離を取らせる。

「僕はもう、敷居すら跨がせてもらえないんだぞ!!!」

合宿は知っていたがそれが酒井の実家…酒吞家で行われた事を、爆豪が身につけた体術から今確信した。

実は知らなかったのだ…合宿といっても精々仲良くジムにでも通っていると思っていた…否、そう思いたかった黒羽は、嫌われている自分では到底入り込めない聖地で行われていた事を知り悲痛な叫びを上げる。

それに怖気付くわけもなく、むしろ逆に爆豪は煽り立てた。

「悪いな。テメエと違って、鬼とは仲がいいんだバァーカ」

極め付けに見下すようにドヤ顔。

風当たりは一層強くなり、黒羽は雄々しく羽ばたいた。

「図に乗るな！ 人間風情の分際でツ!!」

多少舐めてかかっていた黒羽は、本気で爆豪と相対する。

18. 少年は敗北を知り、少年は成長を知る

「……………婆さんや」

とある屋敷……………何故かその屋敷は半壊しており、今まさに修繕リフォームの真っ最中。

屋敷を囲う様に鉄棒を組まれ、それを足場にリフォーム会社の作業員がせっせと働いている。

そんな屋敷の座室には4人の人影があつた。

そのうちの一人の老人が、隣に座っていた女性に向けて口を開く。

「なんだ？」

「何処まで教えたんじゃ？」

話かけられた女性は湯呑みに満たされた茶を啜りながら、テレビを睨みつけて口を開く。

「基礎中の基礎…あとはひたすら実践だ」

とても婆さんと呼ばれる見た目ではないが、女性は特にツツコミもせずに返答した。

だがその口調は少し恨めしそうにも聞こえた。

「突かれたくないところを突きまくって虐めたつもりが、あの餓鬼全部経験にしやがった。いけすかねえ男だよ爆豪 勝己テメエ」

「爆の字……………侮れんのう」

テレビに映っているのは生放送の雄英体育祭。

今まさにその爆豪が、黒羽を相手に前線している所だった。

「……………天狗連中には悪い事したか？」

蚊帳の外だった残りの二人に女性は話を振る。

振られたのは二人の男性。一人は老人でもう一人は初老……………どちらも大人だが歳の差はありそうだ。

「…いえ、むしろ感謝したい」

老人は黙ったままで、代わりに初老が口角を釣り上げて答えた。

「あの愚息には、いい薬になるでしょう」

1

1

『爆豪の蹴りがまたもやヒット!! なんだアイツ! そつちもいけんのか!?』

『両手は爆破に使い、それを利用した足技…全身を惜しみなく使っているな』

そんな実況を聞かなくとも、誰もが見て判断をつけれるだろう。

黒羽が劣勢だ。

「ふざけるな…ふざけるなふざけるなふざけるな! 僕は犬天狗だぞ!!」

今まで距離を詰められる事はなかった。

模擬戦ではいつも距離を取ったまま、一方的な攻撃ができた。

だからここここまで接近された時に対処できない…それを補う努力を、黒羽は怠っていた。

「認めない! 認めないぞ!!」

風を掴み加速。そして蹴り…に見せかけたその足が、鳥のそれに变化して爆豪に喉輪を決めようとする。

「遅え!!」

両手を爆ぜさせ、爆速で仰け反り回避…からの蹴り上げ。

それは今し方差し出した黒羽の足を打ち上げる様に蹴り払った。

黒羽は空中で何度かバク転をする羽目になりながら体勢を直す。

逆に爆豪は爆速で前転し、空中で振り上げたままの足を勢いよく振り下ろした。

「ウグツ!」

両腕をクロスして防ぐが勢いに負け、黒羽は場外に叩きつけられそうになる。

辛うじて地面スレスレで体勢を戻して飛ぶ事で敗北は逃れた。

「……………嘘だ…嘘だ嘘だ!!」

「テメエは周りを見下し過ぎなんだよ!!!」

「く、来るなアーーーーツ!!」

追撃に迫る爆豪に落雷を落とすが、それは爆豪の上には落ちない。連続で落とすが、それは激しい閃光を見せつけるだけで攻撃手段と

して成立しなかった。

ブレたその精度で、爆速で動く彼を捕らえることなど無理な話だったのだ。

「ッ!! だったらー!」

突如見舞われる猛吹雪の竜巻。

自信を中心にそれを展開して防護壁を築き上げる。

一度落ち着きを取り戻そうと黒羽は思うが、それは深呼吸をする間も無く打ち消された。

「榴弾砲着弾!!」

両手を使い爆発を連続発生させ、その反動で錐揉み回転。

その勢いを乗せて叩き込まれた特大火力の爆発は、容易く黒羽の防護壁を吹き飛ばした。

『ナンツツ……威力ツ!! まるで人間手榴弾だぜツ!!?』

「クツ!」

「逃げんなやツ!!」

飛んで逃げようとする黒羽を追い、首根つこを掴んで引き寄せ両の脚で胴体をホールドする。

「離せ! 離せ離せ離せ!!」

「戦略的撤退……大いに結構だがよ……」

脚で組みついたらまま、黒羽の胸に両手を重ねる爆豪。

それを見て何が起きるか察したのか、黒羽の顔色がみるみるうちに青くなる。

「ま、待て!」

「逃げ癖の付いたテメエに……夜々はやらねえツ!!!」

ゼロ距離で放たれた爆撃は、黒羽を撃ち落とすし地面に叩きつけた。加減こそされたが、その威力を受け止めざる事はできなかつたよう

だ。現に黒羽は……白目を向き、墜落した場から動かず倒れていた。

「黒羽くん戦闘不能! よって勝者、爆豪くん!!」

勝利宣言を聞き終え、湧き上がる歓声を見無視して爆豪は退場した。

「これならクソデクの方がまだマシだ」

そう呟いた声は、誰にも届かなかつた。

『……夜々はやらねえッ!!』

「ッ!？」

『Fooo!! 青春っていいな!!』

ただ決めた時のセリフは聞こえていたのか、プレゼントマイクが下手な声真似をしてリピートする。

そして再び歓声が湧くが、どこことなく黄色い声援だった気がした。

この後、激昂した爆豪が実況席に殴り込み掛けたが、事前に相澤がマイクを締め落とす事で場は収束した。

ー

ー

ー

「カツカツカツ！ クソ烏ザマアないなあ！」

愉快そうに観客席で笑う夜々だが、それとは対照的に暗い顔をして考え込む緑谷の姿が隣にあった。

「うーん。かっちゃんが強いののはわかってるけど、それでも黒羽くんは……………その……………言っちゃ悪いんだけど」

「拍子抜け……………やろ？」

言い淀む緑谷の言葉を紡ぎ、夜々はニカツと笑いタンカで運ばれる黒羽を尻目に言葉を続ける。

「認めたくないんやけど、才能は勝己と大差ないよ。ただ性格に難あってな」

「難があるのは爆豪もだろ」

「……………轟はん。オブラートに包もうな」

告白騒動の誤解の解けた轟も近くに座っており、その会話に口を挟む。

「…八咫烏流滑空術。黒羽家に伝わる、接近戦を有利に働かせる体術や」

ボソツと夜々が呟く。

「それを使えば、勝己も危なかったかもなあ」

「八咫烏滑空……………って！もしかしてそれ……………！」

八咫烏流滑空術。

飛ぶ力を持つ者ならば是非とも身に付けるべき。

そう判断させる程に、そっちの界限では有名な体術だった。

ヒーローランキング三位の”ホークス”でさえ、真っ先に身につけた技でもある。

それをヒーローオタクとして聞いたことがあったのか、緑谷は驚愕の眼差しで夜々に目を向ける。

「黒羽くんの一家が発祥だったのか……でもなんでそれを使わなかったんだろう」

「ちやうで出久……使えないんや」

それは天狗の一族に代々受け継がれる飛んで行う体術である。

彼ら天狗は遠距離攻撃を得意とするが、接近戦は不得手……それを補う為に当時の当主が考案した技であった。

八咫鳥とはその当時の当主……黒羽 八咫鳥の名から取ったものである。

しかし……黒羽 礼文はそれを体得していなかった。

「糞鳥の性格……プライドが高く、自分が最強だと思ってるナルシスト」

タンカで運ばれた先の通路を、夜々は顎で指し示して言う。

「勝己の性格……プライドが高く、自分が最強だと思ってる下水煮込み」

そうやって今度は振り向き、観客席席に戻ってきた爆豪の方を向く。

戻ってきたのはちやうど今で、切島や上鳴が彼を出迎えていた。

だが轟は「オブラート……とは？」と夜々を見て首を傾げる。

そんな二人を無視して、夜々は座り直して背漏れに体重を預けけ告げた。

「でも驕らん！ 才能に胡座をかかずに努力を惜しまん！ 例えそれが苦手な項目でもな。それがアイツとの差や」

今まで彼に近付ける相手はいなかった。

その事実を気を良くした黒羽は、遠距離ばかり伸ばしていたのだ。威力が上がれば精密な操作ができないという弱点も、敵が動けなけ

れば問題ない……自分の風を受けて動ける物は居ないという思い込みが強かった故のサボりだった。

それを説明したのちに「それが一番ムカつくわ」と小声で愚痴る。

「親御さんも手え焼いてたらしいし、これが良薬になりや少しは真面目なるやろな」

そして最後に「どの道嫌いやけど」と付け足した。

ー

ー

ー

爆豪は実況席に乗り込んだその足で観客席に戻った。すると戻るや否や、切島と上鳴が出迎える。

「おう！ 爆豪お疲れ。漢らしかったぜ!!」

「夜々はやらねえ！ ……クウー！ 俺も言ってみてでで？ いいだいいだ！ ごめんなさい!!」

「……………」

「無言やめて爆豪！ 余計怖いから!!」

多少頭が冷えたが突かれたくない所なのだろう。

爆豪は上鳴の関節を極めてたつたまま押さえ込む。形の近い技を挙げるならアームロック。

涙目で悲鳴を上げる上鳴を見て、揶揄おうとした瀬呂は息を潜めて前を向いた。

「イダダダダ！ 折れちゃう！ 折れちゃう助けて!!」

離す気配の無い光景を見て、ふと上鳴の視線と夜々の視線が交わる。

その瞬間、上鳴は「助けて！」と全力で目で訴え始めた。

しかし夜々もその話題は恥ずかしいのかソツと目を逸らす。

「ねえねえ夜々ちゃん！ やっぱ夜々ちゃんも爆豪くんのこと好きなの!？」

「ふえっ!? あ、いや…………その…………秘密」

「おい透明女！ 変な勘違いしてんじやねえ!!」

話題の矛先が夜々に向き始めたところで爆豪が葉隠を咎めるよう

に怒鳴る。

「いやいや爆豪…流石に無理があるって……」

「雄英のマイクってここまで音拾うんだな…って感心するくらいハツキリ聞こえてたもんな……」

切島は呆れ笑を浮かべ、ようやく解放された上鳴は涙目で関節を摩りながら言う。

「俺はんな事言っつてねえ!!」

「だから無理があるって」

「言っつてねえ!!」

そこから水掛け論が始まるが、それは夜々が口を挟む事で止まった。

「良え加減にせえよ。本人も否定してるし、うちも聞こえなかったよ。みんなの聞き間違いやないかな」

「……?」

ヘラヘラと出された助け舟に、爆豪は怪訝な表情で夜々を見る。

そして直感で、この顔はおちよくる時の顔だと判断した。

その直感は正しかった。

「それにそもそも勝己にそんな気はあらへんよ。あそこまで否定するんやから間違いない。な、勝己?」

「……」

その言葉に乗っかると、夜々に好意は抱いていないとついでに公言する事になる。

だがそれを否定すれば「え? じゃあ本当にうちの事好きなん?」と返されるのは目に見えていた。

かと言って、「言っつてないけど夜々は好き」などと爆豪が言うわけがない。だが爆豪は必死に隠しているだけで夜々に好意を抱いている。

そのため明確に否定はしたくない……

「……」

「……へ?」

そして爆豪は、夜々に近付いて手を伸ばし行動で答えた。

動揺する夜々を他所に、爆豪は彼女の手を握る……

「……か、勝ち?」

その場にいた一同が息を呑み、爆豪の行動を目に焼き付けようと刮目する。

女性陣の何人かはキャーキャーと騒いでいるが、その声は二人の耳には届かない。

そんな注目を浴びる中で爆豪は……

「いっぺん死ねええええ!!?」

夜々にアームロックをかけた。

「イダダダダ!!」

「ああー!!……そこは違うでしょ爆豪くん……」

「いや、爆豪ならこうなるって予想できただろ」

ギブアップの意を伝えるために爆豪を何度も叩くが、爆豪は一切手を緩めようとしない。

それを見て期待していた女子達は項垂れて意を唱える。

だが爆豪にピンクで甘い展開を求める事自体間違っていると上鳴は良い、瀬呂は腹を抱え指差しして爆笑していた。

「ギブゆうてるやろうがっ!!」

「ウグッ!」

「おお! あの体勢から逆に関節決めた! スゲエ!!」

「……おい、そろそろ止めねえか?」

ずっと傍観していた轟の一言でようやく場は収まった。

事の元凶である二人もおとなしくなり、いつもの調子に戻ったように見える。

「はあー、あのタイミング逃すなよー。告れよ爆豪ー」

「誰が告るかッ!」

芦戸が口を尖らせて言うと、短く怒鳴りつける爆豪。

それに続き、夜々はさも当然のように口を開いた。

「ま、告られてもうちが困るんやけどな!」

その言葉に肩を揺らす緑谷と爆豪。

まさかと思いい反射的に息を潜め、一言も逃さぬように耳を立てる。

「ええ! そうなの!」

「せや。昔な、ある友達と約束してん」

「約束？」

必然的にまた、A組の面々が注目する中で夜々はその約束を打ち明ける事になった。

「No. 1ヒーローになったらお嫁さんにしてくれるんやつて。それまでうちは恋人作るつもりないんや」

「ほへ〜」

間抜けな返事をする芦戸に、今度は夜々が肘で突き質問する。

「そういう芦戸はんは好きな人おるん？」

「いない！」

「いないんかい！」

軽くだがスパアンといい音を立ててツツコミを入れる。

この話題はそんな終わり方をし、そろそろ休憩も終わりだと誰かが呟く。

そして自然と、次の選手二名が腰を上げた。

ー

ー

ー

そして控え室に移動した緑谷。

今は座り込み、時間が許す限りイメージトレーニングを重ねていた。

遠距離技の鬼砲に目が行くが、彼女は生粋の近距離ファイター。それを再認識して自分との差の埋め方を模索する。

「体術は向こうに分がある…かと言って離れる訳にはいかない。掴まれたらアウトだろうな…それなら……………」

「私が……胃薬を飲んでから来た」

「あわつ！ ……オ、オールマイト!？」

突如として控え室のドアが開き、そこから顔色の優れない男が入室してきた。

どれだけ青ざめていても、その人は間違いなくNo. 1ヒーローのオールマイト…彼が入ってきた事で、緑谷は体勢を直して用件を聞

く。

「ど、どうしたんですか？」

「まずは飯田少年との一戦…見事だったよ…うっ」

「あ、ありがとうございます？」

これから次の試合だというのに、何故今それを言いに来たのか不審に思う。それはオールマイトの顔色が優れない事もあって、緑谷は褒められたことを手放しで喜べない。

「どうかしたんですか？」

「……緑谷少年。あの動きは一体誰から教わったんだ？」

「あの動き？ ……ああ！ それはよっちゃんに誘われて参加した合宿で……」

「…救いはないのか」

「ええ!？」

説明を終えるより早く膝を降り、オールマイトは絶望を感じるように四つん這いになる。

だがそれも束の間。すぐに立ち上がり、その場から離れようとする。

「いやすまない。それが確認したかっただけなんだ。体育祭は基本…君とはノータッチでいくつもりだったからね」

「オールマイト!?! 震えが！ 震えてますが大丈夫ですか!?!」

「ハッハッハッ！ 心配するほどじゃないさ。トラウマで吐きそうになってるだけだ」

「トラウマツ!?!」

控え室の扉に手を掛け、今度こそ退出した。

ただ扉が閉まる寸前にオールマイトは小言を挟む。

「くれぐれも…怪我はしないでくれよ」

「………はい」

しまった扉越しに、緑谷は数秒遅れて返事をした。

それからすぐに時間は訪れ、打倒夜々を志してから戦場に赴いた。

1

1

『レディース！ エンドウ！ ジェントルメンン！！ ついに始まるぜ！ 準・決・勝ー！ツ！！ 早速登場してもらおうか！ 入ー！ー場ー！ー！！』

準決勝ともなれば会場の雰囲気もまた変わる。

雄英体育祭という祭典も終盤に差し掛かっているのだ。

もう一位の座を奪い合う選手はたったの4人までに減っている。だからこそバトルの質も上がり、決勝に近づくに連れて熱気がどんどん上がっていく。

どうやらその熱気に上限はないらしい。

「……………」

そんな熱気に包まれた会場の中央で2人は相對する。

向かいからやってきた緑谷は僅かに震えて冷汗を流し、隠せていない不安が身体に出ていた。

だがその表情は楽しみを覚えているようで、不格好な笑みが口元に
出ている。

対して夜々は知ってか知らずか、少し見下すようなアングルで緑谷を見た。その顔は悪戯っぽい笑みをまた浮かべていて、彼女もこれから起こる事を楽しみにしているようだった。

「出久…全力で来んと怒るで？」

「ハハ……手加減する余裕なんてないよ」

『さあさあ始まるぜ！！ 待ちに待った準決勝！！ ……やべ、決勝前に待ちに待ったとか強めのワード使っちゃった。ま、いつか！！ 俺っちもテンション上がってるからよ、少しは大目に見てくれえ！！』

2人の会話を掻き消すように、実況席のマイクが吠えるようにトクを進める。

そして会場の観客や選手を含め、全員に心の準備をさせてから何度目かの戦いの火蓋を斬ろうとした。

もはやそのセリフは誰もが聞き慣れ、言い終えた瞬間にどちらかが仕掛けるのでは？ と、誰に言われるまでもなく刮目した。

――
――

「緑谷には悪いけど……やっぱ酒井か？」

「緑谷君は強いが、機動力に難があるのが僕としての感想だ」

「対して酒井の動きは、結構余裕がありそうだったな。機動力に関して言うなら、アドバンテージ取ってるのは酒井だろ」

「実際に戦った飯田と轟が言うんだ。決まりだな」

場所は移ってA組の観戦席。

そこには私情を挟まず平等に見て、どちらが勝つかを予想するクラスメイトの面々がいた。

「でもパワーなら緑谷ちゃんに武があるわ。問題はそれが諸刃だと言う所だけど……」

「爆豪、お前はどっと思おう？」

「ああん？」

話を振られた爆豪は、ドスの効いた声で面倒臭そうに返事をする。そして突き放すような口調で一言。

「んなもん酒井一択だろ」

「大丈夫爆豪くん！ 私情は挟んでない!？」

「あ……？」

ドスが深まるが、そんな爆豪に切島が宥めながら理由を聞く。

「……合宿で多少マシにはなったがクソデクはクソデクだ。酒井に接近戦で勝つには、アイツを上回るパワーをキープしなきゃなんねえ」

「マジ？ 緑谷のパワーでも、技術があれば差は埋められると思うんだけどな」

「それがクソデクにできねえから言ってるんだろ、バアーカ」

上鳴の反論をバツサリ切り捨てると、中途半端に議論を終わらせるのは気持ち悪いのか爆豪が一言二言補足する。

「それでもクソデクが勝つには、酒井が反応できない速度で殴らなきゃなんねえ。だがそれは、真面目眼鏡が言った通りカスレベルだ」
「俺は飯田だ！ それとそこまでは言っていないぞ!!」

「飯田くん！ 始まるよー！」

立ち上がり抗議しようとする飯田だが、準決勝が始まると麗日に知らされ慌てて座り直す。

そして他の観戦者同様に、戦いの火蓋が切られる瞬間を刮目した。

『レディ……………スタアアアアトオオオオ!!』

「……………はっ。」

案の定…開幕同時に距離を詰め、放たれた拳が鳩尾に突き刺さる。拳は人体の急所の一つを的確に減り込み、食らった側は否が応でも呼吸困難に陥る。

その隙に追撃を加え、連続で相手を畳み掛けようとする。

「……………マジ……………か」

上鳴は呆然とし、無意識に語力の低いセリフを溢す。

そんな彼の隣に座っていた爆豪は青筋を浮かべ、プルプルと震えていた。

「あ……………んのクソデクツ！ まだ隠してやがった!!!」

酒井の反応できない速度で動く事は出来ない。

それが出来ないから負けると断言された緑谷だが、もしそれが出来れば彼は本当に勝てるのだろうか？

きつと勝てるのではないだろうか。

フィールド上にはそう思わせる姿が……………先手を取って酒井を追い詰める緑谷が姿があった。

体勢を戻そうとする夜々を動きを拒むように、その拳が顎を突き上げる。

「出し惜しみは無しだ!! 全力で君を倒す!!!」

会場に備え付けられた集音マイクが、選手のそんな意気込みを拾った。

19. 少年少女の実力差

「爺さん」

とある屋敷……何故かその屋敷は半壊しており、今まさに修繕リフォームの真っ最中。

屋敷を囲う様に鉄棒を組まれ、それを足場にリフォーム会社の作業員がせっせと働いている。

そんな屋敷の座室には4人の人影があった。

そのうちの一人の女性が、隣に座っていたガタイの良い老人に向けて口を開く。

「何じゃ？」

「デメエこそ何を教えやがった？」

話しかけられた老人は畳の上胡座を描いたまま腕を組み、唸り声を上げるように首を捻る。

「力の使い方を突き詰めたんじゃが……」

疑問符を浮かべて考え込むが、ふと笑みを零して考えるのをやめた。

「いずれ空彦に教わるじやろうて口を閉ざしたが、出の字……緑谷出久は言われずとも機動力を求めたようだな。何度か見せたワシの正拳突きから盗んだんじやろうな」

「クククツ……良いねえ。有望株だな」

テレビに映っているのは生放送の雄英体育祭。

今まさにその緑谷が、夜々を相手に善戦している所だった。

「緑谷とかいう少年の初手は、やはり童子さんの技ですか。一体何をしたのでしょ……」

蚊帳の外だった2人の男のうち、初老の男が質問気味に呟いた。

そして老人の方は恨めしそうに画面に映る少年を見て愚痴を零す。

「ワシも煮え湯飲まされた技じゃ……」

――

――

――

『レディ…………スタアアアアトオオオ!!』

その合図がスピーカー越しに発せられたと思つたら、口から予期せず空気が漏れる。

本来なら肺に溜まっていたはずの酸素が押し出され、呼吸困難に陥つた夜々。

驚愕するがまだ表情が自分の感情に追いついていない。

それが追いつく前に、彼女の眼前に拳が迫る。

(……………なんやコレ)

ガードをする思考に辿り着く前に被弾。

彼女の両手は今、一手前に食らつた鳩尾を抑え込もうと身体の前に情けなく位置していた。

(…出久?)

片手を押さえられ、後退する身体を無理やり引き戻される。

その勢いに合わせて今殴り抜いた拳で裏拳を放つ。

今度は身体が横に揺れ、無意識伸びた足が倒れるのを踏み止める。

そして裏拳の勢いで逸れた顔を前に戻そうとするが、そこに反対の手でアツパーが放たれる。

(……………そっか……………これが今の出久か)

その勢いで身体ごと打ち上げられ、僅かにだが足が地面を離れる。

上へと浮遊した身体が重力に従って落ちる刹那……………宙で止まつた

一瞬に、緑谷はトドメと言わんばかりに拳を突き出した。

「スマッシュュッ!!」

くの字に曲がつた身体が吹き飛び、地面をバウンドする。が、夜々は身体を捻って体勢を正して両足で着地する。

「ツ!!」

身体を捻つた辺りで仕留めきれなかった事を察したのか、緑谷は既に駆け出しており夜々に追撃を放つ。

「……………効いたで。少しな♡」

「ツノが!…いつ!?!」

緑谷が打ち出した拳は掌で受け止められ、そのまま掴んで離さなかつた。

お返しとばかりに夜々はそのまま緑谷を引き寄せ、反対の腕を真横にピンと伸ばしていた。

そんな彼女の額に生えたツノは、僅かに発光して個性は発動済みだと知らせている。

（リアアットツ?! 避け……れない! 下手に避けてよっちゃんの後方に飛ばされればそのまま場外……ここは……）

軽く跳ねるように緑谷は夜々の腕に飛び込む。

「おろ?」

「グウツ!!」

夜々も自身の後ろへ飛ばすつもりだったのか、腕は攻撃を喰らう拍子に離されていた。

しかし緑谷が軽く跳び、自ら受けに入った事で飛ぶ方向が正面に変更される。

地についた緑谷は勢いを殺さずに膝を曲げ、転がるように夜々から距離をとってから立ち上がる。

『……な……なんだああああ!!? おいイレイザー! 展開早くて実況がおいつかねえよ!!』

『俺に言うなよ』

『しかも緑谷! 最初瞬間移動しなかったか!?!』

実況が騒がしいが、気にせずに夜々は緑谷の出方を伺う。

だが彼も攻めあぐねるように、ジリジリと立ち位置をズラすだけだ。

「出久。瞬歩は使わんの?」

「……へ? しゅんほ?」

「知らんのかい。最初にやった奴や」

瞬歩。

夜々の祖父、酒呑童子のような大柄な男性は、力こそあれど走るのは苦手な者も多い。

そのため酒呑童子は、足先に瞬間的に力を込めて弾くように地を蹴って移動する。

短い移動距離で連続では行えないが、その間だけなら飯田のレシピ

口と同等の速度で動ける技だ。

それは酒呑童子の正拳突きに組み込まれており、緑谷はそれを目で見て盗んだらしい。

「ああ……瞬步って言うんだ。ここぞと言う時に使わせてもらおうよ」
今度は緑谷が不敵に笑って構える。

しかしそれはハツタリで、緑谷はその技を使いこなせてはいなかった。

最初に使えたのは試合形式上存在する「レディ、スタート」の掛け声……その掛け声が始まる前に入念に形を作れたから使う事ができただけ。

実戦では設けることができない時間を使って技を構え、合図と同時に飛び出したのだった。

つまり決定的な隙が生まれない試合中では、もう使う事ができない。

(にしても不味いぞ……よっちゃんに手番を渡さずに一気に決めるつもりだったんだけど……)

「どしたー出久々。早よしないと、血イ飲むで〜?」

「嘘つかないでよ。もう飲んでるじゃないか!」

戯ける夜々にそう言えば、「ベツ」と言って舌を出してくる。

その時見えた歯が、ほんのり赤く染まっていた。舌も心なしか、より赤く染まっている。

「血を飲めば良いんだもんね。そりや指以外からも血は出るさ」

「口内炎なるさかい……本当はしたくなかったんやけどね」

攻めあぐねているのを見かねて、夜々はその場で屈伸を行う。そしてスジをグツと伸ばしてから、走り出すような構えを取る。

「接近戦恐れとるんか? そっちから来ないなら、こっちから行くで!!」

姿勢を落とし、クラウチングスタートのような体勢を取る。

それを見た緑谷はあからさまに警戒して、フルカウルを継続させたまま構える。

「鬼砲!」

「ちよっ!? 走らないんかい!!」

走り出すかと思えば上半身だけ起こし、緑谷に向けて極太のレーザーを放つ。

知つての通り操作性に優れた攻撃は、緑谷が避けた後も追尾して追う。

「ウチの口調移ってるで!」

「クッ……………」

夜々の軽口に付き合う暇はないのか、緑谷はフェイントを入れながら走って逃れようとする。

「よっど……………おわっ! 危なッ!」

「走らないんかい! って完全にうちの口調やん」

「……………フン……………セイッ……………」

「長年付き添う夫婦も似るってそーいや言うなあ」

「……………ハッ……………」

「もお、うちの事を意識し過ぎなんどちやいます?」

「…………………………」

「……………イズクノエツチー……………」

「精神攻撃やめてよッ!!」

顔を真っ赤にした緑谷が怒鳴れば、会場のあちこちで笑いが聞こえてくる。

しかしそんな事毛ほども気にせず夜々が仕掛けてきた。

「ごめんなー」

レーザーを避けた緑谷の側面から迫る夜々に、緑谷は舌打ちをしてから足を振り上げる。

「スマツシユー!」

地面を蹴り上げ、挟れた瓦礫片が夜々に放たれる。

ただ数も少なくダメージを無いと判断し、スピードを緩めずに突っ込む。すると…

「あらっ!?!」

「よしっ!」

突っ込んだ矢先に足払いを受け、夜々の眼前に自らの放った鬼砲が

迫る。咄嗟に鬼砲の進路を上に向けて自爆を避けるが、その間に一撃……緑谷から新しく攻撃を受け付けてしまう。

「ぐっ……むう」

反撃しようとした時には、既に距離をとっていた緑谷。

それを見て、口を窄める夜々。

「なるほどな……鬼砲はこれで封じた言うんか？」

「鬼砲の弱点はマニュアル操作だと言う事。その操作を意識すれば、よっちゃんのガードは甘くなる！」

「極め付けに瓦礫片で、少しでも意識を逸らすってか。カー、やってくれるやん？ 完封では無いにせよやり難いわ！」

だが夜々はこれで確信する。

緑谷はやはり接近戦インファイトを避けている。と……

「ほな、ガンガン行こか！」

「捕まったら終わりだ…捕まったら……」

逃げてばかりでは勝てない。

その身一つで来られては、遠距離攻撃を持たない緑谷が行き着く答えはそれだ。

逃げれないなら向かうしかないが、それは実にハードな選択だと認識している。

「ほっ……オッ!？」

「グウツ！」

夜々是对処される前提で様子見の攻撃を仕掛ける。それが緑谷にさばかれてからが勝負だ。

しかし手始めに放った拳は、予想を反してクリーンヒットした。様子見故に威力が低く、緑谷は然程苦もなくカウンターを放ってくる。

「そならー」

また最初のように連撃を仕掛けられる事を危惧して、夜々はすぐさま二発目を放った。

「ッ！」

これもまた当たり、先ほどよりも威力はあるにも関わらずカウンターを打たれた。

(脳が…揺れるんわ辛い……)

三発目に伸びた手は、緑谷の首元に迫る。

掴んでそのまま組み伏せようとしたのだが……

「フンッ！」

「……………」

その手は緑谷の手によって払われ、彼は体勢を構え直す。

「……………へえ〜〜」

そんな間延びした声を上げて、夜々は少しねちっこい言い方をする。

更に少しイラついたような…もしくは何かが彼女の尺に触ったのか、笑顔だが額に青筋が浮かび上がっていた。

「そうゆう事しちゃうんや〜鬼相手に〜ふ〜ん??」

『……………イレイザー、どゆこと?』

『お前、俺に聞いてばかりじゃねえか?』

『そんな事言わないでくれよ』

『……………緑谷は組み伏せられる事に関して細心の注意を払っている。それが酒井には気にくわねえんだろ』

『……………どゆこと?』

短い期間で出た同じ言葉に、相沢は溜め息を吐いたがちゃんと教えてくれた。

『組み技には対応しないが、パンチなら食らってやる……………緑谷は鬼を相手に、ノーガードで殴り合いしようっつってんだよ』

「こりゃ舐めれたなあ〜。よりによってノーガードで……………全国ネットまで吐いて昼食紹介するハメになっても、後悔すなよ?」

「……………ッ」

いつもは乾いた笑みでケラケラと笑っていた夜々だが、珍しくも緑谷を睨み付けて尋ねる。

それに返答はしないが、臆する事なく彼も睨み返した。

「ほな……………いくでッ!!!」

「ガッ!!!」

初手。振り上げるような右のボディブロー。

その一撃は重く、思わず嗚咽してしまう威力。だが……
「耐えれ……なくもない……」

踏み止まり浮きはしなかったその体勢で、緑谷は型にあった正拳突きを放つ。

姿勢を落として放ったそれは、夜々の鳩尾はまたも捉える。

「……鬼には悪手やて」

汗を滲ませながら言うと、次は左のフックが飛んでくる。

首が横に伸びきって意識が飛ぶのを必死に押さえ込んでカウンターを放つ。

そこからは殴り合いの応酬だった。

だが誰もが見てもわかる。圧倒的にダメージを受けているのは緑谷だと。

何度攻撃を食らっても、夜々はその衝撃を受けて身体や頭を反らせるだけ……対して緑谷は踏み止まる為に足が何度も動いている。

攻撃力と防御力から求められるダメージ比率が、2人の間でそこそこの差があった。

「oooooooo!!」

ただ、その殴り合いにも変化が生まれ始める。

綺麗にクロスカウンターが入った所からだ。

『またも両者の攻撃がヒットoooooooo!! だが緑谷はもう限界かッ!?!』

緑谷の拳は夜々の顔面の側面を捉える。否、夜々が拳を顔面の側面で受けた。

(……舐めてるわけでは無いみたいやな)

夜々はアッパーを食らって脳が揺れ、千鳥足で後退する緑谷を見て思う。

そして流れた冷汗を拭い、夜々は恨めしそうに睨みつけた。

(徐々にやけど……合わせてきてる)

腕力が劇的に上昇したわけでは無いが、夜々に加えられるダメージ量が増え始めている。

原因は緑谷の攻撃する場所。合宿で叩き込まれた急所突きの精度

が、徐々に上がり始めているのだ。今になって制度が上がる理由は、単に夜々の動きに慣れてきたからだろう。

「……………いかん。まだ揺れちよる」

自分の頭をコンコンと叩き、回る視界が元に戻るのを待つ。

その間も緑谷の動向には注意し、その場で出方を伺う。

(顎に入ってたら危なかったな……………)

もしもの事を考えると、また冷汗が頬を伝うがすぐに目の前の出来事に意識を戻す。

実を言うと夜々は殴り合いに関しては素人……………というより、喧嘩の延長線のようなもので、技術らしい技術は無い。

タフネスとパワーで殴る。それで大概は通用するし、むしろ力加減を間違えれば大惨事。だからこそ周囲の鬼たちも組み技の無力化を学ばせていた。

だがその結果、緑谷はまだ立っている。

もし夜々がもう少し殴り合いに特化していれば、今のアッパーで緑谷の意識は飛んでいただろう。なんならもつと早く決着はついていた。

視界が正常になりつつある中で、夜々は僅かな苛立ちを覚える。売られた喧嘩を買ったが自慢の力が満足な結果を出さない。

そして喧嘩を買ったからには、今更組み技で終わらせたく無い。もし組み技を使って試合に勝っても、それは勝負に負けた事になる。

このまま負けたとしたら、その敗因は喧嘩を買ったことだ。

そんな事を考えていると視界がいつもの見え方に戻る。

もう地面は傾かず、頭も揺れていない。

「悪いな……………これで終わりや」

すぐさま駆け出し、振り上げた拳が緑谷へと突き放たれる。

その腕で許される所まで引き絞ったソレが緑谷の身体を捉える前……………そのタイミングで緑谷は左手を夜々に向けた。

「……………ごめん。よっちゃん」

「……………はっ」

向けられたその手は、親指で中指を引つ掛けるように構えられてい

た。

俗に言う”デコピン”。

「スマアアアツシュ!!!」

巻き上がる砂埃と吹き抜ける突風。

それを発生させた指先は、当たつてはいないが夜々のすぐ前にあつた。

「グッ……アツ……!?!」

至近距離で放たれた空気の壁を叩きつけられ、夜々はステージの端まで飛ばされる。

轟のように凍らせてストップパーを作れない夜々は、”気圧”を用いて辛うじて踏みとどまった。

「……………」

線をはみ出て無い事を確認して胸を撫で下ろすのも束の間、目を丸くして緑谷に視線を戻した。

「グッ……アアア………」

一回り二回り腫れ上がったその指は、痛々しい青紫色に変色していた。

その指を抱え込むように押さえる緑谷だが、苦痛を噛みしめながら顔を上げる。

「……………何してん……」

「……………へへっ」

「へへ、やない! 何してん聞いたんや!!!」

怒気を強め、叱るように言う。

しかし緑谷は軽く苦笑いを浮かべるだけで、そこまで悪びれる様子は見えない。

そこに……………

「ぎげんじゃねえデクローツ!!!」

観客席から一際でかい罵声が飛んできた。

それは二人も聴き慣れた、愛想のない幼馴染の声だ。

「その先に……その先に、俺はいねえぞ!!!」

「……………勝己の言う通りやで」

一眼でわかる重症の指……原因はわかりきっていた。

緑谷 出久が保有している”個性”……”ワン・フォー・オール”。許容限界8%のそれを100%で……緑谷はいつかの身体能力テストのように指先のみを使用した。

「もしこれで勝っても……決勝戦には出れないだろうね」

試合での怪我はリカバリーが治してくれる。

しかしそれは”治癒力を前借りする”個性であって、傷を癒すだけのエネルギーを保有していない患者には使えない。

緑谷がこのレベルの重症を重ねていくと、それを治すだけのエネルギーを持たない彼を、決勝戦前に完治させる事は出来ないだろう。

その先に俺はいない。とはそう言う事だ。

それでも緑谷はその手段に出た。

「僕はNo. 1ヒーローになる！ 今は君にも負けてしまうような僕だけ……そんな僕だからこそ！ 君には全力で戦いたい!! 全てを出し切りたいんだ……君に見合うヒーローに成るために!!」
そう言つて腰を落とし、右腕を腰で構えて拳を固く握りしめる。
また100%で使う気ようだ。

それも今度は指一本と言わず右腕一本で。

「……ハア……」

大きく息を吸つて、吸つたそれを全て溜め息として吐き出す。

そして夜々は自分の右手首に齧り付いた。

皮膚を割いてその下に歯が達し、そこから溢れる血液を喉を鳴らし
て飲み干していく。

やがてツノが帯びていた光が、一層強く輝いた。

「プハッ……ハア。まったく……」

呆れた様子で、夜々は右人差し指を緑谷に向けて構えた。

「うちの惚れた男どもは、どうしてこんなに手がかかるん？」

「……いくよ」

緑谷の右腕には身に余るパワーが爆誕する。

同様に夜々の指先に溢れんばかりの妖力が凝縮されている。

(いけない！)

それを直感で感じたのか、審判として立っていたミッドナイトはその場を離れてセメントスに目を向ける。

セメントスもミッドナイトが待避したのを見て、夜々と緑谷の間に何層ものコンクリの壁を一瞬にして築いた。

」

――

――

日本で見られる和風な方の城。その城にある畳張りの大広間。

一畳からはみ出る事なく、正座したまま頭を垂れて顔を伏せていた。

そうしていると、正面から「カン」という短い物音が聞こえた。

煙管で灰皿を叩いたか、酒瓶を台に乗せたのか、一体何をしたのかは顔を伏せているため分からない。

ただそこに誰かがいるという事だけはわかった。

その人物は勇者か？ 英雄か？ それとも魔王か？

わからない。だが頭を下げずにはいられない……そんな人物だ。

「……………ぬるい」

」

――

――

「……………はっ」

目を覚ますと保健室に居た。

間抜けな疑問系の一音を発してから身体を起こし、ブーツとする頭も少しずつ目覚め始める。

隣のベッドに目をやると、そこでは腕に包帯を巻いた幼馴染が眠りについていていた。

健やかな寝息を立てる彼を起こさぬよう、夜々は物音を立てないよう自分の寝てたベッドから降りる。

「起きたかい？」

「起きた。うち勝ったん？」

「勝ったよ」

お茶を組んでいたのか、お盆に乗せた湯飲みを持って席に戻ってきたリカバリーガール。

彼女に尋ねれば自分は勝つたのだと短く伝えられる。

全力放った鬼砲は、セメントスの築いた複数枚の壁を砕き抜いた。緑谷の全力も同様に壁を砕き、それでも有り余った威力同士が衝突。そして拮抗し相殺た所で、夜々の記憶は終わっていた。

どうやら強化した事で耐えれた貧血だが、鬼砲に全エネルギーを使って素に戻った拍子に倒れたらしい。

ダブルノックアウトで引き分けかと思えば、夜々はステージ上に残ったが風圧で緑谷が場外に飛ばされたとの事。

「……………危なかったんやな」

「危なかったなんてもんじゃないよ！ まったく…母親といい無茶するんだから」

「お？ リカバリーオバちゃんもオカン知ってるん？」

「リカバリーオバちゃんはやめなッ！」

「はい」

相沢と違い凄い剣幕で怒鳴るリカバリーガールに、夜々は即答で従った。

「それはそうと……………百升モードだったかい？ アレは禁止だよ」

「……………あー、やっぱり血が足りん？」

「鬼に人の血は輸血出来ないからねえ。治癒で多少は増血できたけど……………個性を使うなら十升まで。それを破ったら即失格と伝えておくからね」

「……………わかりました」

気の抜けた返事に、リカバリーガールは不審そうな目で夜々を見る。

「なんだい？ まだどこか具合が悪いのかい？」

「いやちゃうねん……………なんか…変な夢見て……………思い出せんのか」

そう言っと思いつく出そうとする素振りを見せたが、すぐに諦め、緑谷をその場に残留して観客席に夜々は戻る。

「……………と、その前に」

眠っている緑谷の横へ行き、しゃがんで彼の耳元で語りかける。

「あんな我儘…もうせんでよ？ でも……………」

更に耳元に口を近づける。

「少しだけカッコ良かったよ」

そんなセリフを最後に、今度こそ夜々は観客席に戻った。

保健室には、リカバリーガールと緑谷が残される。

「……………」

「ズズツ……………あんたは思いの外重症で、あと5分は目覚めない。それで良いね？」

「……………ありがとうございます」

か細い声で誰かがそんな事を言った気がしたが、きつと気のせいだろう。

「……………緑茶がやけに甘いねえ」